

中城御殿跡(首里高校内)総括編

— 首里高校校舎改築に伴う発掘調査(4) —

令和7(2025)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

沖縄県立首里高等学校の校舎改築工事に伴い、沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成25(2013)年度から令和4(2022)年度にかけ、7次にわたり発掘調査を実施してきました。

現在の首里高校の敷地には、中城御殿や大美御殿、櫓園、浦添按司屋敷など複数の施設があったことが歴史資料から分かっており、発掘調査ではこれらの施設に伴う様々な遺構のほか、その前身となるグスク時代の遺構が見つかっています。

このうち、次期国王となる世子の邸宅として17世紀前半の尚豊王代(在位1621-1640)に創建され、1870年頃まで当地に存在したとされる中城御殿跡からは、首里古地図に描かれる石積や石牆と考えられる遺構が確認されました。また、石積や造成土の堆積状況などから、中城御殿での大規模な造成の様相が明らかとなったほか、その東側で確認された真和志村跡(道遺構)の遺構配置状況からは、中城御殿や隣接する大美御殿、櫓園との境界も判明しています。

このような調査成果は、これまでに刊行された3冊の発掘調査報告書において、すでに報告されていますが、出土遺物の多さや整理期間の都合により、当時十分な整理ができず報告されなかった資料や、同一の遺構としてまとめて概観することのできなかった遺構があります。本報告書は、こうした遺物や遺構を補完するとともに、これまでに実施した調査成果を踏まえ、中城御殿跡(首里高校内)の時期ごとの様相をまとめた総括報告書としました。

本事業は当初、記録保存を目的とした発掘調査でしたが、続々と発見される貴重な遺構を後世に残すため、関係者の皆様には遺構の保存に影響の無いよう配慮いただき、工事立会に際しても多大な協力をいただきました。これもひとえに、学校関係者をはじめ県教育庁施設課、県土木建築部施設建築課、工事関係者の皆様の文化財保護へのご理解があったからこそです。そこで本報告書では、遺構保存に向けた取り組みについても触れております。

本報告書が、首里地区の歴史のみならず、沖縄県の歴史や文化を理解する資料として活用されるとともに、文化財保護やその活用についても関心をもていただければ幸いです。

最後に、発掘調査及び資料整理、ならびに遺構保護に際し、指導助言・協力をいただきました関係各位の皆様を重ねて厚く御礼申し上げます。

令和7(2025)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 池田 潤

例 言

- 1 本報告書は教育庁施設課からの予算令達を受け、平成25(2013)から令和4(2022)年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した首里高校敷地内に所在する埋蔵文化財(中城御殿跡)の発掘調査成果を総括したものである。
- 2 本報告書で報告する中城御殿跡は、那覇市首里真和志町2丁目首里高等学校敷地内に所在する。首里には中城御殿跡が2箇所存在するが、明治8(1875)年に移転した那覇市首里大町内に所在する中城御殿と区別するため、本報告書では本来の呼称に現在の所在施設名を加えた中城御殿跡(首里高校内)とする。
- 3 資料整理作業は、平成25(2013)から平成26(2014)年度及び令和5(2023)年度に実施した。報告書作成作業は令和6(2024)年度に沖縄県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 4 本報告書で報告する遺物は、一部を除き、平成29(2017)年刊行の『中城御殿跡(首里高校内)』にて、以後補完予定とされていた平成25(2013)から平成26(2014)年度調査の遺物包含層出土遺物である。遺構については、各年度の調査区をまたいで検出された一連の遺構をまとめて報告する。
- 5 首里高校敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、当初記録保存を目的とした調査を実施していたが、関係機関と調整を行い一部の遺構を除き、現地保存を行っている。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡略称は、Ⅰ・Ⅱ区については「首高中」、Ⅲ区以降は「首高内」である。
- 7 本書で用いたレベル数値は、標高である。
- 8 地図データは、国土地理院の電子国土webシステムから配信されたものを使用している。
- 9 本報告で使用している座標は、世界測地系の第XV系を用い、方位は座標北を用いた。
- 10 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』に基づく。
- 11 本書の編集は、調査体制で記した方々の協力を得て、照屋匠美が行い、編集補助を儀間真章が行った。執筆は下記以外を照屋が行った。また、第5章は下記執筆者と検討を行い、照屋が執筆した。
第4章 第2節 出土遺物観察一覧
中国産白磁、その他の中国産磁器、タイ産陶磁器、ベトナム産磁器、本土産陶磁器・・・久場大暉
中国産青花・・・古堅あゆみ
沖縄産無釉陶器・・・花城城子
沖縄産施釉陶器、石器・石製品、玉、ガラス製品・・・金城翼
石器・石製品・石造物・石材・・・大堀皓平
- 第4章 第3節 自然遺物
第1項・・・丸山真史
第2項・・・高橋遼平
- 12 引用文献は本文中に(執筆 発表年)で示し、執筆者は適宜略称を用いた。遺物観察に用いた文献等は、巻末にまとめて掲載した。
- 13 本書に掲載された写真は、現地調査記録写真を亀島慎吾、玉城綾、奥平大貴、太田樹也、我喜屋優真、島袋桃子、平良愷、波照間紗希、古堅あゆみ、株式会社アーキジオパシフィック支店が撮影した。
遺物写真等は照屋匠美、古堅あゆみ、金城礼子、照屋芳美が撮影した。
- 14 本報告書に掲載されている遺物及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目次

序	
例言	
第1章 発掘調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	6
第4節 資料整理経過	6
第5節 立会調査	
第1項 経緯と経過	6
第2項 立会調査成果	7
第6節 遺構の現地保存	
第1項 現地保存に至る経緯	7
第2項 遺構保護	7
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	12
第3章 発掘調査資料	
第1節 調査区の設定	20
第2節 層序	22
第4章 発掘調査の成果	
第1節 遺構	
第1項 III-1層(18世紀～中城御殿移転まで)	29
第2項 III-2層(17世紀末以降)	33
第3項 III-3層(中城御殿創建～17世紀代)	36
第2節 人工遺物(平成25年度調査)	
第1項 遺物の概要・分類	38
第2項 層序別の遺物出土状況	53
第3節 自然遺物	
第1項 中城御殿跡の動物利用	57
第2項 沖縄県中城御殿跡(首里高校内)から出土したイノシシ・ブタのDNA解析	61
第5章 総括	
第1節 グスク時代	72
第2節 近世(III-3層：中城御殿創建～17世紀代)	72
第3節 近世(III-2層：17世紀末以降)	76
第4節 近世(III-1層：18世紀～中城御殿移転まで)	78
第5節 近現代	81
第6節 まとめと遺跡の評価	83
引用・参考文献	87
巻末図版	89
報告書抄録	156

挿図目次

図1 敷石遺構の保護方法	7
図2 窪地にある遺構の保護方法	7
図3 重複した遺構の保護方法	7
図4 遺構の保護	8
図5 工事立会	9
図6 工事立会箇所	10
図7 中城御殿北側にある井戸	14
図8 洞穴遺構	14
図9 内の井戸(ウチヌカー)	14
図10 指(佐)司笠樋川(サシカサヒジャー)	14
図11 沖縄県の位置	15
図12 中城御殿跡(首里高校内)の位置及び周辺の遺跡	16
図13 航空写真	17
図14 首里古地図	18
図15 グリッド設定図と年度別調査区	21
図16 模式図	22
図17 層序1	24
図18 層序2	25
図19 層序3	26
図20 層序4	27
図21 抜出遺構位置図	28
図22 SF5001 検出状況(南から)	29
図23 SF7001・SD7001 検出状況(北から)	29
図24 道跡 平面図1	30
図25 石敷遺構検出状況(南から)	30
図26 道跡 平面図2	31
図27 道跡 平面図3	32
図28 SA 2 検出状況(北西から)	33
図29 SA4001 検出状況(北から)	33
図30 SA5005 検出状況(西から)	33
図31 SA4001 サンゴ石灰岩近影	33
図32 東西軸石積 平面図・立面図	34
図33 SA 3 検出状況(北から)	36
図34 SA7001 検出状況(北から)	36
図35 東西軸石積(古) 平面図・立面図	37
図36 堀内金付着1	41
図37 堀内金付着2	41
図38 層序ごとの石材出土量	43
図39 各遺構の魚類組成	57
図40 同一個体で検出した変異の様子(矢印部)	62
図41 本稿の資料とNCBI由来の配列を用いて作成したmtDNA-loop領域(592bp)のMJネットワーク	63
図42 DNA サンプリング資料1	66

図 43	DNA サンプルング資料 2	67
図 44	DNA サンプルング資料 3	68
図 45	DNA サンプルング資料 4	69
図 46	DNA サンプルング資料 5	70
図 47	DNA サンプルング資料 6	71
図 48	グスク時代の遺構平面図	73
図 49	グスク時代の遺構平面図 古地図重ね図	73
図 50	Ⅲ - 3 層の遺構平面図	74
図 51	Ⅲ - 3 層の遺構平面図 古地図重ね図	74
図 52	Ⅲ - 2 層の遺構平面図	77
図 53	Ⅲ - 2 層の遺構平面図 古地図重ね図	77
図 54	Ⅲ - 1 層の遺構平面図	79
図 55	Ⅲ - 1 層の遺構平面図 古地図重ね図	79
図 56	近現代層の遺構平面図	82
図 57	近現代層の遺構平面図 古地図重ね図	82
図 58	調査区全体平面図・航空写真重ね図	84
図 59	首里高校生対象の現地説明会	86
図 60	首里高校生対象の現地説明会	86
図 61	首里高校生への遺跡内容説明会	86
図 62	遺跡説明板設置予定地	86
図 63	遺跡説明板	86

図版 目次

図版 1	Ⅳ層(グスク時代)の遺構 1	89
図版 2	Ⅳ層(グスク時代)の遺構 2	90
図版 3	Ⅳ層(グスク時代)の遺構 3	91
図版 4	Ⅳ層(グスク時代)の遺構 4	92
図版 5	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 1	93
図版 6	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 2	94
図版 7	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 3	95
図版 8	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 4	96
図版 9	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 5	97
図版 10	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 6	98
図版 11	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 7	99
図版 12	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 8	100
図版 13	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 9	101
図版 14	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 10	102

図版 15	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 11	103
図版 16	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 12	104
図版 17	Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 13	105
図版 18	I 区作業風景遠景	106
図版 19	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 1	108
図版 20	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 2	109
図版 21	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 3	110
図版 22	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 4	111
図版 23	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 5	112
図版 24	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 6	113
図版 25	Ⅲ - 2 層(17世紀末以降)の遺構 7	114
図版 26	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 1	115
図版 27	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 2	116
図版 28	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 3	117
図版 29	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 4	118
図版 30	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 5	119
図版 31	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 6	120
図版 32	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 7	121
図版 33	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 8	122
図版 34	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 9	123
図版 35	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 10	124
図版 36	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 11	125
図版 37	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 12	126
図版 38	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 13	127
図版 39	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 14	128
図版 40	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 15	129
図版 41	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 16	130
図版 42	Ⅲ - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 17	131

	131
図版 43	Ⅲ - 1 層(18世紀~中城御殿移転まで)の遺構 18132
図版 44	I・II 層(近現代)の遺構 1133
図版 45	I・II 層(近現代)の遺構 2134
図版 46	I・II 層出土遺物135
図版 47	II・III・III - 1 層出土遺物136
図版 48	III - 1 層出土遺物137
図版 49	III - 1 層出土遺物138
図版 50	III - 1 層出土遺物139
図版 51	III - 1 層出土遺物140
図版 52	III - 1 層出土遺物141
図版 53	III - 1 層出土遺物142
図版 54	III - 1 層出土遺物143
図版 55	III - 1 層出土遺物144
図版 56	III - 1 層出土遺物145
図版 57	III - 1・III - 2 層出土遺物146
図版 58	III - 2 層出土遺物147
図版 59	III - 2 層出土遺物148
図版 60	III - 2・III - 3 層出土遺物149
図版 61	III - 3 層出土遺物150
図版 62	III - 3 層出土遺物151
図版 63	III - 3 層出土遺物152
図版 64	III - 3 層出土遺物153
図版 65	III - 3・IV 層出土遺物154
図版 66	IV 層・不明出土遺物155

挿表目次

表 1	工事立会一覧11
表 2	首里高校関連年表19
表 3	遺構記号凡例22
表 4	層序および対照表23
表 5	報告書掲載遺構一覧36
表 6	ガラス玉集計表42
表 7	層位ごとの石材出土数43
表 8	出土遺物観察一覧 a44
表 9	出土遺物観察一覧 b45
表 10	出土遺物観察一覧 c46
表 11	出土遺物観察一覧 d47
表 12	出土遺物観察一覧 e48
表 13	出土遺物観察一覧 f49
表 14	出土遺物観察一覧 g50
表 15	出土遺物観察一覧 h51
表 16	出土遺物観察一覧 i52
表 17	平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 a54
表 18	平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 b55
表 19	平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 c56
表 20	SX14 魚類遺存体集計表58
表 21	SX41 魚類遺存体集計表58
表 22	SX42 魚類遺存体集計表59
表 23	DNA 解析を行った資料の一覧61
表 24	再現性を得られなかった4資料と、これらと近縁な配列タイプの間の変異64

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

埋蔵文化財事前審査願 平成22(2010)年度に沖縄県立首里高等学校(以下「首里高校」)の現校舎の老朽化に伴い、耐震化を図る必要性が生じたため、グラウンド部分に新校舎を改築することが決定した。事業者である沖縄県是那覇市教育委員会文化財課(以下「那覇市文化財課」)に、「埋蔵文化財事前審査願」を平成22(2010)年10月7日付で提出した。これを受けた那覇市文化財課は、平成22(2010)年11月5日付で沖縄県に対し「現況不明」とし、今後調整が必要と回答した。

試掘調査と初期の調整 那覇市文化財課は、平成23(2011)年8月1日から試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構を確認した。那覇市文化財課から試掘調査結果の報告を受けた沖縄県教育庁文化財課(以下「県文化財課」)は、8月30日に現地視察し、8月31日には県文化財課、沖縄県教育庁施設課(以下「県施設課」)、沖縄県土木建築部施設課(以下「県施設課」)による合同現場調整が行われた。9月9日に現地の首里高校グラウンドにて県文化財課、那覇市文化財課、受注業者である国吉設計、国吉組による話し合いがもたれた。9月21日には県施設課、県施設課、県文化財課、国吉設計の集った調整会議において、継続して実施される発掘調査に要する経費は原因者である県施設課が負担することになった。なお、グラウンド北側の沈砂池予定地の発掘調査及びグラウンド南側の試掘調査は、現石積に近づきすぎると石積倒壊の恐れがあることから、掘り下げ対象は2.5m以上離れた場所で行うこととなった。さらに、グラウンド北側の普通教室棟改築予定地の発掘調査については、平成24(2012)年度以降に実施することが決定した。

工事の中断 校舎改築予定地内の埋蔵文化財の広がりを確認するため、平成23(2011)年12月8日までの間、那覇市文化財課が試掘・確認調査を断続的に実施した。その結果、グラウンド全域に遺物及び遺構の分布が確認されたため、工事は中断されることとなった。この結果を踏まえ、那覇市文化財課は本発掘調査を要する旨を県文化財課に報告し、平成24(2012)年3月27日に調査結果をまとめた報告書を提出した。

中城御殿跡の確認 平成24(2012)年2月から3月にかけて、県文化財課立ち会いのもと、校舎改築予定地内のグラウンド部分の造成土を掘削したところ、遺構の保存状態が良好なことが確認された。遺構の平面測量を実施した上で、発見された石積遺構と1700年代に描かれたとされる「首里古地図」を重ね合わせる作業などを行い、当該地が17世紀前半に創建された中城御殿跡である可能

性が高いことが判明した。

工事中断と不発見の発見 平成24(2012)年3月には埋蔵文化財の発見により中断していた工事の継続が困難と判断され、校舎改築工事の契約が終了した。ここまでの間、不発見が17点発見されていることから、今後の発掘調査や改築工事に伴い、さらに不発見が発見される可能性が指摘された。

令和3(2021)年度に実施した旧普通教室棟の地中梁及び基礎撤去後に実施した発掘調査において、不発見が1点発見され、同日中に自衛隊が処理し回収した。けが人などはなかった。

調査実施主体の決定 那覇市文化財課と県施設課は今後の埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、県文化財課が実施主体となり発掘調査を実施することとなった。これを受け、平成24(2012)年1月20日に県文化財課から沖縄県立埋蔵文化財センター(以下「埋蔵文化財センター」)へ発掘調査実施の打診があり、発掘調査に伴う必要経費の算出や現地確認を行うこととなった。

関係者への説明会と要請 平成24(2012)年度には、首里高校関係者への工事中断説明会や首里高校保護者説明会を実施した。そのような状況の中、首里高校校舎改築の早期実現を求める要請が首里高等学校PTA会長、養秀同窓会会長、元首里高校校長会雄志の会会長の連名で、平成24(2012)年11月19日付で沖縄県教育長あてに「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」が提出された。

南側石積の写真測量 平成25(2013)年2月14日から3月29日の間、県文化財課は発掘調査に先立ち南側石積のトレンチ掘削及び石積の写真測量を実施した。

文化財保護法に基づく手続き 平成25(2013)・26(2014)年度当初、文化財保護法に基づく諸手続きは、改築工事に伴う範囲として首里高校グラウンド部分のみを対象として行われていた。今後の校舎改築工事は、首里高校の敷地全域に及ぶことから、事業主体である県施設課と県文化財課で調整を行い、改めて文化財保護法に基づく手続きを行うこととなった。

平成27(2015)年12月8日付で沖縄県知事から那覇市教育委員会に対し、首里高校全域を対象とした「埋蔵文化財審査願」が提出された。これを受けた那覇市教育委員会は、平成28(2016)年1月26日付けで沖縄県に対し、首里高校改築工事のために申請された敷地内には遺跡があり、保存のための調整が必要との回答を行った。

その後、那覇市教育委員会は平成28(2016)年2月2日付け那市文財第419号で沖縄県教育委員会に対し、首里高校内の埋蔵文化財について、確認調査等の対応を実施するよう依頼した。これを受け、県文化財課は平成28(2016)年2月9日付け教文第1646号で那覇市教育委員会に対し、首里高校校舎改築工事に伴う確認調査等は、沖縄県

教育委員会が実施すると回答した。

これにより、事業主体となる県施設課は、平成28(2016)年10月24日付け教施第1123号で沖縄県知事名により那覇市教育委員会経由で、文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を沖縄県教育委員会へ提出した(進達文書は平成28(2016)年10月27日付け那市文財第298号)。これを受け、県文化財課は平成28年11月7日付け教文第122号で、校舎改築に伴う土木工事等は埋蔵文化財に影響を及ぼすため、工事着手前に発掘調査を実施することに加え、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議するよう回答した。

その後、県施設課、県施設建築課と調整を行い、解体工事に伴う立会調査は県文化財課と埋蔵文化財センターが行い、本調査は埋蔵文化財センターが実施することになった。

調査着手後には、文化財保護法第99条の規定により、県文化財課へ着手報告を行い(平成30年9月18日付け埋文第441号、令和3年3月25日付け埋文第623号、令和3年7月21日付け埋文第264号、令和4年1月28日付け埋文第635号)、調査終了後には終了報告を行った(平成31年4月26日付け埋文第127号、令和3年6月21日付け埋文第190号、令和3年10月27日付け埋文第452号、令和4年5月11日付け埋文第103号)。発掘調査により発見された遺物については、文化財保護法第100条2に基づき、県文化財課に埋蔵文化財発見届を提出した(平成31年4月26日付け埋文第126号、令和3年3月16日付け埋文第185号、令和3年10月27日付け埋文第453号、令和4年5月11日付け埋文第104号)。

工事立会 本調査の他、校舎改築工事の際に、埋蔵文化財に影響が及ぶ可能性がある際には、平成28(2016)年度から随時立会調査を実施している。令和6(2024)年度に刊行した沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡—首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)—』では、令和4(2022)年8月23日から10月11日に実施した旧普通教室棟校舎の基礎梁撤去工事までの状況が報告済みであるため、本書では令和6(2024)年度に実施した分について報告する。詳細については第5節第2項で述べる。

現地保存 発掘調査で確認された各種遺構は、近世期中城御殿やそれらに関連する遺構について、校舎改築やグラウンド造成工事に影響しない部分は現地保存することとした。工事に影響する部分については、最小限の掘削になるように現地で調整を行いながら調査を実施した。また、現地保存した遺構上や周辺において工事掘削を行う際には、事前に図面などを提供してもらい、現地保存している遺構への影響を確認した。発掘調査を実施していない箇所の工事については工事立会を実施し、そ

の都度、遺構の現地保存に向け、調整を行った。詳細については第6節で述べる。

第2節 調査体制

首里高校内埋蔵文化財発掘調査は、平成25(2013)・26(2014)年度及び平成29(2017)年度から令和4(2022)年度まで現地で発掘作業を行い、平成25(2013)年度から令和6(2024)年度にかけて資料整理作業及び本総括報告書を含む4冊の報告書作成を実施した。なお、現地での発掘作業は民間調査組織の支援業務委託を導入した。各年度の実施体制は以下のとおりで職名は当時のものである。

事業形態 沖縄県教育庁施設課令達事業 平成25(2013)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 諸見里明
教育管理統括監 島田勉
参事 石垣安重

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 新垣悦男
記念物班 班長 盛本勲
主任専門員 長嶺均

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地英雄
副参事 島袋洋
総務班 班長 新垣勝弘
主任 平良広海
調査班 班長 金城亀信
主任専門員 羽方誠
専門員 亀島慎吾

発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員

井上奈々、新屋敷小春、比嘉優子、宮里知恵、
徳嶺里江、玉城美香、杉山千曜、幸地千明、
保久盛陽

資料整理 埋蔵文化財資料整理嘱託員

伊藤由希、上原園子、幸地麻美、島袋久美子、
嘉数渚、嶺井幸恵、宮城初枝、山城美奈、久
貝祐子

支援業務委託 株式会社アーキジオパシフィック支店

主任調査員 天久朝海
調査員 本村麻里衣

平成26(2014)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 諸見里明
教育管理統括監 山城秀史
参事 運天政弘

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 嘉数卓

記念物班 班長 金城亀信

主任専門員 長嶺均

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地英輝

副参事 島袋洋

総務班 班長 新垣勝弘

主任 比嘉睦

調査班 班長 盛本勲

主任専門員 羽方誠

専門員 亀島慎吾

発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員

新垣有一朗、幸地千明、杉山千曜、玉城美香、
保久盛陽

資料整理 埋蔵文化財資料整理嘱託員

並里千佳、比嘉紗恵理、宮里美也子、高安那
津季、照屋麻美、島袋久美子、屋我尚子、矢
舟章浩、安里綾子、喜屋武朋子、具志みどり、
譜久村泰子、又吉利文、山城由紀子**支援業務委託** 株式会社アーキジオパシフィック支店

主任調査員 天久朝海

調査員 本村麻里衣

平成27(2015)年度(資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 諸見里明

教育管理統括監 山城秀史

参事 運天政弘

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章

記念物班 班長 金城亀信

主任専門員 中山晋

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地英輝

副参事 盛本勲

総務班 班長 新垣勝弘

主査 比嘉睦

調査班 班長 上地博

主任専門員 羽方誠

専門員 亀島慎吾

発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員

赤嶺志乃、井上奈々、太屋匡史、翁長圭乃子、
幸地千明、新屋敷小春、玉城綾、仲嶺真太、
仲屋勝哉、波照間紗希、眞謝太地、宮城瑠美
子

資料整理 埋蔵文化財資料整理嘱託員

並里千佳、比嘉紗恵理、宮城美也子、高安那

津季、照屋麻美、島袋久美子、屋我尚子、矢
舟章浩、安里綾子、喜屋武朋子、具志みどり、
譜久村泰子、又吉利文、山城由紀子**支援業務委託** 株式会社アーキジオパシフィック支店

主任調査員 天久朝海

平成28(2016)年度(資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人

教育管理統括監 宜野座葵

参事 新垣悦男

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章

記念物班 班長 上地博

主任専門員 中山晋

指導主事 神村智子

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城亀信

副参事 濱口寿夫

総務班 班長 比嘉智博

主査 比嘉睦

調査班 班長 仲座久宜

主任専門員 瀬戸哲也

専門員 亀島慎吾

発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員

大家匡史、仲嶺真太、外間裕一、松堂正偉、
久場大暉、平良和輝

資料整理 埋蔵文化財資料整理嘱託員

宮城かの子、嘉数渚、富岡郁子、比屋根沙耶香、
城間綾香、花城咲子、手嶋永子、池宮城聡子、
下地勝恵、嶺井多津美、平安百合子、伊集左
季、知名雪美、宮城綾子、外間太一郎、仲松
安花奈、領家範夫、渡慶次学、安里綾子、下
里利美

非常勤職員(事務補助) 古見晶子、山城光子

支援業務委託 株式会社アーキジオパシフィック支店

主任調査員 天久朝海

平成29(2017)年度(発掘調査・資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人

教育管理統括監 宜野座葵

参事 親泊信一郎

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章

記念物班 班長 上地博

主任専門員 中山晋

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城亀信

総務班 班長 比嘉智博
 主任 糸数見子
 調査班 班長 仲座久宜
 主任 亀島慎吾
 専門員 玉城綾
 専門員 田村薫
 発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員
 我喜屋優真、平良和輝、波照間紗希、外間裕一
 資料整理 埋蔵文化財資料整理嘱託員
 糸数永子、慶田秀美、鈴木友璃子、照屋芳美、
 仲間文香、宮城友香

支援業務委託 株式会社アーキジオパシフィック支店
 現場代理人 天久朝海
 調査員 本村麻里衣

平成30(2018)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 平敷昭人
 教育管理統括監 宜野座葵
 参事 親泊信一郎

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課
 課長 濱口寿夫
 記念物班 班長 仲座久宜
 主任専門員 羽方誠

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 登川安政
 総務班 班長 比嘉智博
 主任 糸数見子
 主事 富山彬
 調査班 班長 中山晋
 主任 亀島慎吾
 専門員 玉城綾
 発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員
 太田樹也、我喜屋優真、小橋川里江、島袋桃子、
 城間宏次朗、平良和輝、平良悟

支援業務委託

(本調査VII区) 株式会社アーキジオパシフィック支店
 現場代理人 本村麻里衣
 調査員 天久朝海

平成31・令和元(2019)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 平敷昭人
 教育管理統括監 儀間秀樹
 参事 識名敦

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課
 課長 濱口寿夫
 記念物班 班長 仲座久宜
 主任専門員 羽方誠

主任 宮城淳一 事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 城田久嗣
 総務班 班長 池田みき子
 主事 富山彬
 調査班 班長 中山晋
 主任 玉城綾
 専門員(臨任) 太田樹也
 発掘調査作業 埋蔵文化財調査嘱託員
 我喜屋優真、島袋桃子、平良和輝、平良悟、
 波照間紗希
 資料整理作業 埋蔵文化財資料整理嘱託員
 上田麻紀子、金城礼子、新城京美、鈴木友璃子、
 照屋芳美、比嘉なおみ、手嶋永子、池宮
 城聡子、宮城友香、仲間文香

令和2(2020)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 金城弘昌
 教育管理統括監 儀間秀樹
 参事 佐次田薫

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課
 課長 諸見友重
 記念物班 班長 仲座久宜
 主任専門員 新垣力

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 瑞慶覧勝利
 総務班 班長 池田みき子
 主事 富山彬
 調査班 班長 中山晋
 主任 亀島慎吾
 主任 玉城綾
 専門員 奥平大貴
 発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員
 太田樹也、平良和輝、古堅あゆみ
 資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員
 安次嶺沙織、兼島小百合、金城礼子、新城京
 美、照屋芳美、上田麻紀子、仲間文香、宮城
 友香、安里メグ、東伸千夏

支援業務委託

(VII区) 株式会社アーキジオパシフィック支店
 現場代理人 天久朝海
 調査員 本村麻里衣

令和3(2021)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 金城弘昌
 教育管理統括監 佐次田薫
 参事 山城英昭

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 諸見友重

記念物班 班長 仲座久宜

主任専門員 新垣力

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 瑞慶覧勝利

総務班 班長 池田みき子

主任 石原昌一郎

調査班 班長 中山晋

主任 玉城綾

専門員 奥平大貴

発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員

平良和輝、古堅あゆみ

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

安里メグ、上田麻紀子、大村由美子、金城礼

子、新城京美、津田恵、照屋芳美、仲間文香、

比嘉美智子、大城友理華

支援業務委託

(Ⅷ区) 株式会社アーキジオパシフィック支店

現場代理人 天久朝海

(旧普通教室棟試験調査等Ⅸ区)

株式会社アーキジオパシフィック支店

現場代理人 宮平千春

調査員 知念沙季

令和4(2022)年度(資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶺満

教育管理統括監 佐次田薫

参事 山田みさよ

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 瑞慶覧勝利

記念物班 班長 仲座久宜

主任専門員 金城貴子

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 前田直昭

総務班 班長 池田みき子

主任 石原昌一郎

調査班 班長 中山晋

主任 玉城綾

主任 奥平大貴

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

安里メグ、市川里恵、上田麻紀子、大城友理

華、大村由美子、金城礼子、新城京美、照屋

芳美、仲間文香、比嘉美智子、玉寄智恵子

令和5(2023)年度(資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶺満

教育管理統括監 山田みさよ

参事 大宜味勝美

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

課長 瑞慶覧勝利

記念物班 班長 新垣力

主任専門員 亀島慎吾

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 前田直昭

総務班 班長 城間奈津子

主任 石原昌一郎

調査班 班長 中山晋

主任 玉城綾

主任 奥平大貴

史跡・埋蔵文化財調査員

古堅あゆみ

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

金城礼子、照屋芳美、仲間文香、比嘉美智子、

金城亀信、儀間真章、玉那覇美野

令和6(2024)年度(資料整理)**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶺満

教育管理統括監 田代寛幸

参事 諸見友重

事業所管課 沖縄県教育庁文化財課

参事兼課長 瑞慶覧勝利

記念物班 班長 新垣力

主任専門員 亀島慎吾

事業総括・事務 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 池田潤

総務班 班長 城間奈津子

主任 富山彬

調査第2班 副参事兼班長 仲座久宜

主任 照屋匠美

史跡・埋蔵文化財調査員

久場大暉、古堅あゆみ

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

金城礼子、照屋芳美、儀間真章

令和6年度資料整理・工事立会協力者及び協力機関(所属等は当時のもの)沖縄県立首里高等学校、教育庁施設課、土木建築部施設
建築課、丸山真史(東海大学)、高橋遼平(山梨大学学
院)、株式会社北盛建設

第3節 調査経過

平成25(2013)年度調査

調査期間：7月29日～平成26年3月28日
調査区：Ⅰ区～Ⅶ区
調査面積：約5,230㎡
主な遺構：石積擁壁、柱穴、土坑(廃棄土坑)、石組土坑、石列、井戸、溝状遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第93集『中城御殿跡(首里高校内)～首里高校校舎改築に伴う発掘調査～』

平成26(2014)年度調査

調査期間：4月7日～平成27年2月27日
調査区：Ⅰ区～Ⅶ区
調査面積：約5,230㎡
主な遺構：石積擁壁、柱穴、土坑(廃棄土坑)、石組土坑、石列、井戸、溝状遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第93集『中城御殿跡(首里高校内)～首里高校校舎改築に伴う発掘調査～』

平成29(2017)年度調査

調査期間：8月24日～平成30年4月27日
調査区：Ⅱ区(立会)、Ⅲ区、Ⅳ区
調査面積：約1,220㎡
主な遺構：石積擁壁、柱穴、土坑(廃棄土坑)、石組土坑、石列、井戸、溝状遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡～首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)～』

平成30(2018)年度調査

調査期間：9月12日～平成31年4月24日
調査区：Ⅴ区、Ⅶ区
調査面積：約2,683㎡
主な遺構：石積擁壁、柱穴、土坑(廃棄土坑)、石組土坑、石列、井戸、溝状遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡～首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)～』

令和2(2020)年度調査

調査期間：令和3年3月2日～6月11日
調査区：Ⅷ区
調査面積：約890㎡
主な遺構：石積、石組土坑、石列、石敷遺構、道跡、溝状遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡～首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)～』

令和3(2021)年度調査

調査期間：7月14日～10月26日
調査区：Ⅷ区
調査面積：約280㎡
主な遺構：礎石根固め石、土坑(廃棄土坑)、石組遺構、植栽痕
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡～首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)～』

令和4(2022)年度調査

調査期間：1月28日～4月28日
調査区：Ⅷ区梁下、Ⅸ区
調査面積：約618㎡
主な遺構：柱穴、灰跡、石敷遺構
掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡～首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)～』

第4節 資料整理経過

総括報告書の刊行に向け、令和5(2023)年度及び令和6(2024)年度に資料整理作業を実施した。遺構図や土層図等の過年度に報告した図面については、再整理及び集成した図を作成した。また、これらの作業と並行して、原稿執筆及び編集を実施した。

掲載遺物 平成25(2013)年度の調査で出土した遺物の中から、年代観の把握が可能な中国産陶磁器、本土産陶磁器等を中心に選定した。各遺構や層序毎の出土遺物の点数は第4章で示す。

自然遺物 脊椎動物遺体や貝類も多く出土した。これらの遺物は、当遺跡の食性等を考える上で重要であることから、高橋遼平氏(山梨大学大学院)、丸山真史氏(東海大学)に執筆を依頼した。第4章第3節に掲載する。

総括報告書の刊行 令和6(2024)年12月23日に、印刷製本業務を行うため一般競争入札を実施した。落札した株式会社アント出版と契約を締結し、令和7(2025)年3月25日に本総括報告書を刊行した。

第5節 立会調査

第1項 経緯と経過

首里高校内で確認された遺構は、現地保存が可能な部分に関しては、遺構保護の白砂を敷き詰めた上で埋戻しを行い、地中保存している。そのため、地中保存している遺構付近や未調査範囲などを掘削する際は、関係機関と事前調整し、当センター職員と教育庁文化財課職員が立会調査を行った。調査済みの箇所については遺構への

影響の有無を確認し、未調査範囲で新たな遺構が確認された場合には記録保存調査を実施した。

立会調査は平成28(2016)年度から随時実施し、令和6(2024)年度まで行っている(令和6年12月時点)。本報告書では令和6(2024)年度の立会調査成果を報告する。過年度の立会調査については各報告書を参考にされたい。立会調査の概要については、表1に示す。

第2項 立会調査成果

令和6(2024)年度は、首里高校南側の運動場整備工事に伴い、立会調査を実施した(図5・6)。そのうち、駐輪場予定地となっている東側の一部範囲は調査未実施であり、西側ではⅢ区1地点(令和3(2021)年度調査)にて石積(SA8001・8002)が確認されている。

調査未実施箇所には、コンクリート舗装されたスロープが設置されていた。現地表面から約1m掘削を行ったが、過年度調査時にI層とされた客土のみを確認、遺構等は確認されなかった。また、当該地は前述した石積(SA8001・8002)の延長部にあたる可能性もあったが、今回は掘削範囲外であったため、確認できていない。当該石積は調査時、地表面直下(約3cm)下で遺構上部が露出することが分かっており、今後、掘削する際は注意が必要である。

なお、その他駐輪場予定地の立会も行ったが、地中に残存する埋蔵文化財への影響はなかった。

第6節 遺構の現地保存

第1項 現地保存に至る経緯

那覇市文化財課の試掘・確認調査により、グラウンド全域に遺物包含層及び遺構が確認され、平成23(2011)年12月に校舎改築工事が一時中断された。この間、県文化財課は遺跡保存に向け、平成24(2012)年7月6日に那覇市都市計画課都市デザイン室と校舎改築の設計変更について調整を進めたが、校舎の耐震面や那覇市都市景観審議会(以下「景観審」)の意見、グラウンドが使えないことによる学校側の負担等から、設計変更は困難との判断に至った。これにより、中城御殿跡は、記録として遺跡を後世に残す「記録保存調査」として、平成25(2013)年7月29日から沖縄県立埋蔵文化財センターにより、調査が開始された。しかし、調査が進むにつれ、遺構の保存状態が極めて良好であり、学術的にも重要な遺跡であることが判明したことから、沖縄県教育委員会教育長や県議会議員に対し、沖縄考古学会、日本考古学協会等から遺跡の保護・活用を求める要請・陳情が提出された。

その後、県議会の審議を経て、平成27(2015)年10月8日に現地保存案に基づく処理方針が採択されたことにより、校舎の安全を確保しつつ、遺構への影響が最小限と

なる工法についての検討が可能となり、関係機関との度重なる調整によって設計変更が行われ、遺構の現地保存が可能となった。

第2項 遺構保護

遺構の保護方法については、これまで沖縄県立埋蔵文化財センターが実施してきた遺構保護方法を参考に検討を進めた。埋戻しの材料には白砂を採用し、遺構の種類に応じて埋戻しの深さや土質を使用するなど、工法を変更している(図1～図4)。これにより、中城御殿跡では、数多くの遺構を現地に保存することが可能となった。

上記の詳細については、1冊目の報告書(2017)に記載しているので参照されたい。なお、V～IX区における遺構現地保存の概要については、2冊目の報告書(2021)に記載している。

敷石 保護砂による土被りを20cm以上確保して埋戻すことにより遺構を保護する。



図1 敷石遺構の保護方法

窪地にある遺構 窪地を保護砂で覆うが、遺構から土被りが20cm以上になるよう確保する。また、遺構最上部から20cm上部に埋戻し高を設置する。

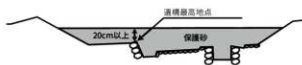


図2 窪地にある遺構の保護方法

石積 埋戻し及び造成工事の水平荷重により損傷を受けないように、全面に大型土嚢を設置し、その間を保護砂で埋戻す。また、保護砂被りは20cm以上確保し、石積最上部から20cm上部に埋戻し高を設定する。なお、石積の近くに別の遺構がある場合は、上記の方法で複数の遺構を保護し、距離がある場合は遺構ごとに保護を実施する。

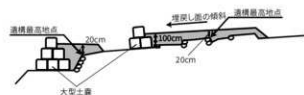


図3 重複した遺構の保護方法

洞穴遺構 ドーム状に天井と奥行を有する遺構で、そのまゝの状態では十分に保護砂を充填できないことから、天井の一部に0.5mの穴をあけ、そこから砂を充填した。その際に出た天井部分の石については床面に落とした状態で埋戻した。また、洞穴内は水が滲み出すことから、埋戻しの際は排水作業を並行して行った。なお、洞穴遺構は記録保存調査対象であったため、事前に記録作業を行っている。



1 遺構保護砂



2 I区 保護砂埋戻し状況(東から)



3 SA4003 保護砂埋戻し状況(南東から)

図4 遺構の保護



4 SF5001 保護砂敷き均し状況(南東から)



5 SF5001 埋戻し状況(北東から)



6 SA5002 保護砂埋戻し状況(南西から)



7 洞穴遺構 保護砂埋戻し状況(南西から)



1 スロープ掘削作業状況(南西から)



2 スロープ堆積状況(西から)



4 駐輪場予定地 掘削作業状況(西から)



3 スロープ掘削後状況(南から)



5 駐輪場予定地 堆積状況(北から)

図5 工事立会

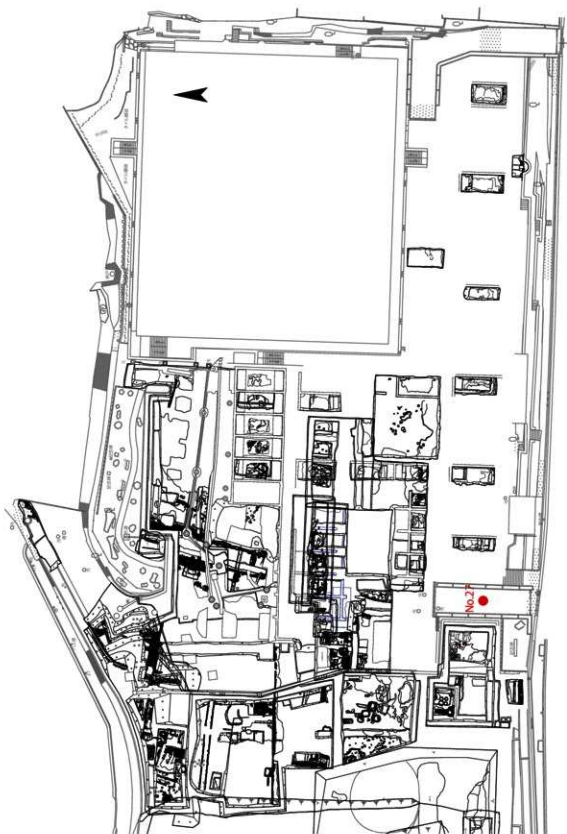


図6 工事立会箇所(番号は表1に対応)

表1 工事立会一覧

№	調査年		期間	立会箇所・工事	埋蔵文化財 への影響
	元号	西暦			
1	平成28	2016	12月14日～19日	旧理科棟(調査田区にあたる)	A
2	平成29	2017	1月10日～17日	Ⅱ区	A
3	平成29	2017	3月30日	A型側溝設置工事	A
4	平成29	2017	4月14日	綾門大道 旧校舎南西部(案内看板撤去)	A
5	平成29	2017	6月8日	旧普通教室棟南側 電気配管	A
6	平成29	2017	6月30日	綾門大道 街灯移設工事	B
7	平成29	2017	8月11日～23日	Ⅲ区 校舎基礎梁掘削(SD3001確認)	C
8	平成29	2017	9月21日～10月6日	南門(校舎側・綾門大道側)の掘削	B
9	平成29	2017	10月11日	水道管理設場所の掘削(2か所)	C
10	平成29	2017	10月13日	南門(校舎側)既設石積の撤去工事	C
11	平成29	2017	11月1日	南門(南西側)入口部分の排水溝設置工事	A
12	平成30	2018	5月10日	Ⅳ区(現Ⅶ区)部分の土掘削	A
13	平成30	2018	6月27日～7月27日	校舎(旧管理棟)上屋部分解体	A
14	平成30	2018	8月7日～22日	V区校舎(旧管理棟)基礎部分掘削 先行調査として緊急発掘調査を実施	C
15	令和元	2019	5月30日～6月18日	V・Ⅵ区 校舎基礎梁撤去工事	B
16	令和元	2019	7月9日～12日	H鋼打設工事	B
17	令和元	2019	9月30日・10月11日	新校舎(東棟)根切工事	B
18	令和2	2020	2月10日～17日	旧校舎基礎梁撤去工事	B
19	令和2	2020	2月25日～4月20日	汚水樹移設工事(試掘調査実施)	C
20	令和2	2020	4月28日～5月15日	新校舎(東棟)根切工事・既設汚水管撤去工事	C
21	令和2	2020	7月30日～31日	新設雨水管設置工事	A
22	令和2	2020	12月15・18・21日	普通教室棟北側のA型側溝設置工事	A
23	令和2	2020	12月15・22～25日	正門新設工事	A
24	令和3	2021	1月19日	正門付近の汚水管新設工事	A
25	令和3	2021	9月16日～10月14日	旧管理特別棟校舎の基礎梁及び浄化槽撤去工事	B
26	令和4	2022	8月23日～10月11日	旧普通教室棟校舎の基礎梁撤去工事	A
27	令和6	2024	10月8日・12月3日	運動場整備工事	A

影響凡例 A：影響なし、もしくは包含層・遺構の確認のみ B：包含層の掘削を伴う C：遺構の掘削を伴う

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

これまでの調査から、中城御殿跡及び櫓園跡、大美御殿跡が確認されている。

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らしの邸宅を指す。名称の由来は、王子が王世子(王位継承者)になると、領地として中城間切(現在の中城村、北中城村)及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。

中城御殿は17世紀前半の尚豊王代(在位1621-1640)、に王府の別邸である大美御殿の西側、現首里高等学校敷地内(首里真和志町)に創建された。その後、明治3(1870)年に旧県立博物館跡地(首里大町)に移転することが決まり、明治8(1875)年に移転する。ここでは、移転する前の中城御殿について記す。

遺跡の位置 遺跡は、沖縄本島南部の那覇市首里真和志町2丁目に所在し、標高約90~100mの台地縁辺部及び斜面地に位置する。

基盤層 この基盤を構成しているのは、地質時代の第四紀更新世(180-160万年前から1万年前)に区分される琉球石灰岩で、遺跡全体に広がり確認できた。下位には、新鮮世(500万年前から160万年前)から中新世(2300万年前から500万年前)に区分される島尻層群が堆積している。表層を成す琉球石灰岩は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ(泥岩・砂岩)の面でとめられ、両者の境界から湧き出すこととなる。平成25(2013)・26(2014)年度の調査時に確認した中城御殿跡関連の井戸や水を溜めるための遺構は、クチャ層まで掘り込まれ、現在でも豊富な水量を誇っている。

遺跡地からの景観 当該遺跡地からは、首里城や移転後の中城御殿跡の所在する場所に比べ、わずかに標高が低い位置に所在している。当遺跡が盛行していた時期には、ここから首里城を見上げるような場所であったことが想定される。

第2節 歴史的環境

これまでの調査範囲を首里古地図に重ね合わせると、中城御殿跡や櫓園跡、大美御殿跡に加え、浦添按司屋敷が含まれる。しかし、浦添按司屋敷の遺構については、後世の学校建設に伴う削平の影響により、確認できていない。

首里古地図 1700年代に描かれたとされる「首里古地図」に首里高校の敷地を重ねてみると、西側には中城御殿、東側には大美御殿や櫓園(かぢ木植所)、浦添按司屋敷、

浦添殿内余地が含まれる。その他周辺には、金武按司屋敷や美里御殿、そして、現在も所在する安国寺や玉陵も描かれている。中城御殿跡周辺は首里古地図では、寺院や王府関係の屋敷は詳細に描かれるが、各按司の屋敷については、詳細に描かれていない。

中城御殿 次期国王の世子殿として、尚豊王代(在位1621-1640)に綾戸大道の北側に創建された。

創建時期 中城御殿は、尚豊王代に創建されたとされていることから、大美御殿や金武按司などの敷地の間に創建されたことになる。創建される以前の当該地の敷地については、文献史料などにも残されていないため、その前身となるものについては判然としない。

中城御殿の拡張 これに関する情報として、東恩納寛惇の記述を以下に引用する。

「(前略)寛永中尚豊第二子、佐敷王子尚文の為に宮建されたもので、当時は規模それほど大ではなかったと見えて、延宝(康熙十六・1677年)五月の例寄に、「中城御殿狭有之候間、玉城御殿・豊見城御殿相候様被追仰付候こと」とある。玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて取り広げた意味である。…」(東恩納寛惇1950「中城殿」『南島風土記』:再録 東恩納寛惇全集⑦ 238-240頁13-15行)

このことから、中城御殿が創建された当初は、大美御殿や金武按司の屋敷のみならず、玉城・豊見城両家の屋敷にも隣接しており、その後、中城御殿の敷地を玉城・豊見城両家の屋敷地を取り入れる形で拡張したことが伺える。

発掘調査の結果でも幾度かの造成を繰り返して、屋敷地を南から北へと拡張している様子が確認されている。これらの情報から、北側部分に両家の屋敷地があった可能性が高いが、そのことを示す遺構の確認は現在では困難な状況である。

中城御殿跡の屋敷配置 首里古地図の情報から読み取ると、描かれた当時の中城御殿は、四方を石積に囲まれ、屋敷内に南北を区分する形で東西方向に石積が描かれている。この石積には2か所途切れる地点があり、その一部には道が描かれ、もう1か所は空白となっている。屋敷外への出入り口は北側に1か所、南側に1か所描かれている。北側は石積が途切れた表現のみだが、南側は入口を引き込むような形で石積が描かれ、東側に門の屋根のようなものが描かれている。このことから、中城御殿跡の中心に入るための入口は南側にあったと考えられる。その門をくぐると一つの建物があり、さらに進むと御庭(うな)のような広場があり北側及び南側に建物が描かれている。広場の東側には建物が描かれ、階段のようなものが描かれていることから、周辺よりも高い場所に建物があったことが想定される。このことから、基壇があ

ったことやこの部分が屋敷の中心部であったことが考えられる。この屋敷配置は首里城の御庭や北殿、南殿、正殿の立地とよく類似している。

屋敷入口 入口について注目すると、隣接する大美御殿と比べ、入口までの引き込み道が長く描かれる。これは高低差があることから、入口をスロープ状に引き込んでいることを示している。

中城御殿の移転 同治6(1867)年の琉球国王による中城御殿の風水に関する諮問をきっかけに、風水師を含めた本格的な検討が開始された(沖縄県立埋蔵文化財センター 2023)。1868(明治元)年には尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小椋親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。この場所の選定理由については、1868年に久米村の地理師である与儀親雲上ら3人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされているように(球陽 2206号 球陽研究会編 1974)、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたとされていることから、移転理由のひとつとして、風水的な屋敷の選地が大きく関わっていたと想定される。1875(明治8)年に移転した後の当該地は菜園地になり、その後、国学が置かれたとされる。

移転後の土地利用 中城御殿跡の移転の際には、使用できる資材などを移転地に搬出していたことが想定される。発掘調査においても、屋敷を区画するような石積遺構は数多く発見されたが、屋敷の柱を支える礎石などについては一部を除き、確認することができなかった。礎石の破片石材は多く見られたが、屋敷配置を示す遺構として原位置を保つものではなく、屋敷の規模や広がりなどを想定することは困難である。

このような資材を移転先に持ち出したと考えられるが、移転後も当該地が菜園や学校の前身として、何らかの形で人が活動する場所として使用され続けることや、一部では沖縄県立第一中学校などの遺構が、中城御殿の石積に組み合う形で検出される状況も存在する。以上のことから、資材などは移転時に全て搬出されたわけではなく一部は残存しており、その後も使い続けられたと考えられ、これらの痕跡が結果的に遺構として断片的に検出されている。

大美御殿跡 1548(尚清22)年に尚清王の世子時代の別邸に3棟増築し、王子や王女誕生の際に産所とし、後世は夫人、王女、宮女たちが喪の期間を過ごすための御殿として創建された。当初は王城祭祀などの冠婚葬祭の会場として利用されているが、1660(尚賢13)年に首里城が火災にあい、その修繕までの期間は仮の王殿として使用された。また、ペリー提督を接待する場として使用されたり、金穀の収納なども担っており、様々な用途で使

れた施設である。

大美御殿のその後 1879(明治12)年の沖縄県設置後には、一部に首里役所が設置され、1925(大正14)年には県立第一中学校の運動場として取り込まれている。

大美御殿跡の建物配置 首里古地図には中庭を囲う4棟の主要な建物とその周辺に4棟の建物が描かれる。これまでの調査から、主要な建物があったと考えられる部分で関連遺構は確認されていない。その周辺では、断片的に柱穴や礎石の根固めと思われる遺構が確認されているが、旧校舎の地下構造物で分断され全容把握まで至っていない。しかし、SX9001(IX区)の下からは岩盤整形による階段が2段確認されている。

植園跡 中城御殿から道を挟んで東側に所在し、首里古地図には「かち木植所」とある。当該地の名称は球陽に照らし合わせると植園としていることから、古地図の表記は誤りとの指摘がされている(久手堅 2000)。

球陽によると、「本年(1821(尚瀛18)年)、新たに榎実・桐実を醸製する公署を建つ。榎実・桐実は、原来蟬立主取の家に在りて醸を為す。今次、新たに公署一楹を真和志村の植園(即ち玉陵の北にあり)に設け、榎実・桐実を醸して餐付・蠟燭を製す(属官は旧に照らす)」とある。

植園跡の遺構・遺物 これまでの調査から、螺鋸細工の材料として割り取ったと考えられるヤコウガイ片等を多く含んだ SM5002(V区)が確認されている。また、地点としては大美御殿跡にあたるが、SX9001(IX区)ではヤコウガイの中からウルシ属の種子が出土している。種子が入っていたヤコウガイには意図的に体層部分を大きく割り取った痕跡があることから、植園跡に関連する遺物と考えられ、植園では、螺鋸部材製作に関する作業に加え、ウルシ属の植物を何らかの形で使用していたことが考えられる。このような状況から、植園跡の一部の遺物は、後世の学校建設に伴う造成の際に大美御殿跡まで運ばれたことが想定される。

ウルシ属の種子と判明した分析結果については、沖縄県立埋蔵文化財センター第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡』2024に記載されている。

首里旧真和志村跡 首里高校敷地内の東側部分(浦添按司屋敷内)で一部発掘調査が行われ、中城御殿などの前身となる14世紀後半から16世紀代の柱穴跡や近世以降に属する石組遺構の一部が確認されている(那覇市教育委員会 2005)。当センターが実施している発掘調査においても16世紀代の柱穴やピットが確認されていることから、これらは当該時期の集落跡地との関係性が高い遺構と考えられる。

首里古地図にみられる井戸 首里古地図では、中城御殿の北側に井戸が描かれているが、この井戸は露出した状態で現存している。これまでの調査で中城御殿跡内に

は、井戸や水場関係の遺構、洞穴遺構が確認されている。しかし、これらの遺構や美里御殿内と想定される場所に現存する井戸(内の井戸、那覇市教育委員会 2010)については、首里古地図に描かれていない。

首里古地図に描かれない井戸があることについて、井戸の築造年代と首里古地図の描かれた年代に時期差があることが想定された(沖縄県立埋蔵文化財センター 2017)。しかし、前述した美里御殿やその他の按司屋敷内にある井戸等は基本的に描かれていないことから、これらの水場関係の施設は、基本的に首里古地図には描かれていなかったことが考えられる。

洞穴遺構 本遺構は調査により、クチャを掘り込み石積を構築した水溜施設と想定している(沖縄県立埋蔵文化

財センター 2017)。この周辺は、沖縄戦時の爆弾破裂痕により、攪乱された状態で遺構等が確認できないが、洞穴遺構が地下に掘り込まれる形で形成されているため、遺跡周辺に所在する指(佐)司笠樋川(サシカサヒージャー)のように、かつては階段等で水源まで下りるための構造があった可能性がある。

首里古地図に描かれる道路 首里古地図に描かれる地形や道路に関しては、近世当時の道路が多く残存していることが判明している(高橋 2000)。北側に現存する井戸と確認された道跡では高低差があるが、道跡は北側に向けて緩やかに傾斜していることから、井戸が存在する部分まで続いていたことが想定される。



図7 中城御殿北側にある井戸



図9 内の井戸(ウチヌカー)



図8 洞穴遺構



図10 指(佐)司笠樋川(サシカサヒージャー)

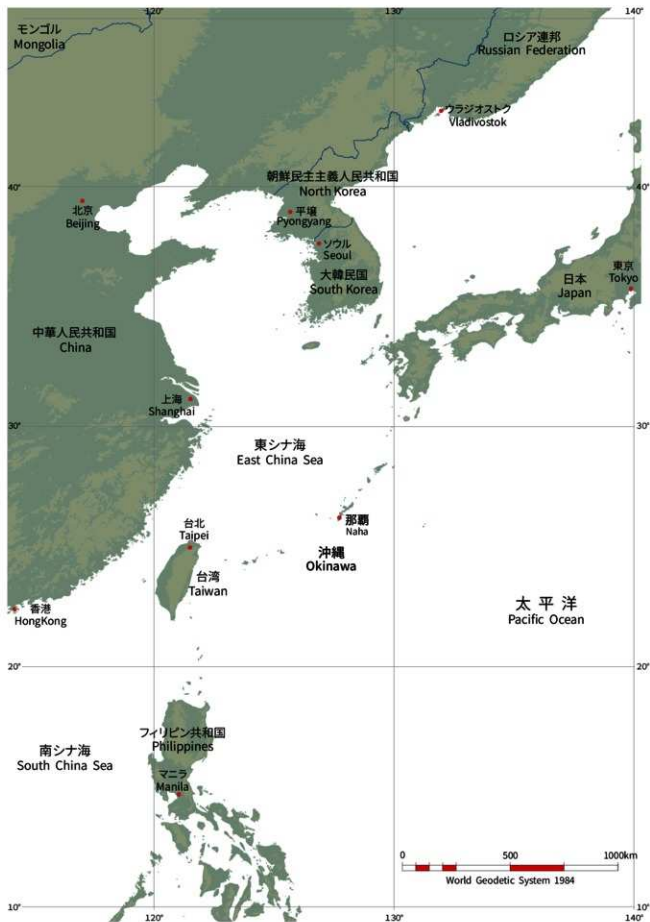


図 11 沖縄県の位置

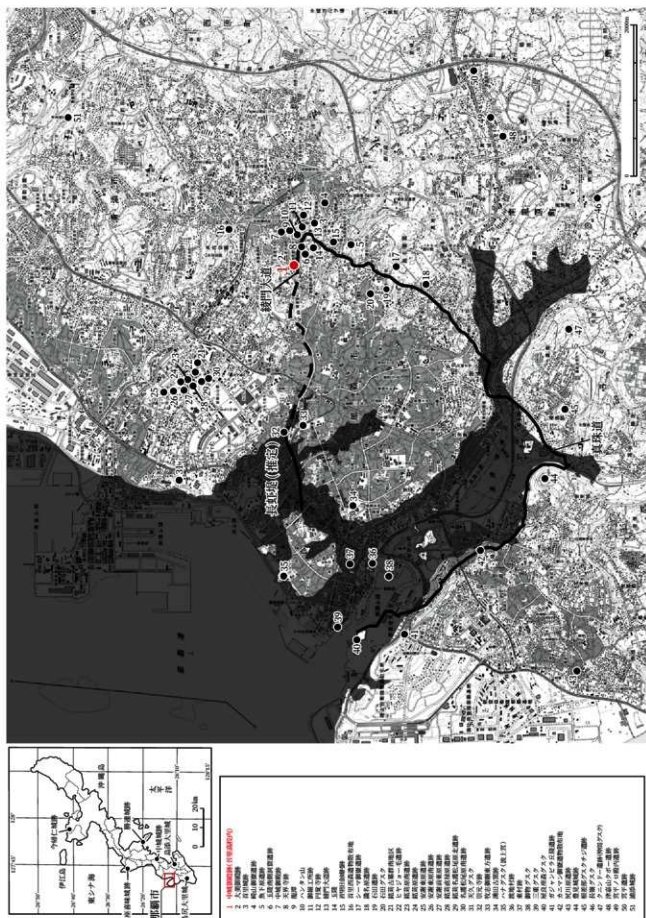
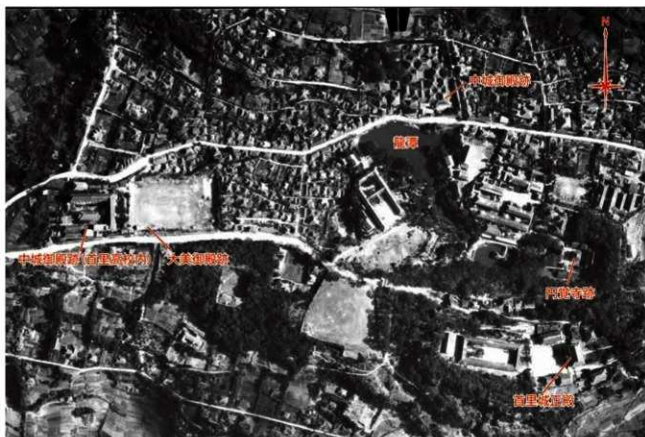


図 12 中城御殿跡 (首里高校内) の位置及び周辺の遺跡 (濃いトーンは概ね近世の海岸線 新島 2005 参照)

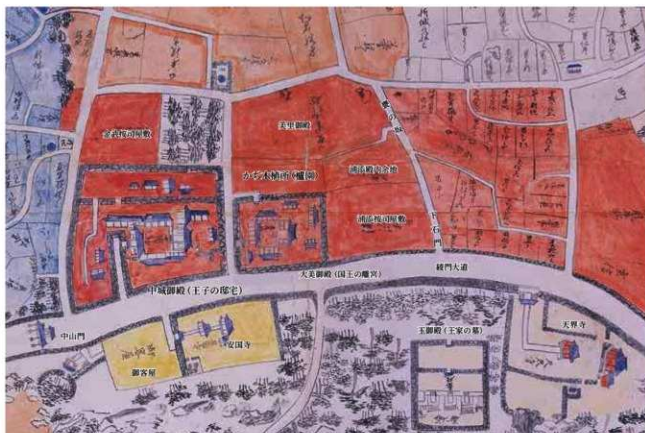


米軍撮影航空写真(1945年撮影)(沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵)



中城御殿跡(首里高校内)周辺航空写真

図13 航空写真



首里古地図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変) (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)



首里古地図と学校敷地重ね図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変)

図 14 首里古地図

表2 首里高校関連年表

西 暦	元 号 琉球／日本／中国	事 項
1547年	尚清21／天文16／嘉靖26年	大美御殿着工
1548年	尚清22／天文17／嘉靖27年	大美御殿竣工
1621～40年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される。
1677年	尚貞9／延宝5／康熙16年	玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて敷地を拡張する。
1798年	尚温4／寛政10／嘉慶3年	中城御殿内に公学校(国学)を開く。
1801年	尚温7／享和1／嘉慶6年	国学が龍潭近くに移転する。
1808年	尚温5／文化5／嘉慶13年	王子邸にて冊封使に「料理難走羅」が出される。
1821年	尚温18／文政4／道光1年	鎮主取の家宅で榎実や桐実の醸造していたものを、榎園の一部に醸造所を設置して餐附油や蠟燭を製造した。
1854年	尚泰7／安政1／咸豊4年	大美御殿でペリー提督が首里城を訪問する際に接待する。
1864年	尚泰17／元治1／同治3年	尚典(のちの中城王子)が生まれる。
1866年	尚泰19／慶応2／同治5年	尚泰王が冊封を受ける。
1868年	尚泰21／明治1／同治7年	尚典が尚泰王の世子となる。
1870年	尚泰23／明治3／同治9年	久米村の与儀親雲上ら3人を福州に派遣、風水を学ばせ中城御殿の風水看を行う。
1870年	尚泰23／明治3／同治9年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる。
1872年	尚泰25／明治5／同治11年	琉球藩設置 久場川薬園を廃除し、中城旧殿の宅内に改めて薬園を開き、栽培を行う。 按司奉行や親方奉行をこの役所に配置。
1874年	明治7／同治13年	中城御殿(現在の県立博物館跡地)竣工。
1875年	明治8年	中城王子尚典公が新築した屋敷に移る。
1879年	明治12年	3月 廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る。 廃藩置県に伴い、国学は県庁の所管となる。
1880年	明治13年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称。
1887年	明治20年	沖縄県尋常中学校と改称。
1891年	明治24年	沖縄県尋常中学校が現在の敷地(首里高校敷地内)に移る。
1899年	明治32年	沖縄県中学校と改称。
1901年	明治34年	尚泰王逝去し玉陵に葬られる。
1911年	明治44年	沖縄県立第一中学校と改称。分校が独立し沖縄県立第二中学校と称した。
1925年	大正14年	大美御殿建物が、沖縄県立第一中学校の運動場拡張に際して撤去される。
1930年	昭和5年	沖縄県立第一中学校、鉄筋コンクリート校舎が新築落成。
1944年	昭和19年	10月10日 米軍による空襲により旧那覇市の9割が焼失する(十・十空襲)。
1945年	昭和20年	首里の町並みとともに沖縄県立第一中学校も沖縄戦により壊滅する。
1946年	昭和21年	糸満高等学校首里分校として発足、首里高等学校として独立。
1980年	昭和55年	創立100周年に際し校舎を改築する(元のグラウンド部分)。
2011・12年	平成23・24年	那覇市教育委員会文化財課(試験)、県教育庁文化財課(造成土掘削、測量)。
2013・14年	平成25・26年	8月 沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査開始。
2015年	平成27年	首里高校敷地内の遺構について、可能な限り現地保存することが決定する。
2016年	平成28年	管理・特別教室棟着工
2017・18年	平成29・30年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ区) 管理・特別教室棟竣工
2019年	平成31年・令和1年	普通教室棟(西棟)着工
2020年	令和2年	普通教室棟(西棟)竣工・普通教室棟(東棟)着工・竣工

第3章 発掘調査資料

第1節 調査区の設定

グリッド設定 平成25(2013)・26(2014)年度の調査時に、遺構検出状況から1グリッド10m×10mを東西南北の方位に軸を合わせて調査区を設定した。グリッド名については北西を起点とし、東側へ1から25まで、南側へAからMまで順番に振っている(図15)。

発掘調査区 平成25(2013)・26(2014)年度は遺構検出状況等から、便宜的にⅠ～Ⅶ区まで地区分けを行ったが、継続的な調査に伴い、その後まとめてⅠ区として再設定した。それ以降は、改築工事計画に沿って調査区割りを行い、調査する順番でⅡ～Ⅶ区まで割り振った。また、各調査区の面積についてはCADソフトを使い、改めて算出しているため、過年度報告書記載の面積値と前後する。

調査区毎のエリア分け Ⅶ区の調査においては、平成30(2018)年度に実施した試掘調査から地中梁の間やその下に遺物包含層が確認できたため、令和2(2020)年度と令和3(2021)年度の2回に分けて調査を実施した。また、Ⅶ区は用地が狭小であったため2分割して調査を行った。両区ともに着順に1地点、2地点とし、既設埋設管や旧校舎の地中梁、基礎などで分断されているエリアごとに枝番号を振った。

Ⅰ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第93集『中城御殿跡(首里高校内)・首里高校校舎改築に伴う発掘調査』

報告書掲載調査区名：Ⅰ～Ⅶ区

調査区面積：約5,230㎡

概要：新校舎改築予定のグラウンド部分に設定した調査区。調査区内で最も広く、中城御殿に伴う造成が南側から北側にかけて行われたことを確認した。また、首里古地図の中城御殿内に描かれる東西に延びる石積を確認したほか、井戸やクチャを掘り込んで構築した洞穴遺構などの水場関連施設を確認した。

Ⅱ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)』

調査区面積：約660㎡

概要：校舎改築工事の進捗に伴い、今後、発掘調査を実施することが困難と考えられたことから設定した調査区。不発弾処理に重なっている部分もあり掘削が難しく、ほとんどが客土であった。一部で中城御殿に伴う造成土と思われる層を確認したが、工事の影響が及

ばないことから、現地保存とした。

Ⅲ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)』

調査区面積：約600㎡

概要：調査区内に使用中の既設埋設管があり、撤去が困難であったことから、配管を基準に東西に分けて調査を実施した。調査区東側では、中城御殿の北側石積、調査区西側では石組遺構を複数基礎確認した。

Ⅳ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)』

調査区面積：約590㎡

概要：Ⅰ区で確認された中城御殿の東西に延びる石積の延長部を確認したほか、この石積の前身と考えられる石積の延長部も確認した。

Ⅴ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集『中城御殿跡(首里高校内)・榎園跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)』

調査区面積：約1,700㎡

概要：旧校舎基礎や既設配管が多く、掘削が激しかったが、中城御殿と榎園の間の道を確認した。また、榎園に伴う遺構と考えられるヤコウガイ片を多く含んだ石組遺構を確認した。

Ⅵ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)』

調査区面積：約295㎡

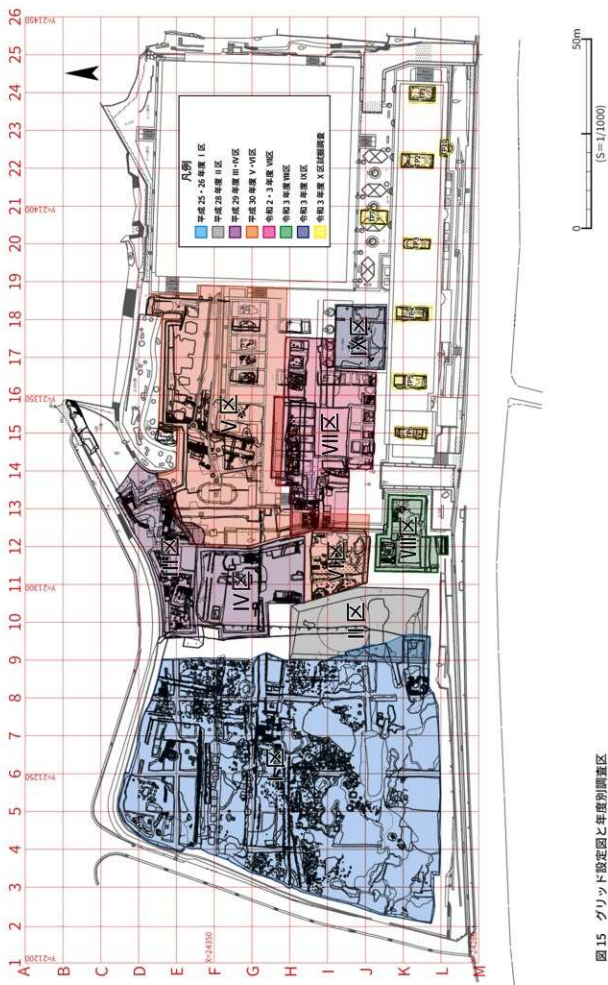
概要：石組遺構を複数基礎確認した。古く時代の柱穴も確認されたが、近世期の造成により東側は残っており、建物プランは組みなかった。

Ⅶ区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡・首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)』

調査区面積：約900㎡

概要：Ⅴ区で確認された道路の延長部を確認した。この道を境に東側が大美御殿跡、西側が中城御殿跡となっている。大美御殿跡側からはビット群や石列、石敷を確認した。校舎の梁下から検出したビット群は一部建物プランを組めたが、調査区北側の掘削が激しかったため、対となる建物プランは確認できなかった。ま



た、中城御殿跡側ではⅠ区やⅣ区で確認された石積の延長部のほか、複数の石組遺構を確認した。

VIII区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡-首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)-』

調査区面積：約280㎡

概要：井戸と考えられる石組遺構を中心に、礫を敷き詰めた溝のほか、近年埋められたと考えられる首里高校の石積を確認した。上部が積みなおされており、根石付近は近世の可能性があるが、配管の関係から深堀りして確認することはできなかった。

IX区

掲載報告書：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第117集『中城御殿跡(首里高校内)・大美御殿跡-首里高校校舎改築に伴う発掘調査(3)-』

調査区面積：約220㎡

概要：中城御殿と櫓園の境界となる道跡の東側に設定された調査区で、大美御殿跡にあたる。ビット群や岩盤まで達する落ち込みを確認した。落ち込み内の埋土からはウルシ属の炭化種子を含んだヤコウガイ殻が出土した。櫓園跡では螺細工の原料と考えられるヤコウガイ片が出土していることから、落ち込みを埋める際に櫓園側から造成土を移動させてきたと考えられる。

表3 遺構記号凡例

遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類
SA	石積	SS	石敷・塼敷
SN	-	SI	-
SD	溝	SV	-
SQ	石組柱	SL	伊・カマド
SG	集石	SB	建物
ST	-	SO	-
SJ	遺物埋設	SE	井戸
SW	石積擁壁	SR	石列
SM	石組土坑	SH	-
SC	-	SU	遺物集積
SP	柱穴・ビット	SK	土坑
SF	道	SX	不明遺構

第2節 層序

過年度の調査成果を踏まえ、大きく4層に区分した。なお、Ⅲ層(近世)については、屋敷の造成層が複数確認されていることから、さらに3つに細分した。

I層(現代) 学校建設に伴う造成層で板ガラスや近現代磁器が多く含まれ、旧校舎に関連するコンクリートなども確認できる。中城御殿の遺物も混入することから一部で遺物包含層の土が寄せられている可能性がある。

II層(近代) 戦前の層。沖縄県立第一中学校やその他の開発により持ち込まれた層で、VIII区では学校の運動場面が確認されている。開発時に掘り返された層も含んでおり、中城御殿の遺物も混在する。

III層(近世) 中城御殿創建の際の造成土が中心で、II層に比べると色調が暗くなり、しまりも出てくる。造成のため道跡内外から造成土を持ち込んでおり、複数層確認された。下記にその特徴を記す。

III-1層：18世紀～中城御殿移転までの造成土。中城御殿と櫓園間の道、井戸や水溜などの水場関連施設を構築。

III-2層：17世紀末以降の造成土。施設建築に向け敷地全体を削平し、大規模な平場造成を行う。中城御殿の東西に延びる石積や門、階段状遺構を構築。

III-3層：中城御殿創建～17世紀代の造成土。中城御殿の南側を中心に堆積。石組土坑や中城御殿の東西に延びる石積の前身となる石積を構築。

IV層(グスク時代) 中城御殿創建前の15から16世紀頃の造成土。地山直上に堆積しており、Ⅲ層に比べ土色は暗褐色から黒褐色と暗く、石灰岩礫の混入は少ない。柱穴や石積、石組土坑などを確認。

地山 明褐色の土(マージ)。その下は石灰岩の岩盤となる。井戸などの水場関連施設では、一部を泥岩層(クチャ)まで掘り込んで構築している。

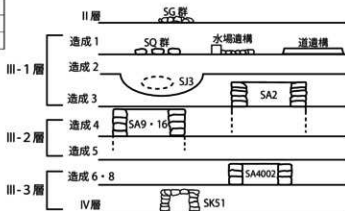


図16 模式図

表4 層序および対照表

統一層序		報告書(1)			報告書(2)						報告書(3)				地誌報告書 相対遺構
		旧層序	I区		III区		IV区		V区		VII区		VIII区		
			主要遺構		層序	主要遺構	層序	主要遺構	層序	主要遺構	層序	主要遺構	層序		
I	現代	I		I		I		I		I		I		I	
II	近代	II		II		II		II		II		II		II	
III-1	18世紀～ 中城御殿移転	造成1 造成2 造成3 造成4	水場遺構 SJ 3	II 6	II 7 III 10a III 10b III 10a1 III 10a2	SA4001 機能時	III 29 III 33 III 34	SA5004 (2段目) ・SA5005 機能時	III 7 SF5001			III 1～3 SF7001		道跡(SF5001・7001) 溝跡(SD5006・5007)	
III-2	17世紀末以降 (中城御殿 平地造成期)	造成5	SA 2 階段状遺構	III 4	III 10a4 III 11b III 12 III 12b	平地造成・ SA4001 根石設置	III 29 III 33 III 34	平地造成・ SA5005 根石設置		III 5a・b				石積(SA 2・4001・5005)	
III-3	中城御殿創建 ～17世紀代	造成6	SA 3 SA13	III 1c III 2b	III 11c III 15a1 III 15a2	SA4002 機能時	III 36	SA5004 当初	III 1 III 2	III 5c～f	SA7001	III 1～III 8c 7001		石積(SA 3・13・4002・ 7001 石積(SA3001・5004)	
		造成7	II区のみ堆積												
		造成8													
		IV	タスク時代	IV	SK51	IV 1a～d	地山		IV 1～3						

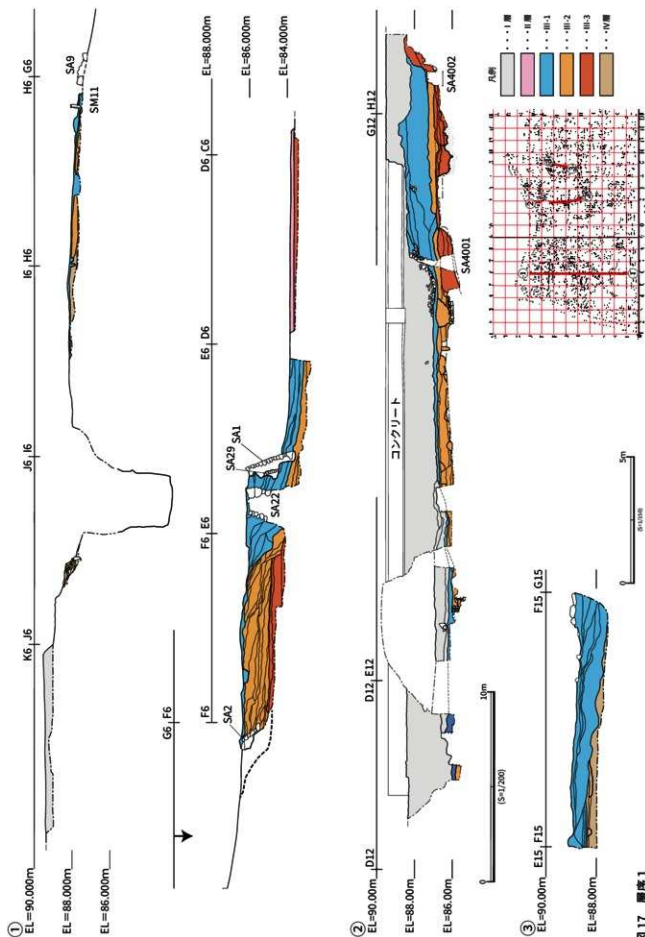


図17 層序1

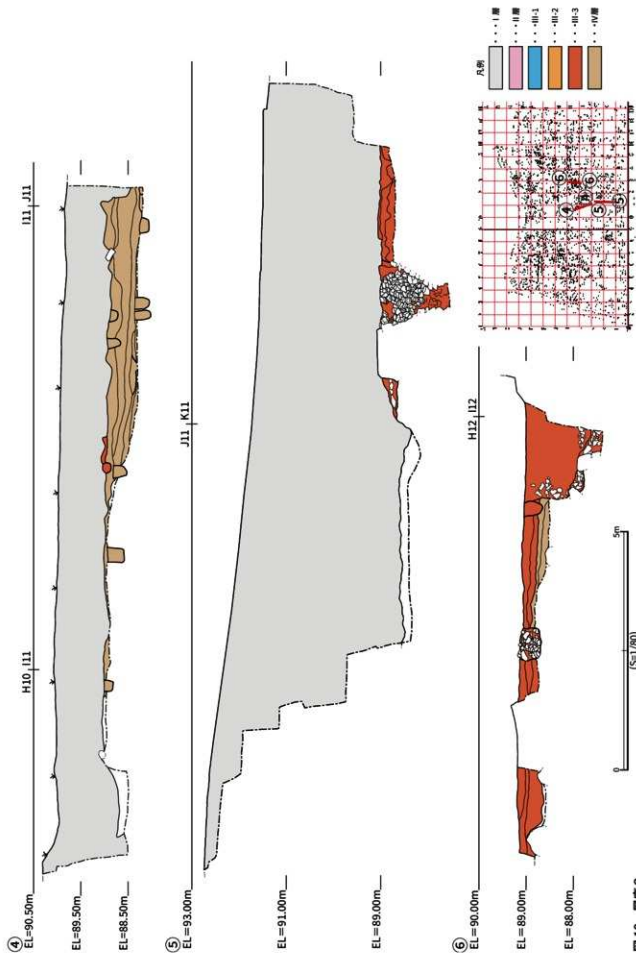
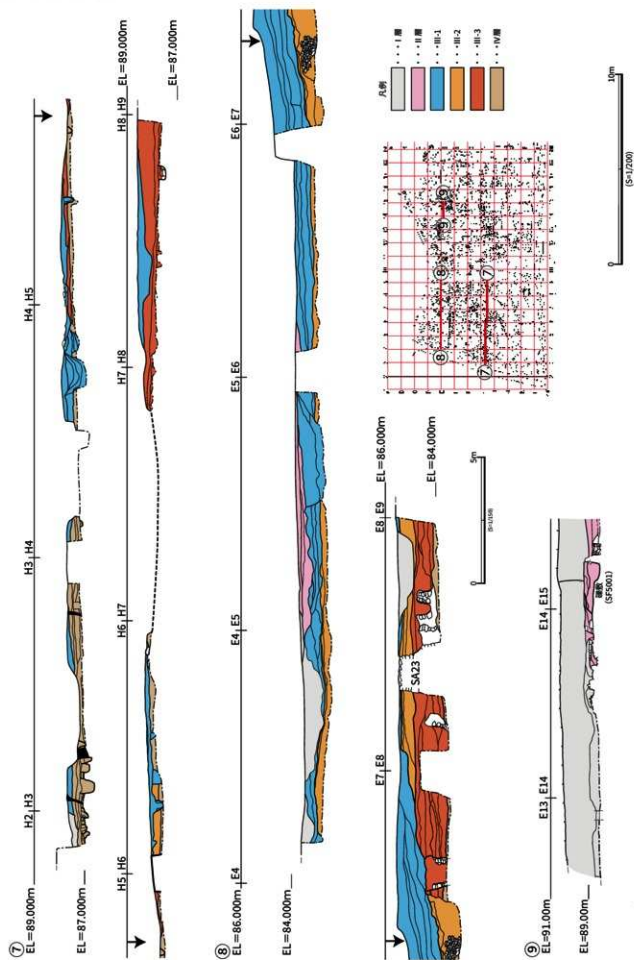


圖 18 層序 2



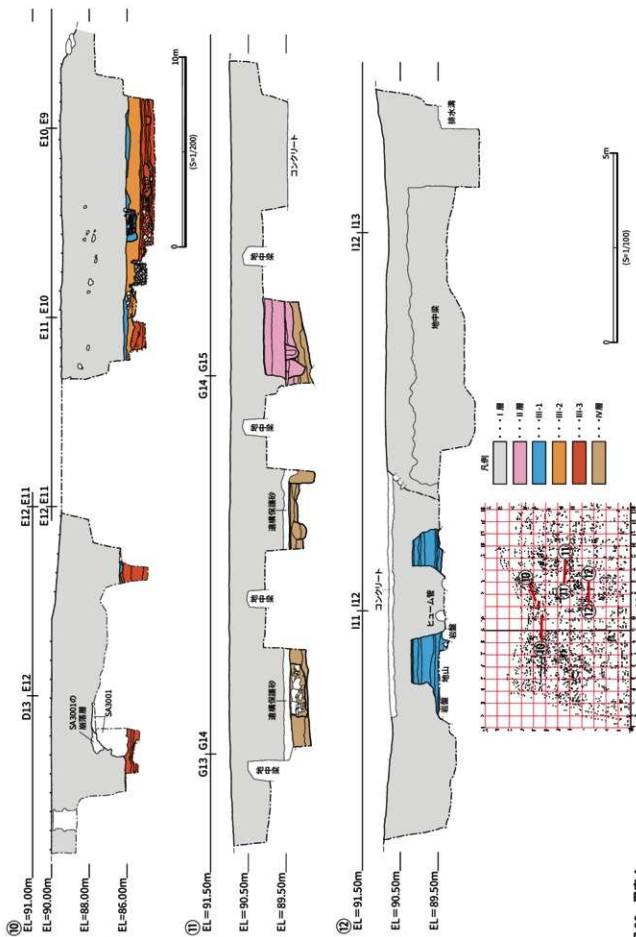


図 20 層序 4

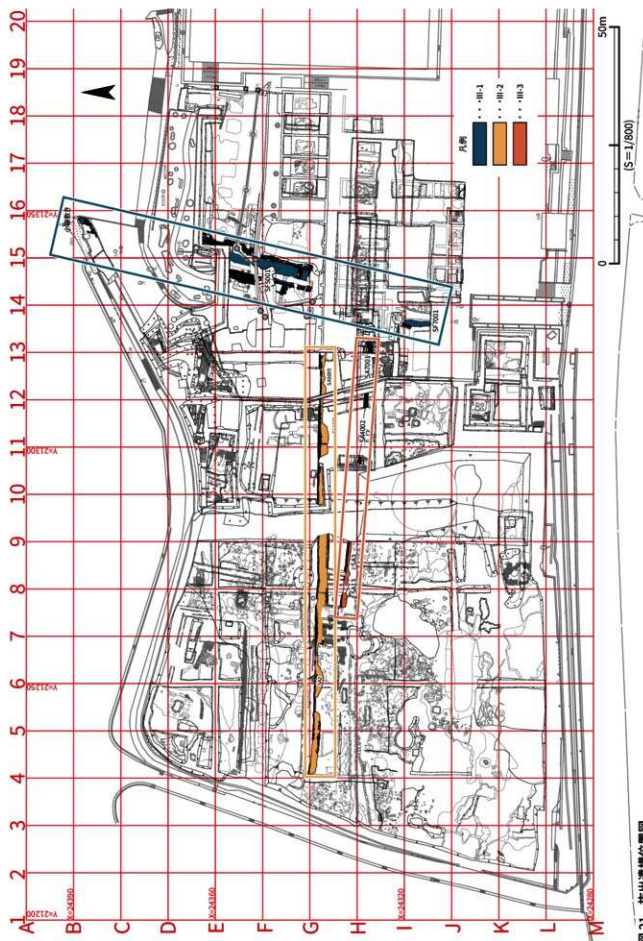


図 21 抜出遺構位置図

第4章 発掘調査の成果

第1節 遺構

本項では、一連の遺構だが、調査区をまたがって検出された遺構のみを層序ごとに紹介する。これまでに報告された各調査区の遺構数については、表5に示している。

第1項 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)

道跡(V区: SF5001・SD5001・5002、VII区: SF7001・SD7001、SD7005 試掘: 石敷遺構)

首里古地図に描かれている中城御殿と櫓園の間の道跡をV区及びVII区で確認した。道跡は北東方向を基軸として南北に延びており、道跡に伴う溝跡や石積等も確認できたが、SF5001(V区)とSF7001(VII区)では一部構造が異なっていた。

SF5001は、道を構築するために地山及びIV層(グスク時代)を南側から北側へかけて掘削して斜面を形成し、その後、排水効果をもたせるため石灰岩礫を敷き詰め舗装した層を形成している。また、道の西側には中城御殿の東側石牆(SA5003)、東側には櫓園と道の境界となる石積(SA5001)を有し、これらの石積に沿うように小礫で溝跡(SD5001・5002)を構築している。細かな石灰岩礫で舗装した歩道の横断面は、中央部を僅かに高くすることで、道の両端に築造した溝に排水されるような工夫を施すなど、当時の土木技術の高さを示している。

一方、SF7001はグスク時代の廃棄土坑を削平して構築されるが、造成層は20cm程度の厚さでしかなかった。歩道面に石灰岩礫を舗装するといった共通点はみられたものの、道に伴う溝跡(SD7001)の底面は溝の幅に合わせて加工した石を使用するなど、異なる点もみられた。また、南側にはSD7001と構築方法が良く似たSD7005も確認されている。

これらは中城御殿と櫓園の間を走る道とする一連の遺構と考えられ、それぞれの時期については、SF5001は出土遺物から18世紀以降、SF7001についても堆積状況からほぼ同時期になると考えられる。しかし、前述したような造成及び溝の構築方法の違いや南側のSF7001やSD7005の軸が中城御殿側へずれていることなどから、構築時期が異なる可能性もある。

道跡の延長部とは言い切れないが、正門新設工事の立会調査では、溝を有する石敷遺構が確認された。遺構周辺は攪乱が強く判然としませんが、SF5001の延長線上に位置しているほか、石材を使って溝を構築し、石敷遺構の下部には細かな石灰岩礫が敷かれるなど、道跡との共通点もみられた。

これまでの調査成果として、真珠道や仲泊比屋根板で

は傾斜する道に石敷を設けることが分かっている(当真1985)。当該遺構の立地も南側へ傾斜していることから、道の一部に石敷を施していたと考えられる。しかし、本遺構は現地保存が可能と判断し、これ以上の調査は行っていない。そのため、石敷の範囲や全体の構造などの詳細は不明だが、埋土からガラス片が出土しており、近現代に埋められるまでの間、長期にわたって使用されたと考えられる。

溝跡(V区: SD5006・5007)

道跡の歩道面では2本の溝跡(SD5006・5007)が確認された。両者は道に対し垂直方向に延び、その東西には道跡に伴う溝跡(SD5001・5002)が確認されている。

SD5006は、攪乱により東西の溝へと繋がる明確な接合部は確認できなかったが、SD5006底面とSD5002底面の高さが揃うことや流れ込んだ土砂の堆積状況から、構築時は東西の溝(SD5001・5002)へ繋がっていたと考えられる。

SD5007については、SD5001底面の高さと揃うように検出していることや、西側のSD5002にてSD5007方向へ延びる面石が確認できたことから、歩道面には2本の溝が横断する形で構築され、機能時は石などで蓋がなされ、暗渠として利用されていた可能性がある。



図22 SF5001 検出状況(南から)



図23 SF7001・SD7001 検出状況(北から)

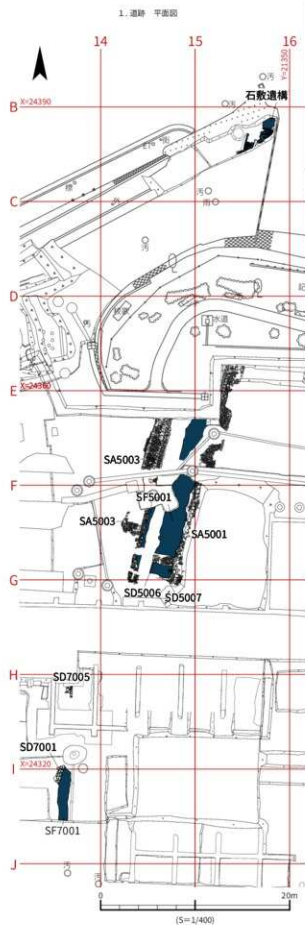


図24 道跡 平面図1



図25 石敷遺構検出状況(南から)

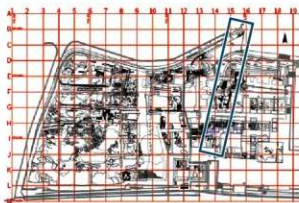




図 26 遺跡 平面図 2

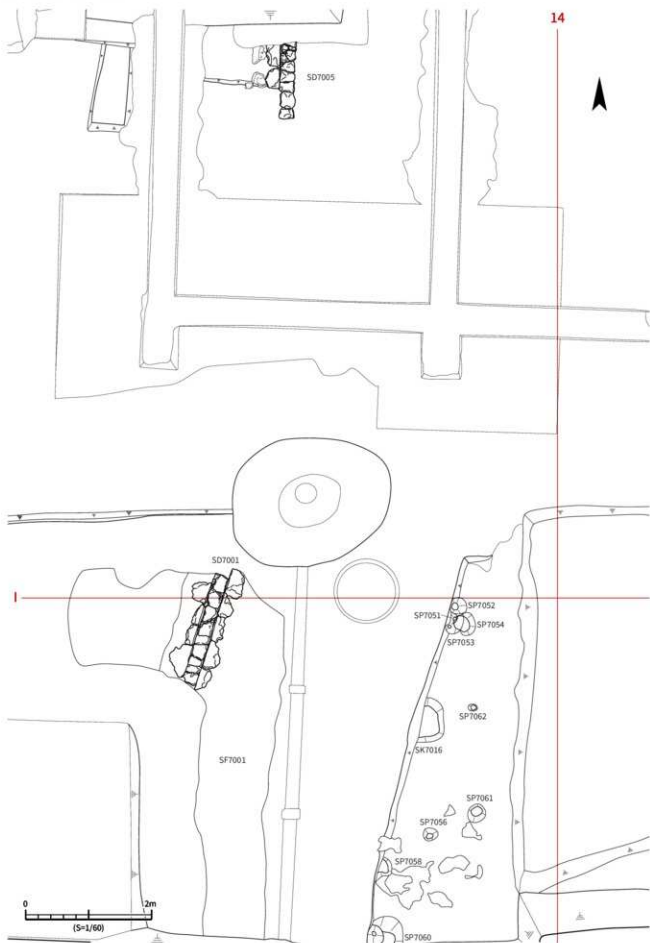


図 27 道跡 平面図 3

第2項 III-2層(17世紀末以降)

石積(I区:SA2、IV区:SA4001、V区:SA5005)

中城御殿跡内で東西に延びる石積である。I・IV・V区で確認された。

石積は、III-3層及びIII-2層に構築され東西に延びる。検出範囲から首里古地図に描かれる中城御殿内を南北に区切る石積にあたると考えられる。

中城御殿は北から南側に向けて標高が高くなり、東西では西側へ緩やかに傾斜する高低差のある地形に立地している。そのため、建物を建築するには階段状の平場造成が必須だったと考えられ、当該石積は造成土の堆積状況や周囲の遺構の状況から、傾斜地の段差を仕切ることを目的に構築されたと考えられる。

SA2(I区)では、積み直しの痕跡が確認でき、西側の石積から先に構築して南側に土砂を投入することにより平場を形成し、さらにその上に石を敷き、門や階段、それに伴う溝を構築している。一定期間を経て、その後、石積を東側へ延長する際には、これまで使用していた階段や石敷を一部削平し、造成仮止め用の石積を構築しながら造成を進めている様子が窺えた。

SA4001(IV区)では、東側に向けて根石の設置標高が高くなり、地形に合わせて根石を設置していることが確認された。一方、天端付近は面石の高さを揃えており、石積背面には複数の造成土が堆積することから、当該石積を境に南北で高低差のある屋敷配置であったことが考えられる。

SA5005(V区)では、当該石積を挟んで、南北にIII-3層が広がっていた。SA4001でもIII-3層上に根石が設置されていることから、石積構築前に中城御殿全体を削平して平場を形成するなど、大規模な造成を行っていたことが判明した。

中城御殿内の東西に延びる石積には、面石部分を約20cm前後の琉球石灰岩と約40cm前後のサンゴ石灰岩を組み合わせて構築するといった特徴もみられた(図32)。また、琉球石灰岩はサンゴ石灰岩を取り囲む、または半弧を描くように配置されていた。これについては、石材の性質や調達等に起因する可能性もあるが、球陽によると1665年、1760年、1768年に地震が発生し、首里城や周辺施設での被害が報じられていることから(球6-335、15-1201、15-1248、球陽研究会1974)、その際に崩壊した石積を急ぎ積み直した可能性も考えられる。また、僅かに時期差があると考えられるSA2(I区)の西側部分については、石積下部しか残っておらず、東側石積の面石と同様の造りをしていたのかは不明である。



図28 SA2 検出状況(北西から)



図29 SA4001 検出状況(北から)



図30 SA5005 検出状況(西から)



図31 SA4001 サンゴ石灰岩近影

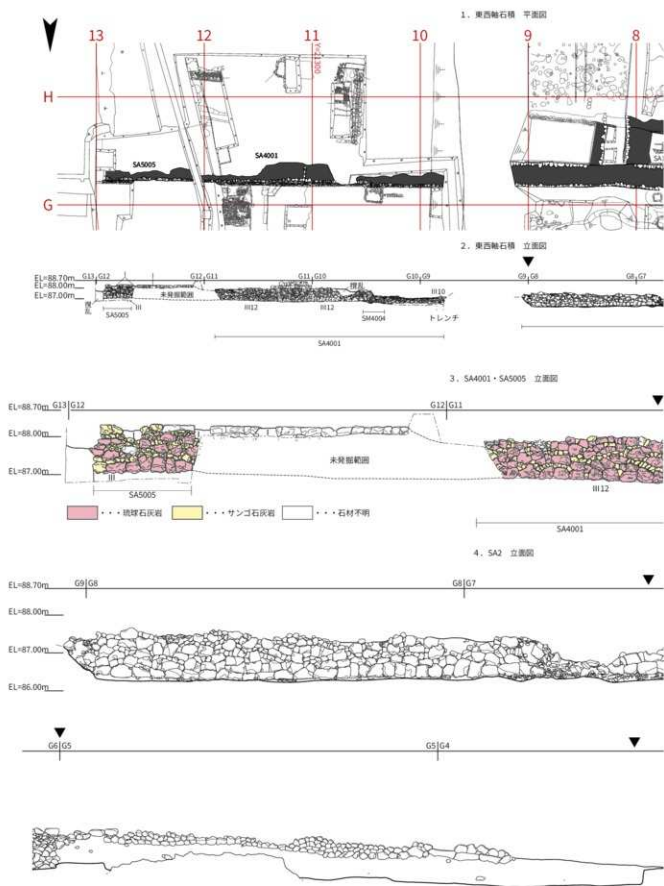
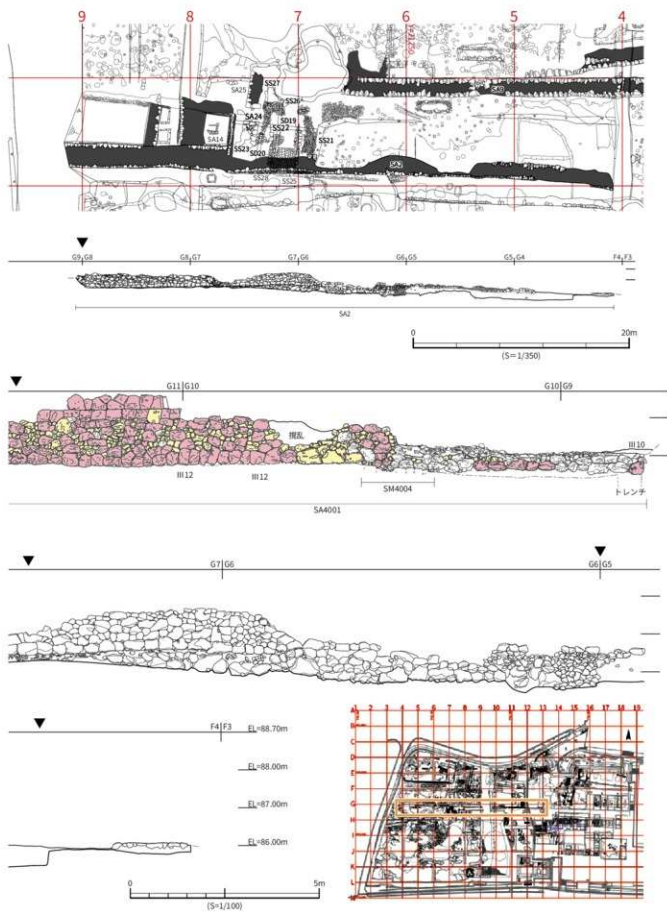


図 32 東西軸石積 平面図・立面図



第3項 III-3層(中城御殿創建～17世紀代)

石積(I区:SA 3・13、IV区:SA4002、VII区:SA7001)

石積は、III-3層上に構築されており、前項で述べた中城御殿跡内で東西に延びる石積の前面に構築されたと考えられる。I・IV・VII区で確認されたが、東側にかけ、東西に延びる石積とは軸がずれ、南東側へと延びていく。

SA 3及びSA13(I区)は、SA 2を東側に延長する際に上部が削平され造成土により埋められていたことから、東西に延びる石積とほぼ同位置に構築されていた。

SA4002(IV区)では、造成土にIV層(グスク時代)の土が混じることが確認された。当該石積を構築する際に下層を掘り込んだ地盤整形を行い、そこで発生した土を埋戻しに用いたと考えられる。

SA7001(VII区)では、後の平場造成により石積上部は削平されるものの、壁面に残る裏込めの高さから、石積の当初の高さは1 m以上あったことが判明した。また、石積は北側へカーブしており、中城御殿内の屋敷を区画するための石積と考えられるが、石積の内側に建物の痕跡を示す遺構は確認されなかった。



図33 SA 3 検出状況(北から)



図34 SA7001 検出状況(北から)

表5 報告書掲載遺構一覧

遺構名	報告書(1)	報告書(2)				報告書(3)				合計
	I区	III区	IV区	V区	VI区	VII区	VIII区	IX区		
SA(石積)	24	6	3	6	1	1	2		43	
SD(溝)	3	4	2	5		3	1		18	
SE(井戸)	3								3	
SF(道)				1		1			2	
SG(集石)	1								1	
SJ(遺物埋設)	2								2	
SK(土坑)	12	2	2		5	2			23	
SL(炉・カマド)	1				1	2			4	
SM(石組土坑)	19	7	4	1	5	4	2		42	
SP(柱穴・ピット)	13		1	3	24	20	5	4	70	
SQ(石組柱)	2						5		7	
SR(石列)	2		2			1			5	
SS(石敷・埦敷)	8	2	1	4		3			18	
SX(不明遺構)	8	3	2	5				1	19	
洞穴遺構	1								1	
合計	99	24	17	25	36	37	15	5	258	

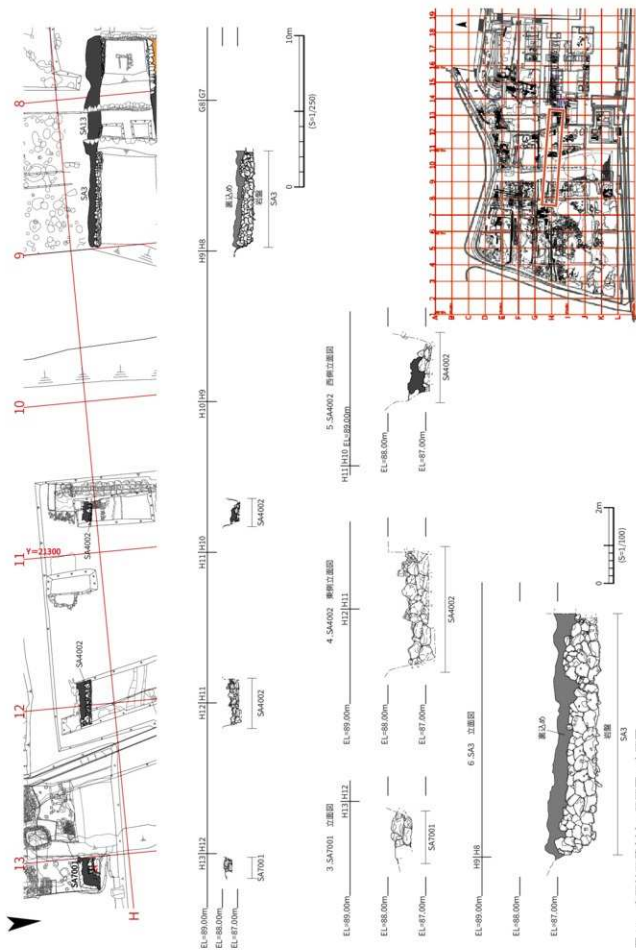


図 35 東西軸石槨(古) 平面図・立面図

第2節 人工遺物(平成25年度調査)

第1項 遺物の概要・分類

本節では、平成25(2013)年度の調査にて包含層より出土した遺物の概要を述べる。分類を付した遺物については分類概念を記述する。なお、平成25(2013)年度の遺構出土遺物については例言にも記載しているとおり、沖縄県立埋蔵文化財センター第93集『中城御殿跡(首里高校内)』2017にて報告している。

1 中国産陶磁器

主に青磁、白磁、青花、褐釉陶器、その他色絵や三彩などがみられた。

(1) 青磁

碗・皿に関しては、沖縄出土分類(瀬戸ほか 2007)に基づいて分類を行った。器形や施釉方法による分類と外面の文様の種類によって細分しているが、文様が確認できないものに関しては細分していない。

碗 VI及びVII類、幅広高台タイプを確認した。

VI類 外底途中まで施釉するものや外底露胎となるもの。高台が小型化し厚みが増す。素地は精良なものや粗雑なものがある。文様は細連弁文がある。

VI-0 外面が無文のもの(17・128)。文様は印花文を施すもののみみられる(162)。

VI-1 外面に細連弁文を施すもの(19)。弁尻が腰部下まで及ばない簡略化されたもの(160)がみられる。

VI-2 雷文帯を施すもの(18・163)。釉は薄く、ガラス質で貫入がみられる。

VII類 器高が低くなり、高台がより小型化するもの。直口口縁。文様は簡略化した連弁文や波状文を施す(15)。釉は色が抜けて薄くなるものもある。

幅広高台タイプ 腰部から直線的に立ち上がるもの(16)。直口口縁。透明感のない釉を腰部まで施すが、外面はクロク目が目立つ。

皿 V及びVI類を確認した。

V類 外底は露胎もしくは蛇の目状に釉剥ぎし、濃い色の釉を厚く施釉するもの。文様は連弁文や印花文が主で、口折・直口・外反・腰折などがみられる。

V-0 外面が無文のもの。外反皿(161)。

V-1 外面に連弁文を施すもの。直口皿がある(130)。内面の連弁文は2段構成になっており、首里城跡京の内跡(沖縄県 1998)から類似品が出土している。

VI類 高台が小型化し、器高が低くなるもの。直口皿と稜花皿が主流。

VI-0 外面が無文のもの。稜花皿で内面には波状文やへら描きの草花文を施す(20)。

VI-1 外面に連弁文を施すもの。内底に印花文を施す(129)。

杯 高足杯(133)が出土している。

盤 釉を厚く施し、内面にはへら描きにより文様が施されるものが出土している(21)。

蓋 中型の壺の蓋(131)、合子の蓋(164)、瓶や水注等の袋物の蓋(132)が出土している。袋物の蓋は甲面を菊花状にし、裏面は欠損しているが筒状の袴部が貼り付けられていたと考えられる。首里城跡木曳門跡(沖縄県立埋蔵文化財センター 2001)にて類似資料が出土している。

その他 波状突帯文を施したものが出土している(223)。面が複数確認できるが、破片のため詳細不明。

(2) 白磁

白磁の碗・皿に関しては、森田(森田 1982)と沖縄出土分類(瀬戸ほか 2007)、大宰府分類(太宰府市 2000)に基づいて分類を行った。

景德鎮窯系

E群 全体に釉を掛けた後に、畳付のみ釉剥ぎするもの。皿は菊花文を施すもの(24)や外反するもの(165)などが出土している。

福建産

D群 陶器質だが胎土が細かい。高台は低く全体的に小振りのものや挟り高台(23・166)、八角皿も出土している(134)。

徳化窯系 新垣分類(新垣 2003)に基づいて判別を行った。徳化窯系は型成形の影響で粘土ジワが確認できるものが多い。小碗(22)が出土している。

(3) 青花

首里城跡銭蔵東地区(沖縄県立埋蔵文化財センター 2016)と沖縄出土分類(瀬戸ほか 2007)を参考に分類を行った。

①明代 景德鎮窯系が主体を占めている。碗や皿、小碗が出土している。

景德鎮窯系

碗I類 小野分類のB1群やそれと文様構成が類似するもの。柴田圭子(柴田 2011)により明代早期から中期に位置付けられている。

I-1 大振りの外反碗で、外面には唐草文を施すもの(167)。小野分類B1群に含まれる。

皿II類 小野分類のB1群とされるもの。明代中期に位置付けられる。

II-1 端反皿で、外面に唐草文、内面に十字花文を施すもの(168・169)。小野分類B1群に含まれる。

小碗 清代の特徴とは異なるものについてはここに含めた。外面に文字らしき文様を施すもの(170)や幅の広い畳付を持つもの(35)がある。後者については、中城御殿跡(沖縄県立埋蔵文化財センター 2012)にて類似資料が出土している。

- ②清代 福建・広東系や徳化窯系が主体で、景德鎮窯系もみられる。碗、皿、小碗、鉢、瓶が出土している。景德鎮窯系 外反口縁を呈する小碗は2点出土している。外面の文様が芙蓉手で区画するもの(26)、唐草文をペンシルドローイングで施すもの(34)がある。瓶は沈線により施文し、内面には粘土帯の繋ぎ目がみられる(39)。

徳化窯系 景德鎮窯系に比べ器厚が厚く、素地は白いものが多い。型成形による粘土ジワや内底中央が膨らむといった特徴がみられる。皿(36・37)が出土している。

漳州窯系 全体的に雑な造りで、釉垂れや焼成不良により器面は凹凸が激しい。区画文や帯文を施文(135)。

福建・広東系 福建周辺地域で製作されたと考えられるが、窯を限定できなかったもの。胴部下部や底部が露胎し、内底は一度釉剥ぎした後に、蛇の目状に施釉するものが多い。素地は白色もしくは灰白色で陶器質といった特徴がみられる。粘土ジワの入る資料もみられる(25)。文様は丸文(28)やコンニャク印判(29～31・136)、花唐草文(32)、雲龍文(33)を施す碗や鉢(27・38)が出土している。

(4)中国産褐釉陶器

褐色の釉薬がかかる陶器で、素地には黒色粒や白色粒が混じる。壺や鉢(40)、植木鉢が出土している。以下、特徴的なものについて述べる。

壺 外面のみ施釉するもの、内外面施釉するものがあり、前者には外面に横耳(174)や、葉文の飾りを貼り付けるもの(171)が出土している。後者は口縁内部を肥厚させ、小孔を巡らせるもので、外面には叩き目痕が残り、残存部から大型の壺になると考えられる(137)。中国産としたが、金武正紀(金武 2003)は今帰仁城跡出土の類似資料について、ベトナム産の可能性も指摘している。

植木鉢 胴部には網目状突起が施され(172)、底部付近には釉垂れがみられる(173)。素地などから同一個体の可能性がある。

(5)その他の中国産陶磁器

色絵 明代と清代の碗が出土している。前者は赤絵を主体に絵付けを施しており、景德鎮窯系と考えられる(42)。後者は、粉彩碗で型成形であることから徳化窯系と考えられる(41)。

瑠璃釉 徳化窯系の小碗が出土している(43)。釉の色は薄めでムラがあり、型成形による粘土ジワがみられる。

褐釉染付 小碗が出土している(44)。外面に褐釉、内底に染付の文様を施す。景德鎮窯系と考えられる。

三彩 素地に陶器質で緑色や黄色の釉が掛かるもの。盤や水注の注口?が出土している。盤は菱花口縁(175)で、水注の注口は瓜状になると思われるが(176)、どれも小片で全容不明である。

素三彩 素焼きした素地に、直接色釉を使い文様を施すもので、清代に多く製作されている。底部片が出土しているが、小片のため全形不明(45)。

翡翠釉 素地は陶器質で翡翠釉が掛かるもの。小皿が出土している(138)。外面には立体的な蓮弁文が施され、成形による粘土ジワが目立つ。

天目 黒釉に一部褐釉が掛かり、禾目が目立つもの。口縁の造りや高台脇の削りがみられないことから、首里城跡京の内跡(沖縄県立埋蔵文化財センター 2018)の黒釉天目茶碗分類ⅢまたはⅣ類にあたりとされる。12から13世紀前半の建盞碗か(177)。

陶器 円筒状の茶壺の底部と考えられるもの(178)。

土器 蓋(189)で、掘みはなく、褐釉陶器の壺と対応するものと考えられる。中国産か。

2 タイ産陶磁器

褐釉陶器 瓶や壺が出土している。以下、特徴的なものについて述べる。

瓶 素地はきめ細かく、混入物は目立たない。内面轆轤痕があり、黒褐色釉を施することから、シーサッチャナライ窯産とした(183)。

壺 素地は堅緻で白色粒が混入する。内面の轆轤痕は丁寧にナデ消され、器面にはオリブ黒色釉を施することから、メナムイ窯産とした(179～181)。

半練土器 蓋と壺が出土している。蓋は掘みが饅頭形の落とし蓋タイプ(182)で、壺は小片で全容不明であるが外面に青海波状の打捺文を施すものである(184)。

鉄絵 瓶(185)と合子の蓋(139)が出土している。いずれも素地は灰色で黒色粒が目立つ。シーサッチャナライ窯産。

3 ベトナム産陶磁器

白磁 碗が出土している(186)。成形や施文が丁寧であり、首里城跡御原北地区(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)に小杯の類似資料が出土している。

青花 壺が出土している(46・187)。白化粧後、呉須により絵付けを施す。

4 産地不明陶器

陶製の鍾が出土している。円筒状に成形し、一端は粘土を内側に折り曲げることで孔周縁を滑らかにしている(60)。

5 本土産陶磁器

本土産陶磁器は染付、色絵、陶器などがあり、産地は肥前系や関西系、京焼、信楽焼、備前系、薩摩系などが出土している。肥前系の陶磁器については、九州陶磁編年(九州近世陶磁学会 2000)を基に分類を行った。

肥前系 碗(49・50)、皿(51)、瓶(48)、蓋(47)が出土している。器形や施文方法から碗及び皿は九州陶磁編年IV期(1690から1780年代)に属すると考えられる。

関西系 杉形碗(55)や小皿(53)が出土している。

京焼 皿(52)が出土している。丸みのある腰部で、内面には赤絵が僅かに残る。

信楽焼 壺(56)が出土している。素地に含まれた長石がガラス状の白粒となって内外面にみられる。

備前系 搦鉢が出土している(57・58)。いずれも頸部を「く」の字状に屈曲させ、焼き締められている。混入物が目立たない沖縄産無軸陶器によく似ている搦鉢も出土しているが(59・188)、器形などから上西高登(上西 2006)の示すV期にあたるものと考えられる。

薩摩系 壺(141)や急須(54)、色絵の袋物(140)が出土している。

6 沖縄産施軸陶器

沖縄産陶器の中でも「上焼(ジョウヤチ)」と称される一群で、器面に釉薬及び絵付けを施す。器種は碗、小碗、皿、鉢、蓋、急須、袋物が出土している。

碗・小碗 軸の種類や施軸方法、器形によって以下のように分類した。

A類 灰軸を単掛けで胴部以下露胎するもの。文様の有無で2種に細分している。

A-1 無文のもの(63・64・143・145)。

A-2 外面に鉄絵を施すもの(142)。

B類 褐釉(鉄軸)を施軸するもの。施軸方法により2種に細分している。

B-1 鉄軸を単掛けで胴部以下露胎するもの(62)。

B-2 外面に褐釉、内面に白化粧後、透明軸を施軸するもの(66・67)。

C類 白化粧後、透明軸を単掛けするもの。外面面取り(68)。

D類 筒型の碗で灰軸を単掛けするもの(69)。

皿 内外面に線刻や印花文を施すもの(61)、薄手で内面が露胎するもの(65)が出土している。前者は、外

底に蛇の目状の凹みがみられる。中城御殿跡や首里城跡御内原北地区(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)にて類似資料が出土している。

鉢 外底に「御近習」の墨書が残る(70)。

蓋 急須の蓋(71)、鍋の蓋(72)がある。

急須 褐軸を施軸するもの(73・74・144)がある。

7 初期沖縄産無軸陶器

沖縄産無軸陶器の中でも、湧田古窯跡を中心に作られたと考えられる資料で、高火度で焼成され器面に泥軸などが施軸される一群である。高火度で焼成されるため、よく締まり、胎土には白土が帯状に層を成す(上原ほか 2011、新垣 2013)のものが多くみられる。器種は碗や皿、壺、鉢類、灯明皿、火取、蓋が出土している。

碗 高台が方形になるもの(75・76)。

皿 底部がベタ底(77)になるものがある。

壺 口縁断面が方形(78)や玉縁状(79)になるもの、外反するもの(80)がある。

搦鉢 櫛目同士の間隔が密に重なり合うもの(81・82)。

水鉢 口縁部が内湾するもので、外面が無文のもの(83)、肩部に波状文や圓線を施文するもの(84・85)がある。

火取 直口口縁で、腰部で「く」の字状に屈曲する。高台内は削らず、やや上げ底になる(91)。

植木鉢 外面を粘土貼り付けによって装飾する。口唇部と口縁部に波状凸帯、胴部に菊花文を施すもの(86)、龍の顔や鱗を施すもの(87～90)がある。

蓋 内面や外面に軸が掛かるもの(92)。

灯明皿 直口口縁で厚手のベタ底(93・146)。

8 沖縄産無軸陶器

沖縄産陶器の中で「荒焼(アラヤチ)」と称される資料で、初期沖縄産無軸陶器に比べ軟質な一群。基本的に無軸を主体とするが、泥軸やマンガナ軸が掛かるものもある。器種は瓶、鉢類、急須、蓋、灯明皿が出土している。

瓶 肩部が張るもの(94)。

搦鉢 底部がベタ底のもの(190)とスカート状に広がる大きめの高台になるもの(95)がある。

植木鉢 脚付きのもの(96)。

急須 ベタ底で把手の付くもの(97)。

蓋 握みをもたないもの(99)。

灯明皿 直口口縁で厚手のベタ底、口縁部に煤付着(98)。

9 瓦質土器

瓦質のやきもで、器色は灰色で厚みがあり、碗皿などの小型の製品はない。器種は鉢(191)、搦鉢(100)、埴埴、脚が出土している。以下、特徴的なものについて述べる。

焔炉 脚付で内面に残るくびれから、東京大学本郷構内の遺跡医学部付属病院地点(東京大学遺跡調査室1990)出土の舟竈と同様な造りになると考えられる(192)。内面に僅かに煤が付着する。

火炉 内底に窪みを設け、脚の中央を空洞にするもの(147)。内面には煤が付着することから、火炉の脚と考えられる。

10 埴埴

碗型のものがほとんどで、複数の大きさのものが出土している。内面に金付着(193)。



図36 埴埴内金付着1(○内)



図37 埴埴内金付着2(○内)

11 煙管

金属製の雁首と吸口がみられる。分類については、首里城跡御内原北地区(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)を参考に行った。

雁首

陶首Ⅰ類 筒形で火皿のみのもの(101・148)。瓦や磚を再利用したものが出土している。

陶首Ⅱ類 全体的に丸みがあり、首もなく全長も短いもの(102)。沖縄産施釉陶器製が出土している。

陶首Ⅲ類 全体的に角を有する多面体形を呈するもの(103)。沖縄産無釉陶器製が出土している。

金首Ⅳ類 肩がなく、脂返し湾曲や角が見られず首も短いもの(104)。

吸口

陶口Ⅰ類 小口から口付にかけて内湾するもの(105)。

金口Ⅱ類 肩がなく、小口から口付にかけて内湾するもの(7)。

12 金属製品

鉄製品以外では、兜や鎧などの武具類、切羽などの刀装具、装飾品としては飾り金具や簪、その他用途不明のものなどが出土している。

(1) **武具類** 兜や鎧に関係するものとして、覆輪や立物飾り、八双金具が出土している。

覆輪 武具などを装飾し、更に壊れにくくするために周縁に施されるもの。断面U字状になり、端部に固定用の円孔を2箇所穿孔する(194)。首里城跡や今帰仁城跡などで出土している。

立物飾り 兜につける飾り金具。表面のみ鍍金され、毛彫りで文様が施される(113)。上下端のカーブから、前立の左側にあたるものと考えられる。

八双金具 甲冑などに取り付ける飾り金具。両端の中央部が凹み八双で、表面には毛彫りで文様を施す(107)。

(2) **刀装具** 切羽や目貫金具、鍍金が出土している。

切羽 鐔の両面に添えられるもので、周縁に刻みを施している(210)。

目貫金具 目釘の保護や装飾のため、柄の中央に取り付けられるもの。表面中央に猿、周りには枝や葉、実などが施される(8)。

鍍金 鞘尻を保護するためのもの。端部中央に稜を入れて尖らせる(195)。

(3) **装飾品** 簪や指輪が出土している。

簪 上原分類(上原2023)を基に分類を行った。

ⅡC類 カブが五弁花形で、弁先が丸みを有するもの。竿の先端は四角錐になる(108)。

ⅢBa類 カブが扁平で細長い耳かき状、長さが11.5～19cmまでのもの。竿の先端は細く尖る(109)。

ⅢBb類 カブが扁平で細長い耳かき状、長さが11cm以下のもの、竿の先端は細く尖る(110・111)。

ⅢCc類 カブが1cm以下の小匙形で、竿の先端は扁平な菱形を呈するもの(114)。

指輪 2点出土している。大きさから、子供用と考えられるもの(112)、大人用のもの(150)がある。

金具類 調度品の金具と考えられるもので、引手金具(106)や飾り金具、錠前?と思われる資料が出土している。以下、特徴的なものについて述べる。

飾り金具 2点出土している。いずれも毛彫りで文様を施し、文様間は魚々子で埋める。固定用の円孔を中央に施すもの(149)、端部に施すもの(9)が出土している。

錠前 一部鍍金が残る、固定用の円孔が複数みられるもの(1)が出土している。1箇所の円孔には固定用の釘及び同製品が固定されていた側の部材が付着している。旧県立博物館跡の中城御殿跡(沖縄県立埋蔵文化財センター 2018)に類似資料があり、錠前の一部と考えられる。

(4) その他 金属塊や板状製品、用途不明のものが出土している。

金属塊 球状になるもので、被熱のためか全体的に煤けている(211)。

板状製品 3点出土している。(196)は表面のみ鍍金を施すもので、一辺は研磨されず角が立っている。(12)は両面鍍金し、一端を直線状、もう一端は稜花状に成形している。周縁には複数の円孔が巡っている。形状から兜に取り付ける眉庇とも考えられたが、判然としないうことから、板状製品とした。(10)は表面に毛彫りで葉や花のような文様を施したもので1点出土している。周縁は文様に合わせカットされる。釣り灯籠の吹き返しの可能性もあるが、破片のため、判然としないう。

用途不明 2点出土している。(197)は細かな文様が施されていたと考えられるが、判然としないう。フック状の突起がみられる。(213)は表面中央に稜を持つが、裏面は平坦に成形されている。筒状の金具が伴って出土しているが、同製品に付随するものかは不明。

13 鉄製品

鉄鍋、小札、鉄鏝、刀子が出土している。

鉄鍋 ゆるく外反するもの(214)。

小札 X線撮影により、札尻は平行で、円孔を10箇所確認(215)。

鉄鏝 上原・宮城分類(上原・宮城 2007)を基に分類を行った。

I類 平頭式のもの(216)。茎部をソケット状に差し込むタイプ(217)も出土している。

III類 菱頭式のもの。茎部をソケット状に差し込むタイプ(115)が出土している。

刀子 背が直線的になるものが出土している(151・152)。

14 鉄洋

椀形洋で木炭が付着している(116)。

15 銭貨

銭貨は中国銭、日本銭、鉄銭、無文銭が出土している。中国銭は景徳元寶(220)、景祐元寶と考えられるもの(154)、元祐通寶(155)、政和通寶(153)、紹興通寶(122)、至大通寶(219)、洪武通寶(2)、康熙通寶(11)が出土している。

日本銭は寛永通寶が確認され、『日本出土銭総覧 1996年版』(永井 1996)を参考に分類を行った。その他には、無文銭(222)や煙管の雁首を叩き延ばして銭状にした雁首銭(121)、14世紀頃に国内で生産されたと考えられる独特な書体をもつ島銭(13)が出土している。

寛永通寶

1期 古寛永。初鑄年1636年。「寛」の12画目と13画目の頭部が相接し、「寶」の貝画末尾が「ス」の字状になるもの(12・117・118)。

2期 新寛永。初鑄年1668年。「寛」の12画目と13画目の頭部が離れ、「寶」の貝画末尾が「ハ」の字状になるもの。背面に「文」字を持つ(14・119)。

3期 新寛永。初鑄年1697年。書体は2期と同様で背面が「文」字以外のもの(120)。

16 玉類

勾玉(125)と玉が出土している。全てガラス製で、玉は中城御殿跡(沖縄県立埋蔵文化財センター 2011)による分類を用い、以下のタイプが確認された。さらに、色調ごとに細分を行った(表6)。その結果、I類が最も多く、その中でも白色や緑色のものが6割を占めていた。また、各ガラス玉には製作時の巻付痕を残すものが多くみられた。

I類 楕円形(124・198)

II類 薄型方形(199)

III類 螺旋状(200)

IV類 複数溶着(201)

表6 ガラス玉集計表

	I類	II類	III類	IV類	小計	計
赤	16		4			20
赤(熟)	23	2	9			34
白	70		42			112
白(熟)	80	2				82
緑	6	5	83			94
緑(熟)	81					81
金	2					2
不明	122		36	20		178
計	400	9	174	20	0	603

17 ガラス製品

駒石や碁石などの遊具が出土している。上原分類(上原 2004)に基づいて分類を行った。

駒石 青色で表面は丸く盛り上がる(202)。上原分類

にて、盤双六に使用される駒石の鏡餅型にあたと考えられる。

墓石 白色で表面は丸く盛り上がる(126)。色調から鏡餅型の墓石としている。

18 瓦類

屋瓦で高麗系、不明瓦が出土している。分類は上原分類(上原 2013)を基本に行った。

高麗系瓦 軒丸瓦が出土している。著しく突出する中房や鑓のはいる花卉から、上原分類の高麗系瓦の蓮華文1類Bタイプにあたと考えられる(204)。

不明瓦 小片のため全形不明だが、軒丸瓦の瓦当部と考えられる(203)。上原分類の高麗系瓦の飾瓦や大和系瓦の蓮華文1類に似るが、いずれも花卉の間隔や枚数が合わないため、不明瓦として報告する。

19 石器・石製品・石造物・石材

石器・石製品・石造物・石材は、計425点が出土している。ここでは遺物と石材の出土傾向について以下に概要を述べる。なお、石材は筆者が石材標本等を用いて同定した。

石器 III-3層より2点の磨製石斧(207、209)が出土している。出土層位からはグスク時代の資料とみなされ、また『おもしろし』にはグスク時代にも石斧を利用していたとされる記述もあるが、本資料がそれに該当するか、それとも先史時代のものであるか判然としない。

石製品 石弾、砥石、香炉、硯、石盤が確認された。石弾は砂岩製で中型のもの(157)と、琉球石灰岩製の小型のもの(158)の2点とともにIII-2層より出土した。砥石は煤が付着する細粒砂岩製のもの(156)と、軽石製砥石がIII-1層(127)とIII-3層で確認されている(208)。香炉は琉球石灰岩製の有脚香炉で、被熱痕もあり実際に使用されていたことを伺わせる(205)。III-3層出土。石盤(5・6)は主に明治期に学制の導入によって用いられた文具として県内でも多数の出土例があるが(大堀 2024)、この2点は方眼が刻まれている点で珍しい資料である。硯(3・4)は石材と形状から近世末から近代の日本産と目される(大堀 2021)。硯背には人名やイニシャル、

学年などが釘書されており、出土層位を加味すると、石盤と硯ともに沖縄県立第一中学校で使用された文具と目される。

石造物 調査によって、主にII層からIV層にかけて122点の礎石片が出土している。石材は細粒砂岩が最も多く113点、ほかに安山岩、流紋岩、粘板岩、砂岩、サンゴ石、琉球石灰岩が認められた。そのうち特徴的なものとして、砂岩製で被熱した礎石(159)がIII-2層から、中国福建省産のいわゆる「青石」とみられる緑色化した硬質の砂岩を素材としたものがIII-3層で出土している(206)。なお、I地区のIV層で3点、III-3層で1点、層不明3点に煤が付着した礎石片が確認され、火災を受けた可能性がある。

石材 26種約100.3kgの石材が出土している。礎石片とみられる細粒砂岩が最も多く約79kgを占める。ほかに粘板岩、緑色岩、頁岩、中粒砂岩の円礫が主にIII-2層より上の地層に多く、これらは一面に平滑面をもつことから中城御殿跡で敷かれた玉砂利の可能性がある。他に特徴的な石材として、人為的な加工・使用痕跡は確認されないものの石製品と破片とみられる赤色頁岩、南九州産で近世の石造物にしばしば利用される溶結凝灰岩がIV層から(神谷 1999)、玉器の破片の可能性がある碧玉がIII-1層から確認された。出土地区・層位の傾向としては、I・III区のI・II層が最も多いが、中城御殿跡創建前の地層と目されるIV層からも約11.7kgの細粒砂岩が出土している点は、中城御殿跡以前の建物の存在を伺わせる点で注目される。さらに、石造物と同様にI区IV層で細粒砂岩が4点、I・IV・VII区のIII-3層で細粒砂岩・片岩、琉球石灰岩、IV・VIII区のIII-2層で細粒砂岩2点に被熱や煤の付着が認められ、火災の発生を示している可能性がある。

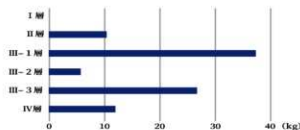


図38 層序ごとの石材出土量

表7 層位ごとの石材出土数(層位不明・不明確なものを除く)

	安山岩	緑色岩	凝結凝灰岩	流紋岩	溶結凝灰岩	泥岩	頁岩	赤色頁岩	緑色頁岩	粘板岩	千枚岩	片岩	緑色千枚岩	緑色片岩	中粒砂岩	片状砂岩	サンゴ砂岩	琉球石灰岩	古生代石灰岩	チャート	石英	碧玉	計
I層																							1
II層		3	3	1		1								2	7	5	1						28
III-1層	1	9	1	1		1	6	1	1	11	2	1		4	26	8	1	1	1			1	80
III-2層		1	1							1			1	2	12	3	2	1					24
III-3層	3	3	2			2				8	4	1		3	55	10	1	2	1		1		96
IV層				2		1	2										1						7
計	5	17	7	4	0	2	11	1	1	25	6	2	1	11	100	26	3	5	3	1	1	1	236

表8 出土遺物観察一覧 a

図版番号	番号	種類	部種	分類	部位	法量(cm) ()は復元額			観察事項	順序	
						口径	最高	高台径		目	新
	1	金属製品	錠前?	—	—	縦 6.3	横 6.2	厚さ 0.6	表面鍍金。固定用の円孔が7箇所確認でき、一部固定用の釘及び木材が残る。錠前の一部か。重さ21.2g。	I	I
	2	銭貨	洪武通寶	—	—	外径 2.35	孔径 0.45	厚さ 0.17	初鑄年1368年(明)。背面「北平」。重さ3.8g。	I	I
	3	石製品	硯	—	—	縦 (12.0)	横 6.1	厚さ 2.05	石材：粘板岩 加工痕：研磨、磨切り 使用痕：縦状痕跡；背面「口尾忠晴次男」(大)「5 N」	I	I
	4	石製品	硯	—	—	縦 12.3	横 6.3	厚さ 1.7	石材：粘板岩 加工痕：研磨、磨切り 使用痕：縦状痕跡；側面「I 學年C 牧志」	I	I
図版 46	5	石製品	石盤	—	—	—	—	—	石材：粘板岩 加工痕：研磨、磨切り 使用痕：縦状痕方眼あり。	I	I
	6	石製品	石盤	—	—	—	—	—	石材：粘板岩 加工痕：研磨、磨切り 使用痕：縦状痕方眼及び木栓痕あり。	SA3001 門1 順灰	SA3001 I
	7	煙管	—	金口皿型	吸口	長さ 6.5	高さ 1.0	—	小口付辺を6面に面取り。一部鍍金。104とセットかい。小口外径は0.9cm、内径は0.7cm、口付外径は0.7cm、内径0.4cm、重さ12.7g。	II	II
	8	金属製品	目貫金具	—	—	縦 2.4	横 3.7	厚さ 0.15	裏面には固定用の突起がみられる。表面中央には縁が施される。重さ6.8g。	II	II
	9	金属製品	飾り金具	—	—	—	—	厚さ 0.05	表面鍍金。毛彫りで施文。文様間は魚子で埋める。端部に孔を有するが1箇所は確かな穿孔。調度品の内縁金具か。重さ2.9g。	II	II
	10	金属製品	板状製品	—	—	—	—	厚さ 0.06	裏面に鍍金残る。毛彫りで文様が描かれる。重さ3.6g。	II	II
図版 47	11	銭貨	康熙通寶	—	—	—	—	厚さ 0.05	初鑄年1662年(清)。欠損により背面には漢文のみ。重さ0.7g。	II	II
	12	銭貨	寛永通寶	古寛永	—	—	—	厚さ 0.11	1期：1636から1659年。外縁磨る。重さ0.8g。	II	II
	13	銭貨	島銭	—	—	—	—	厚さ 0.09	「造」のような字。「寶」の2文字のみ確認。表面を叩き延ばしている。重さ1.9g。	II	II
	14	銭貨	寛永通寶	新寛永	—	外径 2.52	孔径 0.56	厚さ 0.12	2期：1668から1683年。文銭。重さ3.6g。	III不明	III
	15	中国産青磁	碗	Ⅶ型	口～底部	(14.2)	6.15	7.4	素地は赤灰色。高台外面途中まで施釉。口縁帯外に波瀾文。胴部には簡略化された縦刺蓮弁文。	造成 2・4	III-1
	16	中国産青磁	碗	幅広い高台タイプ	口縁部	(18.8)	—	—	素地は灰白色。釉は灰オリーブ色。腰部以下及び内底釉剥ぎ。	造成3	III-1
	17	中国産青磁	碗	Ⅵ-0型	口縁部	(13.4)	—	—	素地は灰白色で彫痕。釉は明オリーブ灰色。外面口縁に黒線1条を施す。	造成3	III-1
	18	中国産青磁	碗	Ⅵ-2型	口縁部	(14.6)	—	—	素地は灰白色。釉は明緑灰色で全面に薄く施釉。外面口縁に雷文と黒線1条、内面胴部に雷文と詳細不明の文様を施す。	造成3	III-1
	19	中国産青磁	碗	Ⅵ-1型	口縁部	(13.0)	—	—	素地は灰色。釉はオリーブ灰色。外面に縦刺蓮弁文。	造成3	III-1
	20	中国産青磁	皿	Ⅵ-0型	口縁部	(14.4)	—	—	素地は灰白色。釉は明オリーブ灰色。内面口沿に沿って3条の波状文、胴部にはへら掻きによる草花文を施す。	造成3	III-1
図版 48	21	中国産青磁	盤	—	口縁部	—	—	—	素地は灰白色。釉は明オリーブ灰色。内面へら掻きにより施文。	造成3	III-1
	22	中国産白磁	小碗	—	口～底部	(8.0)	4.2	4.0	素地は白色。透明釉を内外面に施し、覆付け釉剥ぎ。覆付けに砂付着。粘土ジワ有。焼成異常。	造成2	III-1
	23	中国産白磁	小皿	D群	口～底部	7.6	1.7	4.0	素地は灰白色。透明釉を内外面に施し、覆付け釉剥ぎ。外縁に波紋。内底に重ね模。縦筋系。	造成2	III-1
	24	中国産白磁	皿	E群	底部	—	—	(2.8)	素地は乳白色。釉は青白色で内外面に施し、覆付け釉剥ぎ。高台内面は下より露胎。内面には陽刻の菊文。景徳鎮系。	造成3	III-1
	25	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底部	(13.0)	5.8	(6.8)	素地は灰白色。釉は明緑灰色で内外面に施し、覆付け釉剥ぎ。外面に寿字文と菊文。粘土ジワあり。	造成1	III-1
	26	中国産青花	小碗	景德鎮窯系	口～底部	(9.8)	4.7	(4.2)	素地は白色。透明釉を内外面に施し、覆付け釉剥ぎ。外面に文書手。内底に草花文か。外縁に鉄あり。	造成1	III-1

表9 出土遺物観察一覧 b

図版番号	番号	種類	部種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	底台径		旧	新
図版 48	27	中国産青花	鉢	福建・広東系	底部	—	—	(12.8)	素地は灰白色で、黒色粒を含む。釉は明緑灰色で内外面施釉後、復行輪割す。見込み蛇の目状に施釉。外面に丸文が。	造成1	Ⅲ-1
	28	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底部	(14.8)	13.6	(7.4)	素地は白色。釉は明緑灰色で内外面施釉後、復行輪割す。文様は外面に丸文と木の葉文、内面は三草文か。粘土シワあり。	造成2	Ⅲ-1
	29	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底部	(14.9)	6.5	(8.5)	素地は灰白色。釉は灰白色で全面施釉後、胴下部輪割す。見込み蛇の目状に施釉。外面はコンニャク印で菊花文と三角文。内面口縁部及び胴下部に黒線1条ずつ通る。	造成2	Ⅲ-1
	30	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底部	(14.2)	5.4	8.8	素地は灰白色で、黒色粒を含む。釉は明緑灰色で外面は復付以外を施釉。内面は胴下部で輪割す。見込み蛇の目状に施釉。外面にコンニャク印で施文。	造成2	Ⅲ-1
	31	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	8.4	素地は淡黄色。釉は灰白色で内外面胴部まで施釉し、見込み蛇の目状に施釉。外面にコンニャク印で施文。	造成2	Ⅲ-1
	32	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁部	(11.6)	—	—	素地は淡黄色で、黒色粒を含む。釉は灰白色で内外面施釉。文様は発色が悪く、外面に花唐草文が。	造成2	Ⅲ-1
	33	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	(6.2)	素地は淡黄色で、黒色粒を含む。焼成悪い。釉は灰白色で内外面施釉後、復行輪割す。内底に茶葉文、貫入あり。	造成2	Ⅲ-1
	34	中国産青花	小碗	景德鎮窯系	口～底部	(10.0)	5.0	4.4	素地は白色。釉は明緑灰色で内外面施釉後、復行輪割す。文様は外面に草文、内底に花片文。外底に銘あり。	造成2	Ⅲ-1
	35	中国産青花	小碗	景德鎮窯系	底部	—	—	4.7	素地は白色。釉は明緑灰色で内面と外面胴部まで施釉し、外底露胎。内外面に不明文。	造成2	Ⅲ-1
	36	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底部	(20.6)	3.8	(12.2)	素地は灰白色。釉は明緑灰色で内外面施釉後、復行輪割す。外面に足虫文？と外底に宝文。内面に草文、内底に何枝文。粘土シワあり。	造成2	Ⅲ-1
図版 49	37	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底部	(9.1)	2.0	(6.6)	素地は灰白色。釉は明緑灰色で内面から底台脇まで施釉。口唇輪割す。内面に2条の黒線と内底に不明文。	造成2	Ⅲ-1
	38	中国産青花	鉢	福建・広東系	底部	—	—	(12.7)	素地は灰白色で縦割。釉は明緑灰色で外面は施釉後、復付輪割す。内面は胴下部から露胎。見込み蛇の目状に施釉。外面に不明文。内底に黒線が2条。	造成2	Ⅲ-1
	39	中国産青花	瓶	景德鎮窯系	底部	—	—	底径(5.6)	素地は白色。釉は明緑灰色で内外面施釉後、外底輪割す。外面胴部に沈線で宝相唐草文、外面下部には連珠文。内面銘目あり。	造成3	Ⅲ-1
	40	中国産釉陶器	鉢	—	口縁部	(37.4)	—	—	素地は灰白色で白色粒散り。外面に茶褐色。内面に黄褐色の釉を施釉。口縁内側に逆し字状に肥厚。	造成2・4	Ⅲ-1
	41	中国産色絵	碗	徳化窯系	口～底部	(13.7)	6.6	(7.4)	素地は灰白色。釉は明緑灰色を施釉。粉彩で外面に赤・青・黄色で区分けされた斜格字文。胴部に赤で蓮文。	造成1	Ⅲ-1
	42	中国産色絵	碗	景德鎮窯系	口縁部	(18.8)	—	—	素地は白色。欠透釉を内外面施釉。外面は赤・黄・緑色で草文、内面は赤で花葉文。	造成3	Ⅲ-1
	43	中国産燐焼	小碗	徳化窯系	口～底部	(9.2)	4.0	(9.2)	素地は灰白色。釉は内面透明釉で外面珐瑯釉を施釉し、口唇部・唇付は輪割す。	造成2	Ⅲ-1
	44	中国産釉陶器	小碗	景德鎮窯系	底部	—	—	(4.0)	素地は白色。外面に肥胎。内面には明緑灰色を施釉。内底に2条の黒線と山水文を施す。内底粘土シワあり。	造成2	Ⅲ-1
	45	中国産素三彩	器種不明	—	底部	—	—	(5.8)	素地は灰白色。内外面に緑釉かオリーブ色の釉を施釉。外底は露胎するが、1条黒線が通る。	造成2	Ⅲ-1
	46	ベトナム産青花	碗	—	胴部	—	—	—	素地は灰白色。白化乾後。両面に透明釉を施釉。外面に黒線2条と唐草文。5と同一個体か。	造成3	Ⅲ-1
図版 50	47	本土産染付	蓋	肥前系	—	—	口径(8.8)	底径(10.5)	素地は灰白色。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に草文文と菊花枝文が。	造成1	Ⅲ-1
	48	本土産染付	瓶	肥前系	口～胴部	3.1	—	—	素地は灰白色。釉は青白色で外面と内面胴部途中まで施釉。胴部との境に二重黒線が通る。その上に斜目文が描かれる。	造成1	Ⅲ-1
	49	本土産染付	碗	肥前系？	口縁部	(10.2)	—	—	素地は灰白色。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に山人物文。貫入あり。	造成2	Ⅲ-1
	50	本土産染付	碗	細器陶器	底部	—	—	2.0	素地は白色。釉は内面共に青白色で、復付輪割す。内面に手摺きによる現状色竹梅？が施される。	造成2	Ⅲ-1
	51	本土産染付	皿	細器陶器	口～底部	(10.4)	3.2	(4.4)	素地は灰白色。内外面に共に青白色で施釉。復付に砂付着。文様は内面口縁に四方唐文。見込み二重黒線と、コンニャク印による五弁花文。	造成2	Ⅲ-1
	52	本土産色絵	皿	京焼	口～底部	(12.1)	4.35	(4.0)	素地は淡黄色。釉は内外面に透明釉を施釉し。外面胴部以下は露胎。貫入多い。内面に縦並な唐草文。	造成1	Ⅲ-1

表10 出土遺物観察一覧 c

図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	層序	
						口径	器高	高台径		目	新
図版50	53	本土産陶器	小皿	関西系	底部	—	—	(4.2)	素地は灰白色で軟質。軸は白釉で内底から外面胴部まで施釉。	造成2	Ⅲ-1
	54	本土産陶器	急須	畿内系	口縁部	—	—	—	素地は灰色。内外面に透明釉を施釉。外面に象眼により梅文や印花文、面線を描す。約り手部は型成形。	造成2	Ⅲ-1
	55	本土産陶器	碗	関西系	口～底部	(10.8)	6.1	(4.8)	素地は灰白色で軟質。内外面に白色釉を施釉し、外面高台脇以下は露胎。杉形碗。	造成2	Ⅲ-1
図版51	56	本土産陶器	碗	信楽焼	口縁部	—	—	—	素地は灰色。粗めの器入物を多く含む。口縁は外面に削り返して肥厚させる。	造成2	Ⅲ-1
	57	本土産陶器	播鉢	備前系	口縁部	(25.3)	—	—	素地は淡赤褐色で、多量の砂粒が混じる。内外両面に體輪刻あり。	造成3	Ⅲ-1
	58	本土産陶器	播鉢	備前系	口縁部	(32.0)	—	—	素地は灰色と淡赤褐色でサンドイッチ状。白色粒がわずかに混じる。内面に10条1組の縞目あり。	造成3	Ⅲ-1
図版52	59	本土産陶器	播鉢	備前系	口縁部	—	—	—	素地はによい赤褐色。内面に9条1組の縞目。「く」の字状の口縁。	造成3	Ⅲ-1
	60	産地不明陶器	鉢	—	—	—	—	—	素地はによい褐色。赤色粒や白色粒を多く含む。一方から穿孔。	造成3	Ⅲ-1
	61	沖繩産施釉陶器	皿	—	口～底部	(14.0)	4.3	(9.4)	素地は灰色。白釉を内外面に施釉。外面に線刻の唐草文、内面に草文や印花文、斜状線を描す。稜花口縁で蛇目四角形高台。	造成1	Ⅲ-1
図版53	62	沖繩産施釉陶器	碗	B-1	口～底部	(14.2)	6.0	(7.1)	素地は灰色。軸は赤褐色で内外面胴下部まで施釉。	造成2	Ⅲ-1
	63	沖繩産施釉陶器	碗	A-1	口～底部	(13.2)	6.1	(7.9)	素地は浅黄褐色。軸はオリーブ灰色で内外面胴下部まで施釉。	造成2	Ⅲ-1
	64	沖繩産施釉陶器	碗	A-1	口～底部	(13.4)	6.3	(6.9)	素地は浅黄色。軸は灰オリーブで内外面胴下部まで施釉。高台内「中」の書あり。	造成2	Ⅲ-1
図版54	65	沖繩産施釉陶器	皿	—	底部	—	—	(6.6)	素地は灰白色。軸はオリーブ灰色で外面のみ施釉。費付輪割ぎ。高台内外に砂付着。	造成2	Ⅲ-1
	66	沖繩産施釉陶器	小碗	B-2	口～底部	(9.1)	4.5	4.0	素地は灰色。内面は白化粧後、透明釉。外面は施釉施釉。内底蛇の目状に輪割ぎ。費付に耐火土付着。	造成2	Ⅲ-1
	67	沖繩産施釉陶器	小碗	B-2	口縁部	(9.6)	—	—	素地は灰白色。内面は白化粧後、透明釉。外面は施釉で口縁部のみ施釉。胴部に口縁部片が溶着。	造成2	Ⅲ-1
図版55	68	沖繩産施釉陶器	小碗	C類	底部	—	—	4.4	素地は灰色。白化粧を高台まで施し、透明釉を施釉。外面胴部面取り。	造成2	Ⅲ-1
	69	沖繩産施釉陶器	碗	D類	口～底部	(7.7)	5.0	5.4	素地は灰色で黒色粒混じり。軸は明オリーブ灰色で内外面に施釉。内底に面線1条。筒型碗。	造成2	Ⅲ-1
	70	沖繩産施釉陶器	鉢	—	底部	—	—	9.1	素地は灰白色で軟質。軸は明オリーブ灰色で内外面胴下部まで施釉。内底鉄輪を塗布。高台内には「御近習」の書あり。	造成2	Ⅲ-1
図版56	71	沖繩産施釉陶器	蓋	—	完形	—	口径4.4	底径6.3	素地はによい赤褐色。軸は明オリーブ灰色で外面のみ施釉。	造成2	Ⅲ-1
	72	沖繩産施釉陶器	蓋	—	胴	直径4.5	—	—	素地は褐色で白色粒が多く混じる。軸は灰黄褐色で外面のみ施釉。胴高台状。	造成2	Ⅲ-1
	73	沖繩産施釉陶器	急須	—	口～底部	(6.6)	—	底径(11.0)	素地は暗灰色。軸は暗褐色で内底から外面胴部に施釉。口唇輪割ぎ。	造成2	Ⅲ-1
図版57	74	沖繩産施釉陶器	急須	—	口縁部	(6.5)	—	—	素地は灰色。軸は黒褐色で内面胴上部から外面胴部。口唇輪割ぎ。	造成2	Ⅲ-1
	75	初期沖繩産無釉陶器	碗	—	口～底部	(14.2)	5.8	(7.2)	素地はによい赤褐色。断面に白土が落状に入る。ロクロ成形。	造成2	Ⅲ-1
	76	初期沖繩産無釉陶器	碗	—	口～底部	(13.3)	5.1	(7.0)	素地はによい赤褐色。細かな白色粒混じる。	造成2	Ⅲ-1
図版58	77	初期沖繩産無釉陶器	皿	—	口～底部	(11.0)	2.9	底径(3.9)	素地は褐色。白色粒混じる。ベタ底。	造成2	Ⅲ-1
	78	初期沖繩産無釉陶器	碗	—	口縁部	(19.8)	—	—	素地はによい赤褐色。石灰粒混じる。外面に自然釉が掛かる。外側に削り面で口縁部を方形状に成形。	造成2	Ⅲ-1

表 11 出土遺物観察一覧 d

図版番号	番号	種類	部種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	高台径		旧	新
図版 52	79	初期沖縄産 無釉陶器	甕	—	口縁部	(16.8)	—	—	素地は赤褐色。断面に白土が筋状に入る。外側に折り曲げ口縁部を主縁状に成形。	造成 2	Ⅲ-1
	80	初期沖縄産 無釉陶器	甕	—	口縁部	(12.4)	—	—	素地は灰色。黒色粒混じり。断面に白土が筋状に入る。内外面に釉が掛かる。	造成 2	Ⅲ-1
	81	初期沖縄産 無釉陶器	甕鉢	—	口～底部	(30.4)	12.0	底径 (10.0)	素地はにぶい赤褐色。白色粒混じり。内底砂付着。内面密な黒目。	造成 2	Ⅲ-1
	82	初期沖縄産 無釉陶器	甕鉢	—	口縁部	(30.4)	—	—	R1と同一個体か。	造成 2	Ⅲ-1
	83	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	—	口～底部	(18.4)	9.7	底径 (8.8)	素地はにぶい赤褐色。断面に白土が筋状に入る。外面一部に釉が掛かる。	造成 2	Ⅲ-1
	84	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	—	口～底部	(15.6)	8.0	底径 (8.4)	素地は赤褐色。白色粒や赤色粒混じり。肩部に波状文。外面一部に釉が掛かる。	造成 2	Ⅲ-1
	85	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	—	口縁部	—	—	—	素地はにぶい赤褐色。白色粒混じり。肩部に3条の沈線。	造成 2	Ⅲ-1
	86	初期沖縄産 無釉陶器	植木鉢	—	口縁部	(34.4)	—	—	素地は赤褐色。黒色粒や白色粒混じり。口唇に波状凸部。外面に菊文。	造成 2	Ⅲ-1
	87	初期沖縄産 無釉陶器	植木鉢	—	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色。断面に白土が筋状に入る。内外面に施釉。外面には龍を貼り付け。	造成 2	Ⅲ-1
	88	初期沖縄産 無釉陶器	植木鉢	—	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色。断面に白土が筋状に入る。内外面に施釉。外面には鱗状に粘土を貼り付け。	造成 2	Ⅲ-1
図版 53	89	初期沖縄産 無釉陶器	植木鉢	—	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色。白色粒混じり。内外面に施釉。外面には鱗状に粘土を貼り付け。	造成 2	Ⅲ-1
	90	初期沖縄産 無釉陶器	植木鉢	—	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色。断面に白土が筋状に入る。内外面に施釉。外面に粘土で施文。	造成 2	Ⅲ-1
	91	初期沖縄産 無釉陶器	火取	—	口～底部	(11.8)	7.0	(7.2)	素地はにぶい赤褐色。白色粒が混じり。外面胴部から内面口縁部にかけて釉が掛かる。	造成 2	Ⅲ-1
	92	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	—	胴～底部	胴径 (12.6)	3.3	底径 (22.0)	素地はにぶい赤褐色。断面に白色や赤色の筋。外面自然釉。	造成 2	Ⅲ-1
	93	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	—	口～底部	(11.0)	3.2	底径 4.2	素地は灰赤色。黒色粒混じり。	造成 2	Ⅲ-1
	94	沖縄産無釉陶器	瓶	—	胴部	—	—	—	素地は赤褐色。釉は明赤灰色で外面のみ施釉。胴部2条の沈線文。	造成 2	Ⅲ-1
	95	沖縄産無釉陶器	甕鉢	—	口～底部	(29.4)	19.3	底径 (14.2)	素地は褐色。据付きの片口攪鉢。胴上部に孔あり。口縁部は逆L字状に折曲させる。	造成 2	Ⅲ-1
	96	沖縄産無釉陶器	植木鉢	—	底部	—	—	底径 (18.4)	素地は褐色で、赤色粒及び黒色粒が混じり。胴部に沈線で施文。底部中央に孔あり。据付。	造成 2	Ⅲ-1
	97	沖縄産無釉陶器	急須	—	口～底部	11.2	9.7	底径 8.5	素地は明赤褐色で、白色粒混じり。頸部に2条。胴部に1条の沈線文。	造成 2	Ⅲ-1
	98	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底部	11.0	3.3	底径 3.9	素地は褐色。口縁部内外に煤。底部内面に炭化物付着。	造成 2	Ⅲ-1
図版 54	99	沖縄産無釉陶器	蓋	—	—	口径 (10.8)	5.0	底径 14.1	素地は褐色で、赤色粒混じり。甲から底部を平坦に成形。内径は10.9cm。重さ3.2g。	造成 2	Ⅲ-1
	100	瓦葺土器	甕鉢	—	口縁部	(15.0)	—	—	素地は黄灰色。且類混入。内面密な黒目。	造成 3	Ⅲ-1
	101	埴管	—	陶管Ⅰ類	雁首	長さ 4.2	高さ 2.35	—	明張系瓦を使った未製品。複数面を削り、方形状に成形。重さ38.5g。	造成 2	Ⅲ-1
	102	埴管	—	陶管Ⅱ類	雁首	長さ (2.5)	高さ (1.6)	—	沖縄産無釉陶器製。素地は浅黄褐色。縁部に外面及び火道に施釉。火道外径は1.4cm、内径は1.1cm、小口外径は1.4cm、内径は10.9cm。重さ3.2g。	造成 2	Ⅲ-1
	103	埴管	—	陶管Ⅲ類	雁首	長さ 3.9	高さ 1.5	—	沖縄産無釉陶器製。素地は赤褐色。内外面に自然釉が掛かる。火道外径は1.7cm、内径は1.2cm、小口外径は1.55cm、内径は1.0cm。重さ10.0g。	造成 2	Ⅲ-1
	104	埴管	—	金首Ⅳ類	雁首	—	—	—	小口付近を面取りする。一部剥金。火道部欠損。小口外径は0.95cm、内径は0.8cm。重さ10.8g。7とセットか。	造成 2	Ⅲ-1

表 12 出土遺物観察一覧 e

図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	高径		目	新
図版 55	105	燈管	—	陶口 I 類	吸口	長さ 2.65	高さ 1.5	—	片破花施軸陶器製。素地は灰白色。透明軸を外面に施軸し、断面を軸割ぎ。吸口外径10.5cm、内径10.4cm、小口外径は11.35cm、内径は10.9cm、重さ3.9g。	造成 2	III - 1
	106	金属製品	引手金具	—	把手	長さ 7.56	厚 0.52 ~ 0.26	皿 長さ 2.24	先端は球形で、留金具が片方のみ残る。重さ9.8gと0.5g。	造成 1	III - 1
	107	金属製品	八双金具	—	—	—	幅 1.63	厚さ 0.06	表面鍍金で、毛彫りにより中央には花文、文様間には魚ヶ子を施す。円孔は裏面から穿孔。重さ4.8g。	造成 2	III - 1
	108	金属製品	簪	II C 類	完形	カブ長 1.37	皿長 1.91	ムデイ 2.20	カブは花形で一部鍍金残る。頭部及び竿部は六角形、ムデイは螺旋状で、竿の先端は四角錐、花部は表面のみ残る。竿長は3.08cm、重さは4.4g。	造成 2	III - 1
	109	金属製品	簪	III Ba 類	完形	—	—	—	カブは耳かき状で、一部鍍金残る。断面形は頭部が円形、竿部は六角形で先端は細く尖る。重さ5.6g。	造成 2	III - 1
	110	金属製品	簪	III Bb 類	完形	カブ長 0.72	—	—	カブは耳かき状で、一部鍍金残る。断面形は頭部が円形、竿部は六角形で、竿の先端は細く尖る。重さ3.4g。	造成 2	III - 1
	111	金属製品	簪	III Bb 類	完形	カブ長 0.75	皿長 1.54	ムデイ 0.41	カブは耳かき状で、一部鍍金残る。断面形は頭部が円形、ムデイは球形、竿の先端は細く尖る。重さ3.1g。	造成 2	III - 1
	112	金属製品	指輪	—	—	外径 1.4	厚さ 0.3	0.05	金製指輪。外面に四葉の花文と中央の文様を交互に施す。内径約1.3cm、重さ0.9g。	造成 2	III - 1
	113	金属製品	立物飾り	—	—	—	幅 2.55	厚さ 0.08	表面鍍金。毛彫りで菊文や蔓草文を施す。中央に円孔。文様間は魚ヶ子で密に埋める。重さ4.3g。	造成 3	III - 1
	114	金属製品	簪	III C 類	完形	カブ長 0.36	皿長 0.78	ムデイ 1.58	カブは匙状で、一部鍍金残る。ムデイは螺旋状をなし、竿の先端は刺のようになる。竿長は7.35cm、重さ6.1g。	造成 3	III - 1
図版 56	115	鉄製品	簪	皿類	—	残存長 4.55	—	—	菱面式。錆割れにより割裂としないが、基部をソケット状に差し込むタイプが、重さ13.2g。	造成 3	III - 1
	116	鉄滓	碗形滓	—	—	縦 7.6	横 9.6	—	多孔質で表面に木炭付着。重さ424.7g。	造成 3 ブロック C	III - 1
	117	銭貨	寛永通寶	古寛永	—	外径 2.46	孔径 0.75	厚さ 0.11	初陣年1636年。1期：1636から1659年。重さ3.0g。	造成 2	III - 1
	118	銭貨	寛永通寶	古寛永	—	外径 2.41	孔径 0.59	厚さ 0.11	1期：1636から1659年。重さ3.0g。	造成 2	III - 1
	119	銭貨	寛永通寶	新寛永	—	外径 2.46	孔径 0.55	厚さ 0.15	2期：1668から1683年。文銭。重さ4.5g。	造成 2	III - 1
	120	銭貨	寛永通寶	新寛永	—	外径 2.3	孔径 0.62	厚さ 0.11	3期：1697から1747、1767から1781年。背面無文。重さ2.6g。	造成 2	III - 1
	121	銭貨	應永銭	—	—	外径 1.93	孔径 0.51 ~ 0.56	厚さ 0.12	火通の外底から穿孔か。重さ1.2g。	造成 2	III - 1
	122	銭貨	紹興通寶	—	—	外径 3.06	孔径 0.76	厚さ 0.14	初陣年1131年(南宋)。折二銭。重さ6.1g。	造成 3	III - 1
	123	銭貨	—	—	—	外径 2.49	孔径 1.04 ~ 1.07	厚さ 0.12	文字判読不可。中央円孔。重さ3.3g。	造成 3	III - 1
	124	玉類	玉	I 類	完形	外径 0.39	高さ 0.37	孔径 0.1	ガラス製。色調：緑色。	造成 2	III - 1
図版 57	125	玉類	勾玉	—	—	外径 0.76	—	孔径 0.31	ガラス製。尾節欠損。	造成 3	III - 1
	126	ガラス製品	碁石	碁盤型	完形	直径 1.69	—	—	色調：白色。	造成 2	III - 1
	127	石製品	碁石	—	—	縦 4.2	横 2.1	厚さ 2.2	石材：軽石 加工面：全面研磨 使用痕：磨痕	造成 2	III - 1
	128	中国産青磁	碗	VI - 0 類	口~底部 (13.6)	6.3	6.0	—	素地は灰白色で軟質。軸は明緑灰色で外底軸割ぎされず、一部軸が露かる。	造成 4	III - 2
	129	中国産青磁	皿	VI - 1 類	口~底部 (10.8)	2.65	(6.8)	—	素地は灰白色で軟質。軸はオリーブ灰色で全面軸割ぎ、外底を蛇の目状に軸割ぎ。外面軸割ぎ並文、内面凹みによる蓮弁文。見込みには印花文を施すとみられるが詳細不明。	造成 4	III - 2
図版 58	130	中国産青磁	皿	V - 1 類	底部	—	—	(10.4)	素地は灰白色。軸は明緑灰色で外底を蛇の目状に軸割ぎ。外面蓮弁文。内面は2段構成で凹状の蓮弁文を施す。	造成 4	III - 2

表 13 出土遺物観察一覧 f

図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	高台径		旧	新
図版 57	131	中国産青磁	蓋	—	—	—	口径 (7.0)	底径 (7.6)	素地は灰白色。軸は明オリーブ灰。底部で磨蝕。	造成 4	Ⅲ-2
	132	中国産青磁	蓋	—	—	—	—	底径 (3.2)	素地は灰白色。軸はオリーブ灰で外面のみ厚く施釉。蓋上面は菊文を成形。袴部欠。	造成 4	Ⅲ-2
	133	中国産青磁	高足杯	—	口縁部	(6.8)	—	—	素地は灰白色で吸釉。軸はオリーブ灰。外面胴部に1条の線を描き、上下に3条1組のくし模様を縦位に施す。内面は縦位のくし模様のみ。	造成 4	Ⅲ-2
	134	中国産白磁	皿	D 群	口～底部	(7.2)	2.6	(3.8)	素地は黄白色で軟質。軸は灰白色で貫入あり。内面と外面胴部まで施釉。八角口。扁蹄系。	造成 4	Ⅲ-2
図版 58	135	中国産青花	碗	漳州窯系	口縁部	(16.2)	—	—	素地は灰白色で、褐色粒を含む。焼成は悪い。軸は灰白色で両面施釉しているが、状態が悪く一部剥離している。文様は外面に区画文。内面口縁部に菊文。細い貫入あり。	造成 4	Ⅲ-2
	136	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁部	(14.6)	—	—	素地は灰白色で、褐色粒を含む。軸は明緑灰色で外面と内面胴部まで施釉。内底磨蝕。外面にコンチャ印文あり。	造成 4	Ⅲ-2
	137	中国産褐釉陶器	壺	—	口縁部	(35.4)	—	—	素地は灰褐色。白色粒・褐色粒・赤色粒を含む。内外面に褐色施釉。内面底部のみ露胎。口縁部を内側へ折り曲げ、肥厚させる。外面胴部から胴部にかけて横線の明き目線が残る。	造成 4	Ⅲ-2
	138	中国産黄釉陶器	小皿	—	口～底部	—	—	—	素地は灰褐色で軟質。白化粧後に黄釉を内外面に施釉し、黄付は軸割する。外面に蓮華文。枝花口縁。	造成 4	Ⅲ-2
	139	タイ産鉄胎	合子	蓋	胴～底部	—	—	(9.2)	素地は灰色で、黒色・白色粒が多量に混じる。外面のみ施釉され、底端部は軸割す。外面に斜目文、区画文、花唐草文を縦位に配置。シーサーチャナライ文あり。	造成 4	Ⅲ-2
	140	本土産色絵	袋物	薩摩系	口縁部	—	—	—	素地は黄白色。内外面に共に透明釉を施釉。外面に赤・青・緑で絵付けが施されるが文様は判然としない。裏面に磨蝕痕あり。	造成 4	Ⅲ-2
	141	本土産陶器	壺	薩摩系	底部	—	—	底径 (18.6)	素地は暗赤褐色で粗く。石灰・白色粒を多く含む。施釉は全面に施釉。外面に縦筋による磨蝕。	造成 4	Ⅲ-2
	142	沖縄産施釉陶器	碗	A-2	口～底部	(12.7)	4.8	(6.8)	素地は灰白色。軸は明オリーブ灰で内外面胴部まで施釉。内底に磨蝕。外面鉄胎。	造成 4	Ⅲ-2
	143	沖縄産施釉陶器	小碗	A-1	口～底部	(8.5)	3.65	(4.1)	素地は灰白色。軸は明オリーブ灰で内外面胴部まで施釉。	造成 4	Ⅲ-2
	144	沖縄産施釉陶器	急須	—	口～底部	—	—	—	素地は灰白色。軸はオリーブ褐色。内面は内底から胴部、外面は口縁から腹部まで施釉。口縁部割す。	造成 4	Ⅲ-2
図版 59	145	沖縄産施釉陶器	碗	A-1	口～底部	(13.4)	6.1	(7.3)	素地は灰色。軸はオリーブ灰で内外面胴部まで施釉。	造成 4	Ⅲ-2
	146	初期沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底部	(11.3)	2.6	底径 (4.4)	素地はよい赤褐色。石英粒が混じる。	造成 4	Ⅲ-2
	147	瓦葺土器	火鉢	—	底部	—	—	—	素地は黄灰色。胴部貼付で、内底から胴部途中まで段目を設ける。内面模刻。	造成 4	Ⅲ-2
	148	燈管	—	陶器 I 類	首首	長さ 2.5	高さ 1.85	—	素地はよい黄褐色。転用品で火皿と小口に接合。火皿外径は1.75cm、内径は1.35cm。小口外径は1.0cm、内径は0.9cm。重さ10.0g。	造成 4	Ⅲ-2
	149	金属製品	飾り金具	—	—	—	幅 0.99	厚さ 0.06	表面毛彫りで梅花文。裏文。文様間には魚子で埋める。中央に円孔1箇所。華岡などの飾り金具。重さ21.8g。	造成 4	Ⅲ-2
	150	金属製品	指輪	—	—	幅(大) 1.08	幅(小) 0.27	厚さ 0.15	一部鍍金残る。中央の面を広く成形し、中央にひし形の文様を施す。重さ2.1g。	造成 4	Ⅲ-2
	151	鉄製品	刀子	—	—	残存長 3.4	—	—	青は直線的。切っ先欠損。重さ5.6g。	造成 4	Ⅲ-2
	152	鉄製品	刀子	—	—	残存長 12.1 + 4.1	—	—	錆蝕が著しい。青は直線的で基部には孔がみられない。重さ57.0g + 11.1g。	造成 4	Ⅲ-2
	153	銭貨	政和通寶	—	—	外径 2.93	孔径 0.61	厚さ 0.19	初鑄年1111年(北宋)。篆書。折二銭。重さ7.7g。	造成 4	Ⅲ-2
	154	銭貨	景祐元寶?	—	—	外径 (2.47)	孔径 (0.67)	厚さ 0.12	初鑄年1034年(北宋)。文字が讀れ、判然としない。重さ1.8g。	造成 4	Ⅲ-2
図版 60	155	銭貨	元祐通寶?	—	—	外径 2.13	孔径 0.54	厚さ 0.17	初鑄年1093年(北宋)。行書。縁青ひくい。重さ2.3g。	造成 4	Ⅲ-2
	156	石製品	碁石	—	—	縦 14.0	横 9.9	厚さ 4.9	石材:細粒砂岩 使用痕:擦り 痕付着。	造成 4	Ⅲ-2

表 14 出土遺物観察一覧 g

図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	高台径		旧	新
図版 60	157	石製品	石弾	—	—	縦 6.9	横 6.9	厚さ 5.8	石材：砂岩 加工痕：敲打 使用痕：なし	造成 4	Ⅲ - 2
	158	石製品	石弾	—	—	縦 2.95	横 3.3	厚さ 3.2	石材：石灰岩 加工痕：敲打 使用痕：なし	造成 4	Ⅲ - 2
	159	石造物	礎石	—	—	縦 12.6	横 21.6	厚さ 5.5	石材：砂岩 火の影響を受けた痕跡有。スス付着。	造成 4	Ⅲ - 2
	160	中国産青磁	碗	Ⅴ - 1 類	口～底部	(13.2)	7.8	(6.0)	素地は灰白色で焼成不良。釉は明緑灰色で高台内側まで施釉。外面に線刻縦道弁文を施すが、釉により不鮮明。	造成 7	Ⅲ - 3
	161	中国産青磁	皿	Ⅴ - 0 類	口～底部	(11.8)	3.7	(7.2)	素地は灰白色。濃い緑色の釉を厚く施釉後、外底の目状に施釉す。内面へう掻きによる草花文、見込み印花文。	造成 7	Ⅲ - 3
	162	中国産青磁	碗	Ⅴ - 0 類	底部	—	—	6.2	素地は灰白色。釉はオリブ灰色で外底面蛇の目状に施釉す。見込みに横線と印花文。	造成 8	Ⅲ - 3
図版 61	163	中国産青磁	碗	Ⅴ - 2 類	口～底部	(12.0)	6.1	(6.1)	素地は灰白色で焼成不良。釉は濃い緑色でガラス質。外底面蛇の目状に施釉す。外面へう掻きによる雷文及び草花文、内面草花文、見込みに印花文。	造成 8	Ⅲ - 3
	164	中国産青磁	合子	蓋	—	(10.4)	—	—	素地は灰白色。外面オリブ灰色釉。内面透明釉を施釉。底端部露胎。	造成 8	Ⅲ - 3
	165	中国産白磁	皿	E 群	口～底部	(20.8)	4.6	(12.6)	素地は白色。釉は失透釉を内外外面施釉後、高台内外面下部を施釉す。費付け断面欠。景徳鎮系。	造成 5	Ⅲ - 3
	166	中国産白磁	小皿	D 群	口～底部	(7.9)	1.8	(4.8)	素地は灰白色。透明釉を内外外面施釉。外面に轆轤痕。持ち高台。内底に重ね痕。福建系。	造成 7	Ⅲ - 3
	167	中国産青花	碗	Ⅲ 群 明Ⅰ - 1	口縁部	(16.0)	—	—	素地は灰白色で、褐色粒を含む。釉は明緑灰色で内外外面施釉。口唇口唇。外面に横線と雷文？。内面には横線。貫入あり。	造成 6	Ⅲ - 3
	168	中国産青花	碗	Ⅲ 群 明Ⅱ - 1	口～底部	(9.6)	2.2	(6.0)	素地は白色で灰濁。釉は明緑灰色で内外外面施釉。費付け施釉す。文様は外面に宝珠唐草文、内底に十字花文。福建系。	造成 7	Ⅲ - 3
	169	中国産青花	皿	Ⅲ 群 明Ⅱ - 1	底部	—	—	(5.4)	素地は外面に宝珠唐草文。内底に十字花文。費付け部に砂付着。	造成 7	Ⅲ - 3
	170	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	口縁部	(8.4)	—	—	素地は白色。釉は明緑灰色で内外外面施釉。文様は外面に横線と文字文が、轆轤成形。	造成 6	Ⅲ - 3
	171	中国産褐釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	素地は灰白色。黒色粒・白色粒混じる。外面に施釉。内面は露胎。葉文を外面に貼付。	造成 6	Ⅲ - 3
	172	中国産褐釉陶器	横木鉢	—	胴部	—	—	—	素地は灰白色。白・黒色粒混じる。外面に網目状変帯が巡る。変帯から上部は施釉を施釉。変帯以下露胎。	造成 7	Ⅲ - 3
図版 62	173	中国産褐釉陶器	横木鉢	—	底部	—	—	—	172と同一個体か。全面的に露胎しているが、釉垂れあり。	造成 7	Ⅲ - 3
	174	中国産褐釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	素地は灰白色で黒色粒・白色粒混じる。釉は黒褐色で外面に施釉し。内面は露胎。横木貼付。内外面の轆轤痕残る。	造成 8	Ⅲ - 3
	175	中国産三彩	盤	—	口縁部	—	—	—	素地は灰白色で軟質。石炭がわずかに混入。内外外面施釉するが、緑釉以外は剥がれる。横花口縁で口唇部に花文が施される。	造成 6	Ⅲ - 3
	176	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	素地は黄白色で軟質。緑・黄色の釉を外面に施釉。外面に葉文。胴部は瓜状になると思われる。水注の注ぎ口か。	造成 6	Ⅲ - 3
	177	中国産天目	碗	—	口縁部	(11.4)	—	—	素地は灰褐色。内面から外面胴部にかけて黒釉。一部施釉剥がれ。胴部以下露胎。承目天目。	造成 7	Ⅲ - 3
	178	中国産陶器	茶碗	—	底部	—	—	底径 (2.6)	素地は灰褐色で粗密。内底面に黒色釉と思われる黒帯を施す法がわずかに付着。内面に轆轤痕。底部外面に未切削有。	造成 7	Ⅲ - 3
	179	タイ産褐釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	素地は赤褐色で硬質。釉薬はオリブ黒色と黄褐色の釉を外面に施釉。内面丁寧なナデ消し。メナムノイ系。	造成 6	Ⅲ - 3
	180	タイ産褐釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	179と同一個体と思われる。	造成 6	Ⅲ - 3
	181	タイ産褐釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	素地は赤褐色で硬質。釉薬はオリブ黒色と黄褐色の釉を外面に施釉。内面丁寧なナデ消し。メナムノイ系。	造成 7	Ⅲ - 3
	182	タイ産平縁土器	蓋	—	胴～底部	胴(径) 2.6	3.2	底径 13.0	器色は淡褐色。器入物を多く含む。釉は黄褐色。底端部は斜り曲げて先端部の突起を断面三角形形状に成形。	造成 7	Ⅲ - 3

表 15 出土遺物観察一覧 h

図版番号	番号	種類	部種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	底径		旧	新
図版 62	183	タイ産陶軸陶器	瓶	—	口縁部	—	—	—	素地は灰色。黒褐色釉を頸部中央付近まで内外面に施軸。内面縦線あり。シーサッチャナライ遺跡。	造成 8	Ⅲ - 3
	184	タイ産半硬土器	壺	—	胴部	—	—	—	器色外面は灰褐色。内面は淡褐色。混入物を多く含む。外面に青銅版文のような模様が施されている。	造成 8	Ⅲ - 3
	185	タイ産鉄胎	瓶	—	胴部	—	—	—	素地は灰色で黒色粒が多量に混ざる。外面のみ縦線で、鉄胎による施文。シーサッチャナライ遺跡。	造成 6	Ⅲ - 3
	186	ベトナム産白磁	瓶	—	口縁部	—	—	—	素地は白色で全面に透明釉を施軸。肩稜状に薄い部肌。内面に雲母による圓網 2 条と牡丹唐草文が施される。	造成 6	Ⅲ - 3
図版 63	187	ベトナム産青花	壺	—	胴部	—	—	—	素地は灰白色。白化乾燥。両面に透明釉を施軸。外面に魚文。厚みを出すために粘土を 2 層貼り付け、46 と同一個体か。	造成 8	Ⅲ - 3
	188	本土産陶器	罐鉢	備前系	底部	—	—	—	素地は赤褐色で卑緻。	造成 5	Ⅲ - 3
	189	土器	蓋	—	—	—	—	(16.2)	素地は淡褐色で。軟質。胴や底はなく、底部下面は角が無く丸みを帯びる。中国産か。	造成 7	Ⅲ - 3
	190	沖縄産無釉陶器	罐鉢	—	底部	—	—	—	素地は明赤褐色で白色粒混じる。内面の標目には密に施される。	造成 6	Ⅲ - 3
	191	瓦質土器	鉢	—	口縁部	—	—	—	素地は黄灰色と浅黄色。赤色粒混入。	造成 5	Ⅲ - 3
	192	瓦質土器	燈炉	—	底部	—	—	—	素地は灰黄色。貝類や白色粒、赤色粒混入。内面くびれ、わずかに厚付き。腰付き。	造成 7	Ⅲ - 3
	193	埴塼	碗型	—	口縁部	(2.0)	—	—	口縁部を平たく面取り。内面金付軸。	造成 8	Ⅲ - 3
	194	金属製品	覆輪	—	—	残存長 11.3	—	厚さ 0.13	表裏面鍍金を施し、断面 U 字状をなす。一端は平たく成形し、固定用の円孔を 2 つ施す。先端一部欠損。重さ 9.9 g。	造成 8	Ⅲ - 3
	195	金属製品	鍍金	—	—	縦 3.15	横 2.16	厚さ 0.1	表面鍍金。文様を施していた可能性があるが、判然としない。両端に固定用の円孔を施す。重さ 5.6 g。	造成 8	Ⅲ - 3
	196	金属製品	軟状製品	—	—	—	—	厚さ 0.08	表面のみ鍍金。縁の一部無加工。重さ 1.2 g。	造成 8	Ⅲ - 3
図版 64	197	金属製品	用途不明	—	—	—	—	厚さ 0.15	表裏面鍍金。表面には文様が施され、一部フック状の突起が付くが、錆により判然としない。重さ 7.7 g。	造成 8	Ⅲ - 3
	198	玉類	玉	I 類	完形	外径 0.33	高さ 0.23	孔径 0.11	ガラス製。色調：赤色。	造成 6	Ⅲ - 3
	199	玉類	玉	II 類	完形	外径 0.32	高さ 0.19	孔径 0.16	ガラス製。色調：赤色。	造成 6	Ⅲ - 3
	200	玉類	玉	III 類	完形	外径 0.35	高さ 0.32	孔径 0.12	ガラス製。色調：白色。	造成 6	Ⅲ - 3
	201	玉類	玉	IV 類	完形	—	—	—	ガラス製。火の影響か色調不明。	造成 6	Ⅲ - 3
	202	ガラス製品	胸石	鏡餅型	完形	直径 1.34	—	—	色調：青色。	造成 6	Ⅲ - 3
	203	不明瓦	軒先瓦	—	瓦当部	—	—	—	素地は褐色と灰色でサンドイッチ状を呈し、農耕粒が混入。半球体の中間を中心に蓮弁文が配される。	造成 6	Ⅲ - 3
	204	高麗系瓦	軒先瓦	—	瓦当部	—	—	—	素地は灰色。中頃は著しく突出。その周辺に横をもった花弁を複数配置か。	造成 8	Ⅲ - 3
	205	石製品	香炉	—	—	縦 15.3	横 20.6	厚さ 9.0	石材：石灰岩 火の影響を受けた痕跡有。	造成 5	Ⅲ - 3
	206	石造物	礎石	—	—	—	—	—	石材：砂岩(青石か) 柱痕有。	造成 5	Ⅲ - 3
図版 65	207	石器	磨製石斧	—	—	縦 11.7	横 6.1	厚さ 2.9	石材：緑色岩 加工痕：研磨 使用痕：微細刻線	造成 6	Ⅲ - 3
	208	石製品	砥石	—	—	縦 9.3	横 6.3	厚さ 6.4	石材：輝石 加工痕：全面研磨 使用痕：擦痕	造成 6	Ⅲ - 3

表 16 出土遺物観察一覧 i

図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm) ()は復元値			観察事項	順序	
						口径	器高	高台径		目	新
図版 65	209	石器	磨製石斧 (両方)	—	—	縦 10.0	横 5.9	厚さ 2.2	石材：輝緑岩 加工痕：研磨 使用痕：刃部摩減	造成 8	Ⅲ-3
	210	金属製品	切刃	—	—	縦 3.8	横 0.2	厚さ 0.05	輝緑に彫み加工。重さ1.4g。	IV 10c ブロックB	IV
	211	金属製品	金属亀	—	—	縦 0.27	横 0.26	—	全体に亀裂が入り、一部欠損するが球状をなす。 重さ 32.9g。	SM19 4期	IV
	212	金属製品	板状製品	—	—	—	—	厚さ 0.08	両面銅金。複数孔あり。彫痕か。重さ4.2g。	IV 10c ブロックB	IV
	213	金属製品	用途不明	—	—	縦 9.1	幅 0.5	厚さ 0.11～ 0.14	表面中央に稜がみられ、裏面は平型に成形。両方か。重さ 3.6g。小柄部分は幅0.5cm、厚さ0.07～0.1cmで重さ0.4 g。	IV	IV
	214	鉄製品	鉄網	—	口縁部	—	—	厚さ 0.5	ゆるく外反する。一部錆跡。重さ35.9g。	IV	IV
図版 66	215	鉄製品	小札	—	—	縦 4.0	横 2.7	—	錆跡れ著しい。札反は平行。円孔を10箇所。重さ16.3g。	IV 10c ブロックB	IV
	216	鉄製品	鉄	I類	—	残存長 6.3	—	—	平皿式。錆により、全体に亀裂が入る。重さ11.7g。	IV	IV
	217	鉄製品	鉄	I類	—	残存長 7.0	—	—	錆跡れ著しい。平皿式で、鎌身端部にソケット状に基部が 差し込まれる。重さ19.3g。	IV 10c ブロックB	IV
	218	銭貨	—	—	—	外径 2.44	孔径 0.71	厚さ 0.22	文字が潰れ、銭種判然としない。2枚同着。重さ3.8g。	IV	IV
	219	銭貨	聖徳天皇	—	—	外径 2.39	孔径 0.52	厚さ 0.17	初鑄年1310年(元)。重さ3.6g。	IV	IV
	220	銭貨	聖徳天皇	—	—	外径 2.42	孔径 0.61	厚さ 0.12	初鑄年1004年(北宋)。重さ3.2g。	IV	IV
	221	銭貨	—	—	—	外径 2.5	孔径 0.59	厚さ 0.38	文字が潰れ、銭種不明。3枚同着。1枚の厚さは0.12cm。 重さ7.4g。	IV	IV
	222	銭貨	無文銭	—	—	幅 3.05	—	高さ 1.45	15枚同着。重さ19.9g。	岩盤直上	岩盤 直上
	223	中国産青磁	器種不明	—	—	—	—	—	素地は灰白色で卑緻。淡い緑色の釉を掛けるが、一部露胎。 表面に波状突帯文。	不明	不明

第2項 層序別の遺物出土状況

本項では、平成25(2013)年度の遺物包含層より出土した遺物の出土状況から、層序ごとの様相について説明する。表17から19は、平成25(2013)年度出土遺物の出土状況を層序ごとに示したものである。なお、中城御殿跡では校舎建築や近世期の造成等が行われており、なかには、中城御殿跡内で一部遺物包含層を造成土として利用していることが確認されている。そのため、一部の遺物は本来の包含層と異なる層に混入している可能性もある。

1 I層(現代)出土遺物

I層は調査区の表土で、首里高校のグラウンド造成土等であり、ガラスや近代陶磁器等が多く出土している。その他製品としては、沖縄県立第一中学校に関連すると思われる硯や石盤、下層に属すると考えられる金属製品や銭貨が確認されている。

2 II層(近代)出土遺物

II層は戦前、戦後に堆積したと考えられる層で、I層同様にガラスや近代陶磁器等が多く出土している。しかし、ガラスの混入が少なくなるほか、青磁や白磁といった中国産陶磁器類の出土もみられ、時代幅はグスク時代から近代である。

こうした出土状況は、前述したように造成に伴う掘り返しや土砂の搬入によるものと考えられる。

なお、同層からは面取りした金属製の吸口(7)が出土しているが、セットになると思われる雁首(104)はIII-1層(18世紀～中城御殿移転後まで)より出土している。

3 III-1層(18世紀～中城御殿移転まで)出土遺物

III層中で最も遺物の種類がみられる層で、近世の遺物が多く含まれている。中国産陶磁器類においては、前代にはみられなかった褐釉染付や緑釉染付が出土している。青磁は15世紀後半から16世紀前半のVI類(17～20)を主体とするが、16世紀半ばから後半のVII類(15)も出土し始める。白磁は15世紀から16世紀半ばの皿D群(23)や皿E群(24)が僅かにみられるものの、徳化窯系が多く、青花も同様の傾向を示している。肥前IV期の本土産陶磁器(50・51)が出土していることから、下限は18世紀後半と考えられる。

なお、近代磁器が出土しているが、出土地点が構築時期の新しい遺構が集中するI区北側であることや、近代に一部近世期の造成土を掘り返して整地する状況等もあったことから、当該製品はII層(近代)からの混入と考えられる。

4 III-2層(17世紀末以降)出土遺物

本土産や沖縄産陶器の種類が増加することから、この頃には沖縄産陶器の生産が活発になっている様子が窺える。前代と様相が変化し、古手の製品がみられるようになる。青磁は僅かに15世紀前半から半ば頃の粗製品(130)がみられるが、主体はVI類である。一方で、白磁は再びD群が主体となり、青花についてもBからD群が多くなるなど、古い時期の製品が多く出土する状況となり、時間的にまとまりのみられた前代や後代と異なる状況を示した。また、金属製品の道具類や武器類についても当該層のみ出土が確認されなかった。

5 III-3(中城御殿創建～17世紀代)層出土遺物

前代に比べ、陶磁器類の種類は増加し、上層(旧造成5・6)と下層(旧造成7・8)で異なる様相を示したので、上層と下層に分けて報告する。

上層では、青磁はVI類、白磁はE群の景徳鎮窯系(165)など15世紀後半から16世紀前半の製品が主体となった。

青花は上下層での変化が乏しく、異なったのは上層にて皿B2群(16世紀半ばから16世紀後半)が出土するのみで、基本的には上下層とも景徳鎮窯系が多く、僅かに漳州窯系もみられる状況であった。分類別にみると15世紀前半から半ばの碗I-1類(167)がみられるものの、15世紀後半から16世紀後半の皿B1群(168)や碗皿C・D・E群が主体となる。

本土産陶磁器において、備前焼の鉢鉢(188)が出土していることから、上層の下限は17世紀初頭になると考えられる。

下層については、青磁はIV類(14世紀半ばから15世紀初頭)など古手の製品も混じるものの、15世紀前半から半ばのV類(161・162)が主となり、白磁についても皿D群(166)など同時期の福建・広東系が多く出土している。

なお、鉄製品の出土は前代から激減し、青銅などの金属製品では装飾品がみられ始める。瓦については、灰色系から赤色系へ移行するとされているが、これを裏付けるように当該期は灰色瓦のみの出土となっている。

6 IV層(グスク時代)出土遺物

IV層は最下層の包含層で、鉄製品や金属製品の出土が目立つ。特に種類がみられたのは、武器類で小札や鐙が出土している。陶磁器類では青磁や褐釉陶器を中心に出土がみられた。青磁はVI類が占めており、僅かにV類の粗製品がみられる。青花(明I-1類)や沖縄産施釉陶器もみられることから、後代の造成が当該層まで及んでいる状況が確認された。

表 17 平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 a

種類	器種	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ	不明
中国産青磁	碗	●	●	●	●	●
	小碗	●	●			
	皿	●	●	●	●	
	盤	●	●	●		●
	杯	●	●			
	高足杯		●	●		
	瓶	●	●	●		
	壺	●				
	酒会壺	●	●	●		
	鉢	●	●	●		
	描鉢	●	●			
	香炉	●		●		
	蓋	●	●	●		
	袋物	●	●	●		
	器台	●				
	器種不明		●	●		●
中国産青磁染付	碗	●	●			
	小碗	●	●			
中国産白磁	碗	●	●	●		
	小碗	●	●	●		
	皿	●	●	●		●
	小皿	●	●	●		
	小杯	●				
	馬上杯		●			
	瓶	●	●	●		
	壺	●	●			
	袋物		●			
	急須	●				
	合子	●				
	灯明皿	●	●	●		
	器種不明	●	●	●		
中国産青花	碗	●	●	●	●	●
	小碗	●	●	●		
	皿	●	●	●		●
	杯	●	●	●		
	小杯	●	●			
	瓶	●	●	●		
	壺	●				
	鉢	●	●			
	鉢	●				
	香炉	●				
	蓋	●	●			
	袋物		●			
	器種不明	●				
中国産色絵	碗	●	●			
	小碗	●				
中国産色絵	皿	●	●			
	小杯	●				
	器種不明	●				

種類	器種	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ	不明
中国産瑠璃釉	碗	●	●			
	小碗	●		●		
	小杯	●				
	瓶	●				
	壺		●			
	袋物		●			
	器種不明	●				
中国産三彩	盤			●		
	瓶			●		
	壺	●	●			
	香炉?		●			
	水注	●		●		
	器種不明	●				
中国産素三彩	器種不明	●				
中国産翡翠釉	皿	●	●			
	小皿		●	●		
	瓶		●			
	器種不明		●			
中国産緑釉染付	小碗	●				
	瓶	●				
天目	碗	●		●		
中国産褐釉染付	小碗	●				
	器種不明	●				
中国産褐釉磁器	器種不明	●				
中国産黒釉陶器	碗		●			
	蓋		●			
中国産褐釉	瓶	●				
	壺	●	●	●	●	●
	鉢	●	●	●		
	描鉢	●	●	●		
	甕	●				
	蓋	●				
	急須	●				
	器種不明			●		
中国産磁器	碗	●				
中国産陶器	皿	●				
	壺	●	●	●		
	水鉢		●			
	茶壺	●		●		
	急須	●				
	器種不明	●	●			
ベトナム産白磁	碗			●		
	皿	●				
ベトナム産青花	碗	●				●
	皿	●	●	●		

表 18 平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 b

種類	器種	III - 1	III - 2	III - 3	IV	不明
ベトナム産 陶器	皿	●	●			
	壺	●	●			
	蓋		●			
	袋物		●			
タイ産鉄絵	瓶			●		
	蓋		●			
	合子	●	●	●		
タイ産褐釉	瓶			●		
	壺	●	●	●	●	●
タイ産 半練土器	壺	●	●	●		
	蓋	●	●	●		
産地不明 陶磁器	蓋	●	●	●		
	鉢	●				
	器種不明	●				
本土産染付	碗	●	●	●		
	小碗	●				
	筒碗	●		●		
	皿	●				
	瓶	●	●			
	鉢	●				
	蓋	●				
	袋物	●				
	器種不明	●				
本土産色絵	碗	●				
	皿	●	●			
	小皿	●				
本土産磁器	碗	●	●	●		
	小碗	●				
	筒碗	●	●			
	皿	●				
	急須	●	●			
本土産陶器	器種不明	●	●			
	碗	●	●	●		
	小碗	●	●			
	皿	●	●			
	瓶	●				
	壺	●	●	●		
	鉢	●				
	搥鉢	●	●	●		
	甕	●	●			
	焙烙	●	●			
	袋物	●	●			
本土産 近代磁器	器種不明	●	●	●		
	碗	●				
	小碗	●				
	皿	●				
	器種不明	●				

種類	器種	III - 1	III - 2	III - 3	IV	不明
沖縄産施釉 陶器	碗	●		●		
	小碗	●	●			
	筒碗	●				
	皿	●				
	小皿	●				
	杯	●				
	瓶	●	●			
	壺	●	●	●		●
	小壺	●		●		
	鉢	●	●			
	鍋	●	●			
	香炉	●				
	火炉	●	●			
	火取	●	●			
	蓋	●	●			
	急須	●	●	●		
	酒器	●				
	袋物	●	●			●
	灯明具	●				
	燭台	●	●			
	器種不明	●		●	●	
初期沖縄産 無釉陶器	碗	●	●			
	皿	●	●			
	小皿	●				
	壺	●	●	●		
	瓶	●				
	鉢	●	●			
	搥鉢	●	●	●		
	水鉢	●	●			
	植木鉢	●	●			
	甕	●				
	火炉	●	●			
	火取	●		●		
	蓋	●	●			
	急須	●				
	袋物	●	●			
	灯明皿	●	●			
	器種不明	●	●	●		
沖縄産無釉 陶器	碗	●				
	皿	●				
	壺	●	●	●		
	瓶	●	●			
	鉢	●	●			
	搥鉢	●	●	●		●
	水鉢	●				
	植木鉢	●	●			

表 19 平成25年度遺物包含層出土状況一覧表 c

種類	器種	III-1	III-2	III-3	IV	不明
沖繩産無釉陶器	甕	●	●			
	鍋		●			
	香炉	●				
	火炉	●				
	火取	●				
	燈炉		●			
	蓋	●		●		
	急須	●	●			
	袋物	●	●			
	灯明皿	●	●			
	器種不明	●	●	●		
陶質土器	皿	●				
	壺	●				
	鉢	●	●			
	水鉢	●	●	●		
	鍋	●	●			
	火炉	●	●	●		
	蓋	●	●			
	急須	●				
	灯明皿	●	●			
	器種不明	●				
瓦質土器	皿	●				
	壺	●		●		
	鉢	●	●	●		
	溜鉢	●	●	●		●
	植木鉢	●	●	●		
	香炉?	●				
	火鉢		●			
	火炉		●			
	燈炉			●		●
	蓋・蓋?	●		●		●
	把手	●				
	台	●				
	器種不明	●	●	●		
硬質土器	器種不明	●				
宮古式土器	壺		●			
土器	壺	●	●	●		
	器種不明	●	●	●		
埴塼				●		
石器・石製品	石斧			●		
	砥石	●	●	●		
	すり石	●	●	●		
	石弾・石球	●	●	●		
	香炉			●		
	硯	●				
	かまどの底石	●				
	鍋の支脚?	●				
	不明製品	●		●	●	

種類	器種	III-1	III-2	III-3	IV	不明
石造物	礎石	●	●	●	●	
	不明	●		●	●	
石材		●	●	●	●	
円盤状製品		●	●	●		●
煙管		●	●			
金属製品	装飾品	●	●	●		●
	建具類	●				
	刀装具			●	●	
	武器類	●		●	●	
	その他	●			●	
	不明	●	●	●	●	●
鉄製品	矢じり				●	
	小札				●	
	刀子		●			
	鉄鍋				●	
	器種不明	●	●	●	●	●
鉄滓	焼形滓	●				
銭貨	中国銭	●	●	●	●	●
	日本銭	●	●			●
	その他	●	●	●	●	●
玉類	勾玉・玉	●	●	●		
ガラス製品	基石	●				
	胸石			●		
	器種不明	●	●			●
漆		●	●	●		
高麗系瓦	軒丸・瓦当部			●		
	平・灰			●		●
高麗系?	瓦当部			●		
明朝系瓦	軒丸・灰	●	●	●		●
	軒丸・赤	●	●			
	軒平・灰	●	●			
	軒平・赤	●				
	丸・灰	●	●	●		●
	丸・赤	●	●	●		
	平・灰	●	●	●	●	●
	平・赤	●	●	●		●
		●	●	●		●
瓦	セメント瓦	●				
埴	赤			●	●	
	灰			●		
埴噴	不明	●	●	●		
		●	●			
炭化種子		●				

第3節 自然遺物

第1項 中城御殿跡の動物利用

丸山 真史(東海大学)

1) 中城御殿跡から出土した動物遺存体の概要

沖縄では、先史の貝塚で頻繁に動物遺存体が出土し、生業や食に関する研究が進められてきた。近年は、グスク跡や首里城跡、近代の集落遺跡でも保存状態に恵まれた動物遺存体が出土しており、歴史時代の動物利用にも関心が高まっている。

本稿で検討する中城御殿跡も例外ではなく、大量の動物遺存体が出土した歴史時代の遺跡の一つである。出土した哺乳類は、『中城御殿跡(首里高校内)・権園跡』発掘調査報告書において報告されているが(沖縄県立埋蔵文化財センター 2021)、魚類は本稿において初めての記載となる。本稿では、魚類の記載にあわせて、動物利用に関する検討を行い、中世から近世にかけての中城御殿跡における動物利用に関する概要を記す。

中城御殿跡(首里高校内)における動物遺存体の概況は、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類の遺存体が出土しており、なかでも貝類が極めて多く、魚類や哺乳類がそれに続き、爬虫類や鳥類はごく僅かに留まる。このような種類別の出土量にみる顕著な多寡は、骨が薄く、脆弱である爬虫類や鳥類が、遺跡での保存状態に恵まれないことと関連している可能性がある。しかし、小さく薄い骨を含む魚骨も出土していることから、一定の消費傾向を表しているとも考えられる。いずれにしても、貝類の突出した出土量は、その消費量の多さを物語っており、爬虫類や鳥類に比べてかなり多く出土している魚類や哺乳類の利用も活発であったことは間違いない。以下では、脊椎動物である海産の魚類、陸産の哺乳類からみた動物利用について検討し、その特徴を示すことにする(註1)。

2) 中城御殿跡Ⅰ区出土の魚類遺存体

魚類遺存体の同定は、出土量が多いSX14、SX41、SX42を対象とした。今回の報告では椎骨は同定対象外としており、以下では遺構別に記載する。なお、ハタ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科の細分は、金子(1996)菅原(2008、2010、2013)、樋泉(2005、2016)、名島・樋泉(2008)を参考にしている。

SX14

当遺構は、15世紀から中城御殿創建期(1621~1640年)の遺物を含む地山面で検出した大型円形土坑である。魚類遺存体は374点が出土しており(表20)、種類や部位を同定したものは359点にのぼる。ハタ科が最も多く176

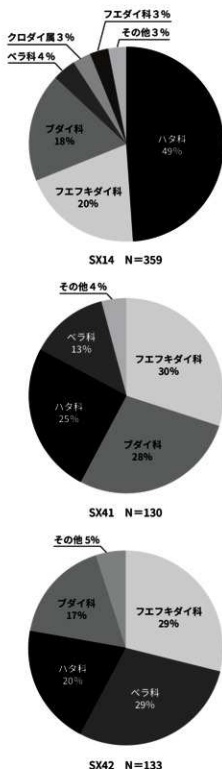


図 39 各遺構の魚類組成

点、フエフキダイ科71点、ブダイ科65点、ベラ科13点などが続く。最小個体数にしても、ハタ科が最も多く、他を圧倒する。

ハタ科のうち54点がマハタ型、19点がスジアラ型、4点がバラハタ型に分類した。フエフキダイ科は10点がアマミフエフキ型、8点がハマフエフキ型、4点がヨコシ

マクロダイ属に分類した。ブダイ科は、15点がアオブダイ属B、13点がアオブダイ属A、3点がイロブダイ属、

2点がアオブダイ属、1点がナガブダイに分類できた。ベラ科は1点がベラ科Bに分類できた。

表 20 SX14 魚類遺存体集計表

	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌顎骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		その他	NISF	MNI
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ハタ科	9	7	9	15	14	21	12	7	11	8	5	8	11	15	2	5	鰓蓋骨 L34R3	176	21
フエフキダイ科			5	3	6	7	5	5		1	2	2	3	6	2	2		49	7
ヨコシマクロダイ属		1		1		1					1							4	1
フエフキダイ属	12	6																18	12
ベラ科	4					3	1						2	1	1			12	4
ベラ科B																	下顎歯骨 1	1	1
ベラ科?															1			1	1
ブダイ科		1	2	1				2	6	1	3	1	4	3	3	4		31	6
イロブダイ属					2	1												3	2
アオブダイ属	6	8			10	4											上顎歯骨 R3	31	10
クロダイ属	2	1		1		1		1		1		1	1	1				10	2
フエダイ科		1	2	1	1	1	1	1					2					10	2
アジ科				1									1	1	1			4	1
キンギョアジ属	1																	1	1
イサキ科													1					1	1
ダツ科						1												1	1
モンガラカワハギ科											3						歯骨+角骨 L1, 歯 1	5	3
スズキ目															1			1	1
不明					1			1			3	2	1	5	1	1		15	5

表 21 SX41 魚類遺存体集計表

	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌顎骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		その他	NISF	MNI
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ハタ科		3	3	5	3	4	3	3	3	1			2	1	1			32	5
フエフキダイ科			2	3	3	4	1		3		4	1		7	1	2		31	7
フエフキダイ属	4	4																8	4
ベラ科	3	3			2	3					2	2	2					17	3
ブダイ科			3	1					2	1			2	2	2			13	3
イロブダイ属	1	1			1													3	1
アオブダイ属	5	5			6	3											上顎歯骨 R1, 下顎歯骨 1	21	6
クロダイ属													1	2				3	2
イシダイ科		1																1	1
ダツ科					1													1	1
不明											1	1	2					4	2

SX41

当遺構は15～16世紀に廃棄土坑として利用されたと考えられている。魚類遺存体は134点が出土しており(表21)、種類や部位を同定したものは130点にのぼる。フエフキダイ科が最も多く39点、ブダイ科37点、ハタ科32点、ベラ科17点などが続く。最小個体数にしても、フエフキダイ科やブダイ科の出土量が多いことが特徴的である。

フエフキダイ科は、4点がアマミフエフキ型、ほかの4点がハマフエフキ型に細分でき、アマミフエフキ型はみられない。ブダイ科は、12点がアオブダイ属A、5点がアオブダイ属B、3点がイロブダイ属、ほかの3点がアオブダイ属、1点がナガブダイ型、もう1点はヒブダイ型に細分できる。ハタ科は11点がマハタ型、1点がスジアラ型、もう1点はバラハタ型に細分できる。ベラ科は細分できるものはない。

SX42

当遺構は15～16世紀に利用された方形の石組土坑である。魚類遺存体は139点が出土しており、種類や部位を同定したものは133点にのぼる(表22)。フエフキダイ科が最も多く39点、ベラ科38点、ハタ科27点、ブダイ科22点などが続く。最小個体数にしても、フエフキ

ダイ科やベラ科の出土量が多いことが特徴的である。

フエフキダイ科は、6点がハマフエフキ型、1点がヨコシマクロダイ属に細分できる。ベラ科は、2点がシロクラベラ型、1点がベラ科Bに細分できる。このほかにベラ科Cやシロクラベラ型と思われるものが1点ずつあるが同定には至らない。ハタ科は、10点がマハタ型、3点がスジアラ型に細分できる。ブダイ科は、3点がアオブダイ属A、ほかの3点がアオブダイ属B、2点がイロブダイ属、ほかの2点がアオブダイ属に細分できる。このほかにアオブダイ属Bと思われるもの2点、アオブダイ属Aと思われるもの1点があるが、同定には至らない。

3) 中・近世の魚類利用

沖縄の遺跡では多様な魚種が出土するが、主としてサンゴ礁域で漁獲できるブダイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ハタ科といった特定魚種の漁獲と利用が通時的特徴とされており(菅原 2018)、当遺跡でも大体的には同様の状況と言える。中世のSX41とSX42(15～16世紀)、中世から近世にかけてのSX14(15～17世紀)では、一定量の魚骨が出土しており、当地における魚類利用を知ることができる注目すべき資料群である。

表 22 SX42 魚類遺存体集計表

	前上顎骨		左上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		その他	NISF	MNI
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ハタ科	1	1	1	1	2	3		2	4	2		2	3	3	1			26	4
フエフキダイ科				1	2	4	3		2	1		3	2	4	7	3		32	7
ヨシマタクロダイ属	1																	1	1
フエフキダイ属	1	5																6	5
ベラ科	5	7		2	5	5		2	1		2		2	3			下顎頭骨 4	38	7
ベラ科?															1			1	1
ブダイ科				1						1	2	1		1	1	2		9	2
イロブダイ属	1				1													2	1
アオブダイ属		3			3	3											上顎頭骨 左 2	11	3
タイ科	2																	2	2
クロダイ属	1	1																2	1
アジ科			1								1				1			3	1
スズキ目																1		1	1
不明	1	1									1		1	1				5	1

SX41ではフエフキダイ科、ブダイ科、ハタ科、ベラ科、クロダイ属、SX42ではフエフキダイ科、ベラ科、ハタ科、ブダイ科、タイ科の順番で出土量が多く、これらのほぼ同時期の遺構から出土した魚種構成はよく似ている。それに対して、近世を含むSX14では、ハタ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、クロダイ属、フエダイ科の順番で出土量が多く、ハタ科が圧倒的に多く出土していることが最大の特徴である。

ハタ科を破片数比でみると、SX14で49%、SX41で25%、SX42で20%を占めており、SX14とそれ以外とは大きく異なっている(図 39)。ハタ科の細分をみると、破片数比にして、SX42ではマハタ型が最多であることは共通しているが、SX14ではスジアラ型の比率が高いことが特徴的である。スジアラ型の嗜好が17世紀代から始まるという时期的な差異なのか、あるいはSX14が中城御殿の創建期の廃棄物であることから消費の場面の相違などの要因が考えられる。一方、ベラ科はSX42で29%、SX41で13%、SX14で4%を占めており、ハタ科とは対照的な出土量比を示している。ベラ科で細分できたものが少なく、詳細の議論はできないが、ハタ科と同様にベラ科の比率にみられる変化は時期差によるものか、消費の場面の相違であるかなど、共存する遺物や同時期の他の遺跡の状況を含めて、今後検討する必要がある。

首里城跡の御内原北地区では、17世紀の動物遺存体が出土しており、魚類ではフエフキダイ科が最も多く、ブダイ科、ベラ科といった魚種の出土が続き、トビウオ科、小型のアジ科、アイゴ属の幼魚なども出土している(沖縄県立埋蔵文化財センター 2013)。また、銭蔵東地区では、グスク時代(14世紀後半～17世紀後半)から近現代までの動物遺存体が出土しており、魚類ではハタ科、ブダイ科、フエフキダイ科、ベラ科、アイゴ属、ニサダイ科などサンゴ礁やその周辺に生息する沿岸性種が主体であるが、大型のアジ科、カマス科、ニシン科、ダツ科、サバ科といった外海域を主な生息域とする回遊魚も多く出土している(沖縄県立埋蔵文化財センター 2016)。

SX41、SX42、SX14では、大型のアジ科、ダツ科が出

土しているが、ごく少数に留まり、他の外海域で漁獲されるカマス科、ニシン科、サバ科はみられない。今回は同定対象外とした椎骨にこれらが含まれている可能性は十分にあるため、このような首里城跡の魚種構成との比較は今後の課題としたい。

4) 近世の獣肉食

哺乳類は、イノシシあるいはブタ、ウシ、ウマの3種のみであり、首里城跡や他のグスク跡で出土しているイヌ、ネコ、イルカ類、ジュゴンなどの出土は見られない。イノシシあるいはブタと同定したものには、mtDNA 分析や安定同位体分析により(第4章第2項参照)、家畜のブタと考えられるものが含まれており、次項で紹介するが、いづれにしても食用が目的といえる。それに対して、ウシやウマは生きている間は使役獣として貴重な労働力である。ウシは農耕や荷物の運搬、ウマはそれに騎乗することができる。しかし、死ねばその角や皮革は資源としての利用価値が生じ、肉もまた食用に供される。それを如実に示すように当資料のウシ、ウマともに、刃物による切傷がみられ、解体して食用にしたと考えられる。

魚類が多数出土したSX41、SX42、SX14で出土している哺乳類はイノシシ/ブタのみであり、ウシやウマは含まれていない。このことがゴミ投棄の何らかの特徴を示している可能性があるが、判断しない。そのほか40基以上の遺構でイノシシ/ブタが出土しており、その大部分はイノシシ/ブタのみが出土している。ウシ、ウマのいずれかが出土している遺構はグスク期のものが多く、いづれかが10点以上の出土をみる遺構はSK51、SK59のグスク期(15世紀～16世紀)の2基である。両遺構から出土したウシ10点、ウマ4点は骨端部が癒合していない若獣であり、これらにも解体痕がみられるものが含まれている。祭祀・儀礼での利用は考え得るが、若獣も食用として解体していることは、肉食文化という視点で注目される。

首里城跡の銭蔵東地区の獣類には、16世紀後半～17世紀後半にかけてウマ、ウシがなくなり、イノシシ/ブタとニワトリが出土が集中すること、一方で瀬門西地区

ではそのような状況にないことが指摘されている(樋泉2016)。当地点では、銭蔵東地区と同じくイノシシ/ブタに獣類利用が集中する。16世紀後半から17世紀後半は中城御殿の創建前後の画期にあたり、土地占有者における動物利用の違いが反映されている可能性があるが、それ以前のSX41やSX42というグスク期の遺構でもイノシシ/ブタに集中する遺構があることに注意が必要であろう。

5) ブタの飼育について

骨格部位の形態により、確実にブタであることを示せるものがないため、mtDNA分析を高橋達平氏に依頼した。詳細は、本書の高橋氏の分析結果報告を参照された(第4章第3節第2項参照)。分析対象としたのは、グスク期の遺構であるSK46、SK51、SK59、SK71、SK74、SM19、SM21、SX21、SX28、SX32、SX40、SX41、SX42から出土した計19点のリュウキュウイノシシあるいはブタの骨格部位である。分析の結果、アジアで飼育されたブタの2系統およびリュウキュウイノシシと考えられる個体群であることが示された。以下では、アジアの2系統を、それぞれASIA1とASIA2として呼び分ける。

ASIA1が11点、ASIA2が6点、リュウキュウイノシシが2点であり、アジアの2系統のブタが多いことが明らかになった。グスク期にブタが存在したことが示されたことは大きな成果である。さらに興味深いのは、SK51、SK59、SM21では、ASIA1系統とASIA2の2系統が出土しており、ASIA1系統とリュウキュウイノシシが検出されていることである。同一遺構から出土した動物遺存体をほぼ同時期の廃棄物として考えられることから、以下のような食料供給の具体像が描かれる。

SX12では、ASIA1系統とリュウキュウイノシシが両方出土しており、①ブタ飼育者とリュウキュウイノシシの狩猟者から別々に供給されていた、②ブタ飼育者はリュウキュウイノシシの狩猟も行ってた、ということが考えられる。いずれにしても、家畜と野生獣の両方を食材として用いたことが想定される。一方、SK51、SK59、SM21では、ASIA1とASIA2の2系統が出土しており、①供給元が複数あり、異なる系統のブタを飼育、供給していた、②1ヶ所で2系統を飼育、供給していた、ということが考えられる。

6) まとめ

中城御殿跡から出土したグスク期から近世にかけての動物遺存体のうち、魚類遺存体の基礎情報を提示し、魚類および哺乳類に関する考察を行った。魚類遺存体では、サング礁やその周辺に生息する沿岸性種が主であり、沖縄の遺跡に一般的にみられる典型的な魚骨構成である。ただし、グスク期から近世にかけて魚骨組成に相異がみ

られ、かつハタ科の細分ではスジアラ型の比率が高まるということが指摘できる。この要因について、嗜好や消費の場面などが考えられる。また、同時期に獣類ではウマ、ウシが減少し、消費がイノシシ/ブタに集中するようになることも、当地点での動物食に関する変化が示されていると考えられる。琉球王府との関係において、このような食生活が日常的なものであったのか、中城御殿の東にある大美味殿との関係も視野に入れた検討が必要である。また、ブタの供給に関する想定について、グスク期に一般化できることかは他の遺跡との比較が必要であるとともに、沖縄におけるブタ利用と肉食文化の源流を辿ることができる貴重な資料である。

註1. 本報告には、魚類遺存体の分類・整理を補助した後藤広樹(当時東海大学海洋学部海洋文明学科)による卒業研究の成果の一部が含まれている。

参考文献

- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2017『中城御殿跡(首里高校内)』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2021『中城御殿跡(首里高校内)・樋園跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌 1996『平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体(軟体動物を除く)』『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会
- 菅原広史 2008『津堅島キガ浜貝塚出土脊椎動物遺体の再分析』『南島考古』第27号 沖縄考古学会
- 菅原広史 2010『脊椎動物遺体』『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(1)』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 菅原広史 2013『脊椎動物遺体』『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(2)』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 菅原広史 2018『脊椎動物遺体からみた沖縄諸島における漁撈史』『季刊考古学』第144号 山田閣
- 樋泉岳二 2016『首里城跡銭蔵東地区から出土した脊椎動物遺体』『首里城跡一銭蔵東地区発掘調査報告書一』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 名島弥生・樋泉岳二 2008『南島考古学におけるフエキダイ科魚類の属レベルでの同定とその意義(第11回動物考古学研究集会開催報告)』『動物考古学』第25号 日本動物考古学会
- 服部仁 1976『沖縄・奄美の貝塚から出土したブダイ科魚類の咽頭骨』『魚類学雑誌』22巻4号 日本魚類学会

第2項 沖縄県中城御殿跡(首里高校内)から出土したイノシシ・ブタのDNA解析

DNA analysis of Sus specimens from Nakagusuku-udun site (on the premises of Shuri High School), Okinawa prefecture

高橋 遼平 Ryohei TAKAHASHI
元山梨大学大学院総合研究部医学域

<要旨>

沖縄県中城御殿跡(首里高校内)から出土したイノシシまたはブタの骨を用いてDNA解析を行なった。目的は資料の出土時期である15-16世紀頃のヒトのイノシシ・ブタ利用を調べる事である。解析した22資料のうち19点でミトコンドリアDNAの断片情報を得た。分子系統解析の結果、17点は琉球列島の野生イノシシであるリュウキュウイノシシと別系統に属すると考えられた。また2点はリュウキュウイノシシと同一系統と判断された。解析結果から、①当時既に琉球列島では外部諸地域からブタあるいはイノシシが持ち込まれていた様子や、②何らかの形でリュウキュウイノシシも利用されていた様子が窺えた。

1. はじめに

ヒトは広範囲を移動し様々な環境に適応した生物で、

適応戦略の1つとして食料の運搬を各地で行ってきた。イノシシとブタ(*Sus scrofa*)はヒトの食料として古くから世界中を運ばれ、海を渡る運搬も多かった。本稿で扱う沖縄県中城御殿跡(首里高校内)が立地する琉球列島でもイノシシ属¹⁾の運搬があり、文献では14世紀の家畜ブタ導入が最古の記録となる[1]。近年は出土したイノシシ属の歯や骨の形態解析や理化学分析により、先史時代(12世紀以前)のイノシシ属運搬の可能性も考えられている[2]。しかし運搬の起源地域や時期、導入経路などの詳細は未だ明快でない。また、琉球列島には野生イノシシであるリュウキュウイノシシ(*S. s. riukiuanus*)が生息するが、家畜ブタの導入後もその狩猟は継続していたのか、などの疑問も残る。これらの疑問の解決には、幅広い地域や時代を対象としたDNA解析事例の蓄積が不可欠となる。本稿では、中城御殿跡から出土したイノシシ属のDNA解析を行い、資料が利用された15-16世紀頃のイノシシ・ブタ利用の様相を探った。

2. 資料と方法

2-1. 資料

表23にDNA解析に用いた資料の情報と解析結果をまとめた。また資料の写真を図(42～47)にまとめた。

2-2. DNA抽出

先行研究[3]のDNA抽出法を応用した。具体的には①次亜塩素酸ナトリウム溶液とDNAフリーの滅菌水で試

表23 DNA解析を行った資料の一覧

番号	遺構	層位	部位	部分	左右	mtDNA D-loop 領域の特徴
86	SK46		下顎骨	下顎角	左	Nakagusuku (N)-1
89	SK51	3層	上腕骨	近位部-骨幹部	右	N-1
91	SK51	6層	上腕骨	近位部-骨幹部	左	N-1
92	SK51	3層	下顎骨	下顎体-下顎角	右	N-1
322	SK59	1～2層	下顎骨	下顎角	右	N-1
387	SK74		下顎骨	下顎角	左	N-1
476	SM21		下顎骨	下顎体-下顎角	左	N-1
500	SX12	1層	上腕骨	骨幹部	右	N-1
506	SX32		下顎骨	結合部-下顎角	右	N-1
508	SX40	2層	頭蓋骨	側頭骨	左	N-1
505	SX28		下顎骨	下顎角	左	N-1またはN-1' (DNA劣化と思われる塩基が1座位あり、断定不可)
106	SK51	3層	大腿骨	骨幹部-遠位部	右	N-2
418	SM19	1層	下顎骨	下顎角	右	N-2
489	SM21		下顎骨	下顎体-下顎枝	右	N-2
509	SX41		頭蓋骨	頬骨	左	N-2
329	SK59	1～2層	下顎骨	下顎体-下顎角	右	N-2またはN-2' (DNA劣化と思われる塩基が複数座位あり、断定不可)
386	SK71		下顎骨	下顎体	右	N-2またはN-2' (DNA劣化と思われる塩基が複数座位あり、断定不可)
501	SX12	1層	脛骨	近位部-遠位端	左	N-3 (DNA劣化の可能性あり、リュウキュウイノシシ AB015088 と1塩基違い)
512	SX42	2層	下顎骨	下顎角	右	D42184 (リュウキュウイノシシ)
85	SK25		大腿骨	骨幹部	左	fA を決定できなかったため解析から除外
117	SK51	上層	上腕骨	近位部-骨幹部	左	fA を決定できなかったため解析から除外
853	SX14-1		頭蓋骨	側頭骨	右	fA を決定できなかったため解析から除外

料を洗浄、②紫外線照射下での乾燥、③試料表面の除去、④骨粉作成(0.5–1.0g)、⑤脱灰、⑥FastID Genomic DNA Extraction Kit(Genetic ID)を用いたDNA抽出を行った。外来DNAのコンタミネーションを防ぐため、作業は古代DNA専用の施設で行った。骨粉を含まないチューブを用意し、これに対しては抽出作業を実施することで試薬や作業中のコンタミネーションがないことを確認した(ブランクコントロール)。

2-3. PCR 増幅(以下 PCR)

先行研究[4,5]のプライマーを用いて、ミトコンドリア(mt)DNA D-loop領域のPCRを行った。具体的には以下の作業を行なった。

- ① まずプライマーmitL112とmitH62を用いたPCR後に、mitL112とmitH61で増幅産物をセミネステッドPCRすることで、リュウキュウイノシシと他のイノシシ属の遺伝的識別に有用な214塩基対(214bp)の断片A(以下 fA)を増幅した [6]。
- ② 続いてfAのPCRに成功した試料のみ、情報の増強を目的に断片B(fB)と断片C(fC)をPCRした。fBはmitL119とmitH124のPCR後にmitL120-mitH124(248bp)で、fCはmitL104とmitH106のPCR後にmitL105-mitH106(166bp)でそれぞれ増幅産物をセミネステッドPCRした。
- ③ 上述①と②のPCRを同一資料に対して複数回繰り返して、PCRの結果や、同一資料から得られる塩基配列の再現性を確認した。

作業ではDNAを含まない検体も用意し、これに対してPCRを行うことで試薬や作業環境由来のコンタミネーションがないことを確認した(ネガティブコントロール)。

2-4. 塩基配列の決定

電気泳動により増幅産物を確認したPCR産物を Monarch PCR & DNA Cleanup Kit(NEB)で精製し、DNA シーケンス解析サービス(株式会社ファスマック)を利用して塩基配列を決定した。

2-5. 分子系統解析

データベースNCBIに登録される世界の現生イノシシ属や琉球列島の先史遺跡出土資料の塩基配列情報に加えてMEGA7[7]でアラインメントし、Network 5 (Fluxus Technology Ltd.)を用いてMedian joining(MJ)ネットワークを作成した。

3. 結果

3-1. PCR と塩基配列の決定

コンタミネーションを確認するためのネガティブコントロールやブランクコントロールは全て反応しなかった。全22資料のうち19点(表23)でfAの塩基配列の決定に成功した。この19点はfBとfCの塩基配列の決定にも成功

し、fAからfCを繋ぐことでそれぞれ592bpの情報を得た。これらのうち15点は、同一資料に対して複数回のPCRを行うことで塩基配列の再現性を確認した。一方、3点はPCRに2回成功したが、得られた2つの塩基配列間に各々1–4座位の違い(変異)が検出され、配列を確定できなかった(図40)。残りの1点はPCRに1回しか成功せず、再現性が確認できなかった。

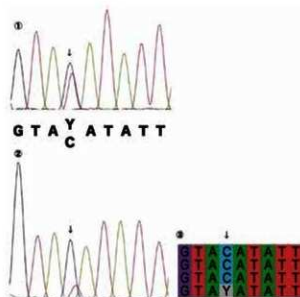


図40 同一個体で検出した変異の様子(矢印部)

再現性が得られた15資料の塩基配列から3つのDNAの型(配列タイプ)を検出した。1点(資料番号#512)はデータベースNCBIに登録される現生リュウキュウイノシシの塩基配列と同一であった(NCBIのアクセッション番号: D42184)。残りの14点からは2つの配列タイプを検出した。これらはアジアのイノシシ属で多く見られる塩基配列と同一であり、本稿では便宜的にNakagusuku(N)-1、N-2とする。N-1は#86, 89, 91, 92, 322, 387, 476, 500, 506, 508の10点から、N-2は#106, 418, 489, 509の4点から検出した。

前述の通り3資料(#329, 386, 505)では1–4座位の違いを持つ塩基配列をそれぞれ2本ずつ確認した。#505からはN-1、およびN-1と1塩基違いの配列(N-1'とする)を得た。#329と#386はN-2と同一か、これと近縁な配列(N-2'とする)を有していた。残りの1点(#501)からはNCBIに登録される現生リュウキュウイノシシ(AB015088)と1塩基違いの配列(N-3とする)を得たが、PCRに1度しか成功していないため、再現性は得られなかった。①1回目のPCRで得た配列。同一塩基座位でCとTの波長の混在(記号「Y」)が確認された。増幅産物中に、該塩基座位の塩基がCの断片とTの断片が混在する事を意味する。②2度目のPCRで得た配列。当該塩基はCと判断できる。③本来はPCRを繰り返し3本以上の塩基配列を得ること

で本来の塩基を判断するが、本稿で扱った4資料は3度目以降のPCRに成功しなかった。なお、③の場合は本来の塩基はCの可能性が高く、①で生じたG>Tの変異はDNA劣化(後述)に起因すると考えられる。

3-2. 分子系統解析

解析で得た塩基配列 N-1、N-2、D42184にNCBI から取得した参考配列を加えてMJネットワークを作成した(図41)。なお、再現性が得られなかったN-1'、N-2'、N-3も参考配列としてネットワーク図の作成に加えた。

作成したMJネットワークは、リュウキュウイノシシ、その他のアジアのイノシシ属、ヨーロッパのイノシシ属の配列タイプがそれぞれまとまった。この中で、#512から検出されたD42184、#501から得た参考配列 N-3はリュウキュウイノシシのまとまりに含まれた。一方、N-1とN-2、および参考配列 N-1'とN-2'はリュウキュウイノシシのまとまりから離れ、その他のアジアのイノシシ属の近くに遺伝的に位置した。

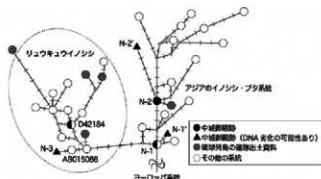


図41 本稿の資料とNCBI由来の配列を用いて作成したmtDNA D-loop領域(592bp)のMJネットワーク

配列タイプの分類は図中の凡例に準ずる。配列タイプを繋ぐ線に直交する短線は塩基変異を示す。白塗りの三角は仮定の配列タイプを示す。なお、N-2'は確定できなかった4つの変異(表24)の組み合わせにより複数の配列タイプが推定できるが、本解析ではそのうちの1つとして、N-2から4塩基異なるものを参考配列として供した。

4. まとめと考察

中城御殿跡の15-16世紀ごろの包含層から出土した22資料を解析した結果、参考配列も含めて19点で塩基配列を決定し、6つの配列タイプを検出した。このうち、主に再現性を確認できた3配列(15資料：D42184、N-1、N-2)について、分子系統解析の観点から考察を行なった。残りの3つの配列タイプ(4資料：N-3、N-1'、N-2')はDNA劣化の可能性を持ったため(後述)、捕獲的な考察に留めた。

4-1. リュウキュウイノシシと異なる系統の存在

塩基配列を得た19資料のうち17点はリュウキュウイノシシとは異なる遺伝的特徴を持ち、アジアのイノシシ属

系統と近縁だった(図41、N-1とN-2、N-1'とN-2')。再現性を得た資料にのみ(N-1とN-2)着目しても、14点がアジアのイノシシ属と遺伝的に近かった。この結果から、遺跡が利用された時期には既に琉球列島の外からイノシシ属が持ち込まれていたと考えられる。また、本稿の解析成功率は古代DNA解析としては非常に高い(19/22点、または15/22点²⁾)。資料の多くがアジアのイノシシ属の特徴を持っていた点から、外部導入の個体への依存度が高かった可能性も考えられる。ただし、正しい判断にはサンプリングバイアスの有無など、解析結果が遺跡全体の当時の状況を反映し得るか検討する必要がある。

遺跡が利用された時期に運搬があったと仮定した場合、当時の交易状況を考慮すると明(中国)からの導入が考えられるが、N-1やN-2と同一の配列はNCBIに登録されるアジアの様々な家畜ブタ品種やイノシシで幅広く確認できるため、遺伝的特徴から導入の起源地域を特定することはできなかった。くわえて、遺跡の利用時期より古い時代に導入があり、琉球列島内で飼育(系統の維持)が行われていた可能性も考慮した場合、交易状況からの起源地域の推定は慎重に行う必要がある。これらの個体の導入目的を食資源の利用や交易と捉えれば、運搬コストや作業効率の観点から野生イノシシではなく家畜ブタが利用されていたと想像したいが、mtDNA解析では野生個体と家畜個体は判別できない。詳細な歴史の特定や野生・家畜の識別には解析地域や時期、被解析DNA領域の充実に加え、出土遺物の地域間比較や形態解析、食性分析や生育地推定などを扱う理化学分析の知見も求められる。

本稿の資料群から得た配列タイプの多様度は低く、その多くはN-1かN-2に属した²⁾。この特徴が当時の遺跡全体の状況を反映するものであれば、特にメス個体に関しては²⁾ ①系統や品種の概念が存在し、それらを選別・運搬・利用していた可能性や、②特定の地域のみと交易していた可能性、③導入初期に持ち込まれた個体数が少なく、それらを元に島内で系統が維持されていた可能性なども考えられる。この一方、前述の通りN-1やN-2はアジアの様々なブタ品種やイノシシが幅広く共有していた。本稿ではmtDNAの断片情報のみを扱ったが、被解析領域を広げることで④N-1とN-2が細分化され、より多くの配列タイプが検出される可能性もあり、この場合は①-③は否定される。

4-2. リュウキュウイノシシの存在

19点のうち2点は現生リュウキュウイノシシの配列タイプと同一、もしくは同一系統に属した(図41)。このことから、遺跡ではリュウキュウイノシシも利用されていたと考えられる。検出頻度の低さからリュウキュウイノシシ

シシへの依存度が低かった可能性もあるが、前述の通り、正しい判断にはサンプリングバイアスの有無を検証する必要がある。

1 資料(#501)は前述の通り再現性を得られなかったが、現生リュウキュウイノシシ(AB015088)と1塩基違いの配列(N-3)を持っていた。もう1点(#512)は沖縄島の現生リュウキュウイノシシ個体からも検出されている配列タイプ(D42184)で、同島の野生イノシシが当時も利用されていた様子が窺える。

これらの獲得方法が野生個体の狩猟であり、沖縄島のリュウキュウイノシシの生息域が現在と変わらなければ、イノシシを得るために島の北部(国頭村や大宜見村、東村など)まで足を運んでいた事になる。これに関して資料#512は下顎骨であったが(表23)、著者の野外調査の経験ではイノシシの頭部は食用価値が低く⁴⁾、猟犬に与える、牙や下顎骨を集める⁵⁾、解体場所が遠い場合は屠殺(捕殺)地点で放棄する⁶⁾などが観察された。遺跡と現生集団の生息域は直線距離でも50km以上離れている。本稿では考察できないが、頭部を廃棄せずに長距離を運んだ目的や運搬方法は、当時のイノシシ利用を考えるうえで非常に興味深い。なお、遺跡周辺でリュウキュウイノシシを飼育していた場合は遺跡と生息域の間の距離の問題を無視できるが、前述の通りDNA解析では野生個体と飼育個体の識別は不可能であり、これについては形態情報や他の理化学分析の見地から考察する必要がある。

なお、#501が持つ変異は後述するDNA劣化に起因する可能性も高く、この場合#501はAB015088と同一となる。AB015088は現生リュウキュウイノシシでは奄美大島や西表島の個体で確認され、沖縄島ではこれまでに見つからない。現生集団の解析事例が少ないため沖縄島で見つからない可能性もあるが、島の野生集団の遺伝的な変異幅が現生集団より大きかった可能性、すなわち現在より個体数が多かった可能性や、異なる分布域を持っていた可能性も考えられる。さらに、沖縄島以外

の島のリュウキュウイノシシが選ばれていた状況も、可能性の1つとして検証すべきである。

4-3. DNA 劣化

本稿では多くの資料で塩基配列の決定に成功した(表23)。高温多湿でDNA保存に適さない地域である琉球列島でも、15-16世紀頃の資料はDNAが残存している事が明らかになった。包含層の土壌の性質なども併せて記録していくことで、別の遺跡の出土資料が解析できる状態が判断できる貴重な基礎データとなる。

比較的良好な状態でDNAが残存していたものの、本稿の資料にもDNA劣化の兆候が見受けられた(図40)。塩基配列の決定時に再現性が得られなかった4資料で検出された変異と、近縁な配列タイプが持つ塩基の情報を比較すると、その全てがグアニン(G)からアデニン(A)、もしくはシトシン(C)からチミン(T)への変異で説明できる(表24)。古代DNAに生じる代表的な劣化に脱アミノ化が挙げられる。これは塩基からアミノ基が失われる反応で、Gと対をなすCが脱アミノ化するとウラシル(U)に変化する。Cが脱アミノ化して修復されないままDNAの複製が進むと以下のようになる。

「C - G」→「U : G」(脱アミノ化)→「U - A」(複製)→「T - A」(複製)

このように元々Cであった塩基はTに、Gであった塩基はAに変異する。この事象と照らし合わせると、4資料で検出した変異は埋没中のDNA劣化に起因する可能性がある。これらが全てDNA劣化であった場合は、N-1'はN-1、N-2'はN-2、N-3はAB015088と同一と判断できるが、検証には追加のPCRや次世代シーケンサーを用いた解析が必要となる。

結果をまとめると、中城御殿跡(首里高校内)では15-16世紀頃には既に琉球列島の外からイノシシ属が持ち込まれ、これらが積極的に利用されていた様子が窺えた。同時に、数は少ないがリュウキュウイノシシの存在も確認され、何らかの形で利用されていたと考えられる。高

表 24 再現性を得られなかった4資料と、これらと近縁な配列タイプの間の変異

資料番号	塩基座位*	変異箇所の塩基	近縁な配列タイプの同座位の塩基
329	78	CまたはT	C(N-2)
	80	CまたはT	C(N-2)
	99	CまたはT	C(N-2)
	118	CまたはT	C(N-2)
386	141	GまたはA	G(N-2)
	328	CまたはT	C(N-2)
	361	CまたはT	C(N-2)
	513	GまたはA	G(N-2)
501	273	T	C(AB015088)
505	291	CまたはT	C(N-1)

* 本稿で扱ったDNA領域の初めを第1番座位とした。

温多湿な琉球列島でも15–16世紀頃であれば出土資料に残るDNAは解析に耐え得る状態であった。ただしDNAに劣化が生じていることも否めない。劣化は埋没中だけでなく、出土後の保管状況によっても進む。遮熱や遮光、酸素への曝露の防止や水洗いの回避などの保管が提唱されるが、資料の重要度や用途に応じて、遺跡調査の大目的を損なわない範囲で現場ごとに適切な保管を目指すことが重要となる。

本稿ではDNA解析を通じて浮上した新たな疑問や可能性をできる限り多く述べた。これらは当時のヒトの島への適応やイノシシ属の進化を考えるうえで重要なものである。これらを正しく判断するために、今後はDNA解析の手法の改善に加えて、考古学や民族学、複数の理化学分析の知見を融合する必要がある。

参考文献

- [1] 伊波盛誠(1979)琉球動物史。ひるぎ書房。
- [2] 高橋ほか(2016)現生リュウキュウイノシシのDNA解析：遺跡出土資料の解析結果を解釈するための基礎データとして。動物考古学, 33: 63-77。
- [3] Adachi et al.(2009)Mitochondrial DNA analysis of Jomon skeletons from the Funadomari site, Hokkaido, and its implication for the origins of Native American. American journal of physical anthropology, 138: 255-265。
- [4] Watanabe et al.(2001)Ancient mitochondrial DNA reveals the origin of *Sus scrofa* from Rebun Island, Japan. Journal of molecular evolution, 52: 281-289。
- [5] Ishiguro et al.(2002)A genetic method to distinguish crossbred *Inobuta* from Japanese wild boars. Zoological science, 19: 1313-1319。
- [6] Takahashi et al.(2012)Morphological and molecular phylogenetic characteristics of dwarf *Sus* specimens from the Noguni shell middens in the Ryukyu Islands. Anthropological science, 120 (1): 39-50。
- [7] Kumar et al.(2016)MEGA7: Molecular Evolutionary Genetic Analysis version 7.0 for bigger datasets. Molecular Biology and Evolution, 33: 1870-1874。

注

- *1 本稿では野生イノシシと家畜ブタを区別しない場合、便宜的に「イノシシ属」と省略する。
- *2 参考配列を除いた場合。参考配列はDNA劣化の可能性があり、実在するか断定できないため主な考察から除いた。
- *3 mtDNAは母性遺伝の形式を採るため。
- *4 長野県で脳を食べるためにイノシシやクマの頭部を持ち帰るという声を猟師の方から聞くこともあったが、リュウキュウイノシシを対象にした狩猟調査では著者は耳にした事がない。
- *5 『ウムイー奄美大島・宇検村むかしいまー』(鹿児島県宇検村新興育英財団, 1993)では、保管していたイノシシの下顎骨が100頭分集まると「100頭目のハレ」という祝いを行う事が紹介されている。
- *6 本州の狩猟調査に比べて琉球列島ではその頻度は低かった。狩猟域と解体場所が近い場合が多いことにくわえ、リュウキュウイノシシが本州のイノシシより小さいことも関係しているように思う。



DNA 資料



切り出し後の資料(非分析)

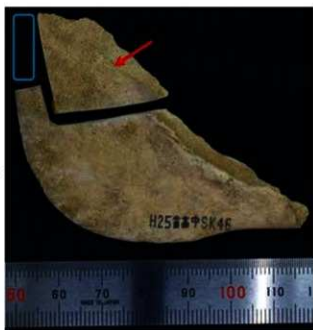


図 42 DNA サンプルング資料1



図 43 DNA サンプルング資料 2

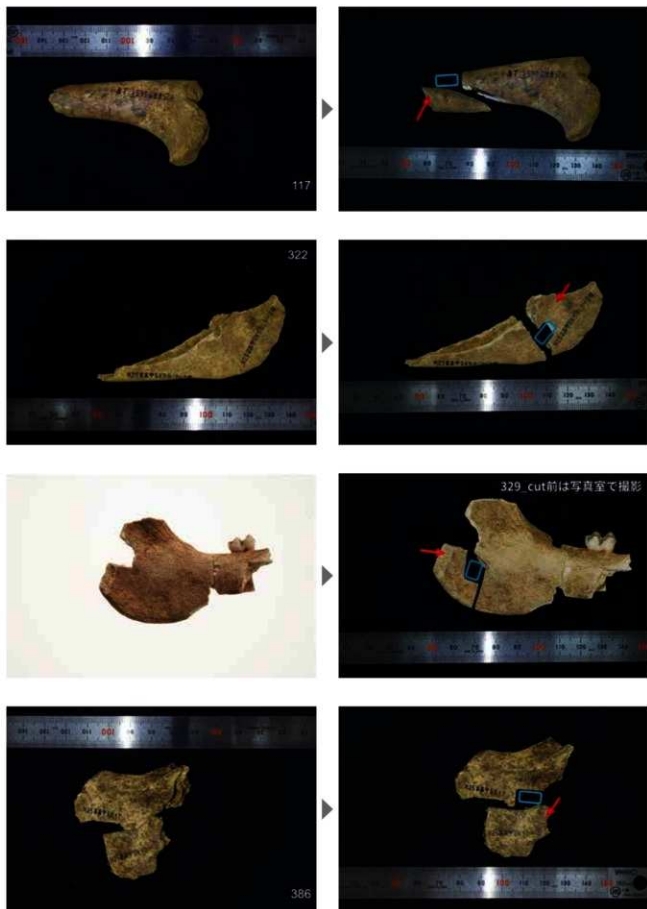


図 44 DNA サンプルング資料 3

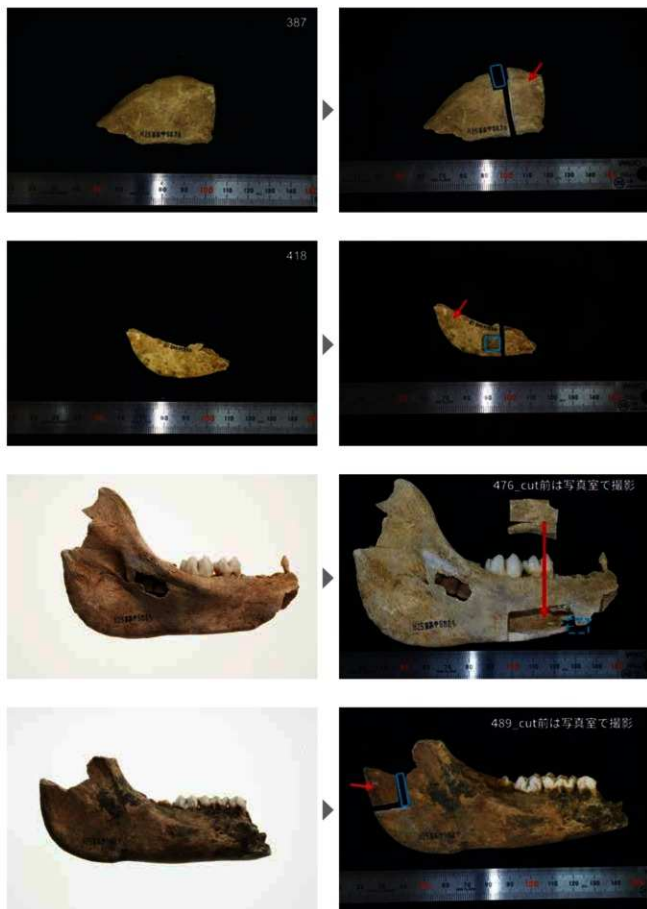


図 45 DNA サンプルング資料 4

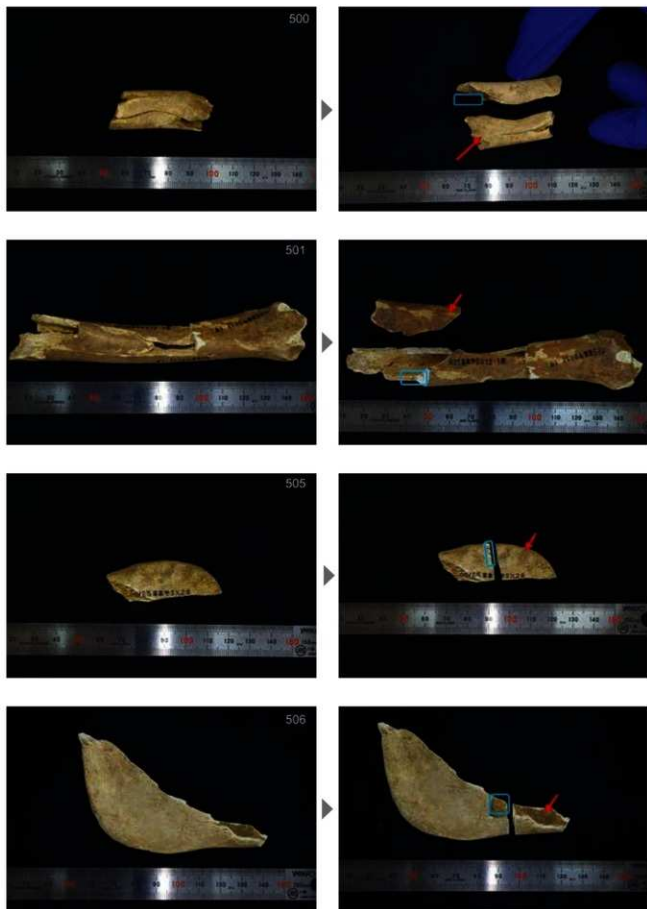


図 46 DNA サンプルング資料 5

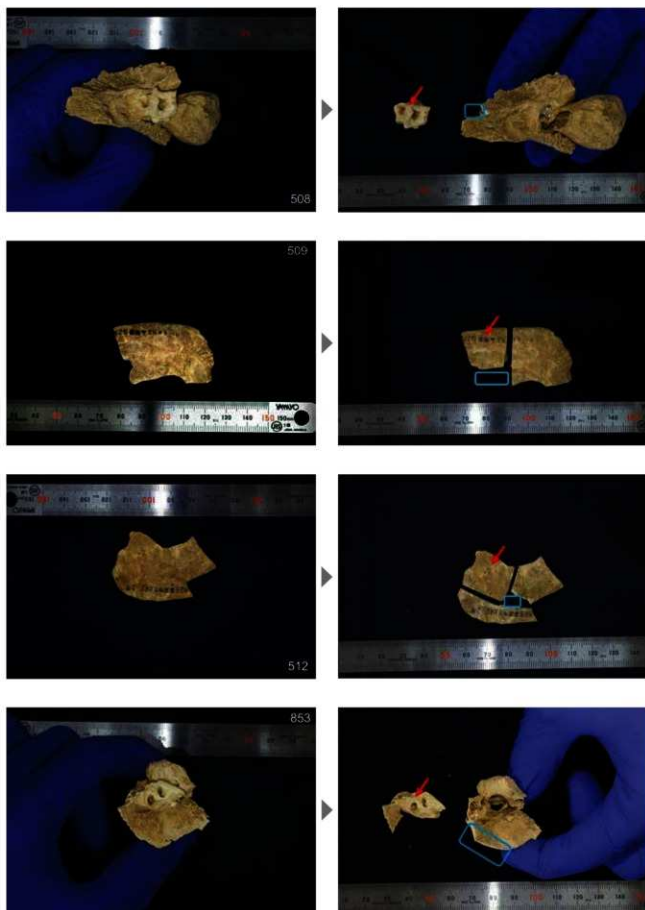


図 47 DNA サンプルング資料 6

第5章 総括

中城御殿跡の発掘調査は、平成25(2013)年度から令和4(2022)年度にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターが7次にわたって実施し、これまで3冊の報告書が刊行されている。そのため、本総括報告書では各年度の調査区をまたがる一連の遺構のみをまとめて概観し、遺物については平成25年度の調査をまとめた1冊目の報告書(沖縄県立埋蔵文化財センター 2017)で掲載できなかった遺物包含層出土の資料を中心に説明してきた。本章では総括として、これまで報告されてきた遺構や遺物を含め、本遺跡の様相や特徴を時期ごとにまとめることとする。

第1節 グスク時代

概要 グスク時代の遺構は柱穴跡や土坑、石組土坑、炉跡が確認された。出土遺物から、15世紀から16世紀頃と考えられる。

柱穴跡 後世の造成により削平され、正確な範囲は不明だが、主にⅠ区北東側及び調査区を横断するように帯状に分布していた。検出数は非常に多く、各遺構が密接した状況で確認された。そのため、明確な建物区画等のプランは確認できなかったが、建物の建て替えを頻繁に行っていたことが判明した。

土坑 柱穴集中部及びⅠ区北東側に検出された。平面形は円形や方形で、玉を多く含むもの(SK56)や生ゴミ等の廃棄物の上に臭い消しの行為と思われる土をかぶせる行為も確認された(SK22)。

石組土坑 Ⅰ区北東側に分布し、岩盤を利用したもの(SM19・21・24)や排水機能を伴うもの(SX42)が確認された。堆積状況から、主に廃棄土坑として利用され、食料残渣等が充填すると使用を終えたと考えられる。なお、北西側は後世の削平により分布を確認することができなかった。

炉跡 Ⅶ区中央北側に2基確認された。平面形は楕円形で、中心部に炭が多くみられる。放射性炭素年代測定の結果、14世紀代の測定値が得られており、大美御殿創建以前の生活痕跡となっている。

出土遺物 武具類を主とした金属製品が数多く出土している。僅かに青磁や褐釉陶器といった中国産陶磁器も確認されたが、青磁はⅦ類(15世紀後半から16世紀前半)が主体となっており、15世紀前半から中葉頃の青花もみられる。このような遺物組成は、16世紀中葉から後半に廃棄されたとされるⅠ区SK51の最下層でも確認されており、首里城跡の各地区から出土する陶磁器との共通性が指摘されている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2017)。また、当該期の遺物は近世期の遺物と遺構内で共存する

状況もみられることから、長期にわたって使用された可能性がある。

小結 中城御殿の創建は、文献史料から尚豊王代(在位 1621から1640年)とされ、それ以前の当該地の状況は不明であった。しかし、調査によりグスク時代の遺構や遺物が確認されたことから、14世紀段階ではすでに何らかの生活域として利用されていたことが判明した。

後世の削平により、いずれの遺構も明確な分布範囲を示すことはできなかったが、土坑と石組土坑の分布範囲は異なることが判明した。前者は主に柱穴集中部にみられ、後者は岩盤範囲でのみ確認された。両者の違いについては、岩盤の有効利用を目的とした構築場所の選定や廃棄場所と居住域の区別化などが考えられる。一方で、両者ともに廃棄物が充填したら使用を終えることや覆土を使用した臭い消しの行為など、共通点も多くみられた。しかし、両者の具体的な関係性や時期差については判然としなかった。

当該期の遺構分布図を首里古地図に重ねると、大美御殿側まで、遺構の広がりや確認された。大美御殿は1548(尚清22)年に創建されるが、これらの遺構が関連するものかは不明であり、屋敷同士の境界等も見出せなかった。しかし、遺物の組成などは首里城跡の各地区の出土状況と類似しており、当該地には王府関連施設が所在していた可能性がある。

遺構の現地保存に伴って調査が最低限の範囲で行われたことにより、グスク時代の遺構は確認範囲が限定されている。本報告書で掲載している遺跡(SF7001)も当該期の土坑を一部掘削して構築されるが、SF7001の現地保存に伴い、土坑の範囲確認は行っていない。これらのことから、中城御殿跡では現地保存となった近世期の遺構下部にグスク時代の遺構や遺物包含層が未だ広く残存しているものと考えられる。

第2節 近世(Ⅲ～3層：中城御殿創建～17世紀代)

概要 柱穴跡や土坑、石組土坑、石積、石牆、石組柱跡、炉跡、井戸が確認された。遺構内や遺物包含層出土の遺物から、16世紀から17世紀代頃の遺構と考えられる。

石積①(SA 3・SA13・SA4002・SA7001) Ⅰ区・Ⅳ区・Ⅶ区で確認された石積で、中城御殿跡中央から東側へ延びる。東端でカーブすることから、北側に向かって延長すると考えられるが、延長部には校舎基礎があったため、調査することはできなかった。本石積はⅣ層(グスク時代)や地山を掘り込んで構築され、Ⅲ～2層(17世紀末以降)に埋められることから、当該期の石積の中



図48 グスク時代の遺構平面図

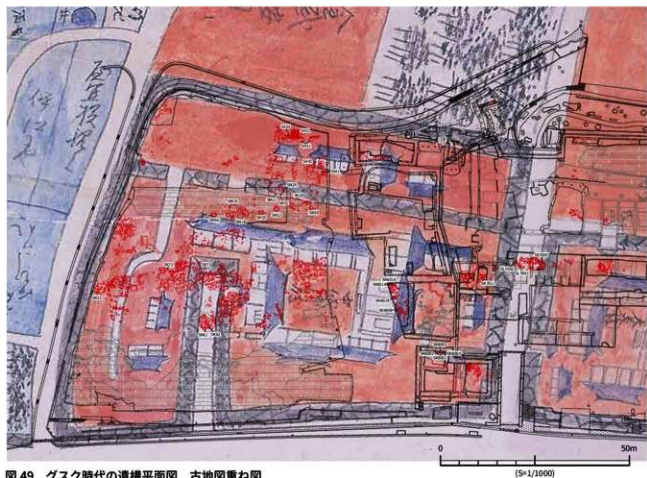


図49 グスク時代の遺構平面図 古地図重ね



図 50 III - 3 層の遺構平面図

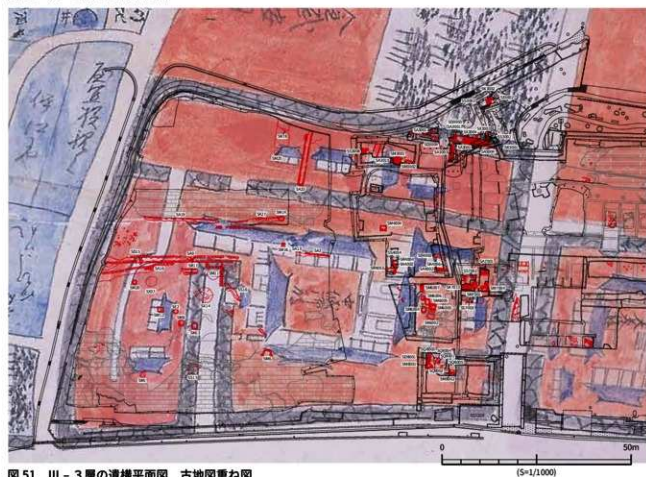


図 51 III - 3 層の遺構平面図 古地図重ね図

でも古い時期に当たる可能性が高い。なお、西側についてはIII～2層で構築される石積に埋められ、確認することができなかった。

石積②(SA19・SA23) SA19はI区中央西側、SA23はI区北東側で確認された。前者は構築するにあたって岩盤整形を行っており、後者はグスク時代の石積を一部埋める形で形成されている。構築方法等から前述した石積①と同様の可能性はある。また、SA23は両側に面を有しており、屋敷内の区画を目的とした石積と考えられる。

石積③(SA9・SA16) I区中央西側で確認され、切り合いの関係から、SA16が先に構築されたと考えられるが具体的な時期差は確認に至らなかった。SA9は両側に面を形成しており、屋敷区画を目的とした石積と考えられるが、周辺は後世の削平により建物に関する遺構等は確認できていない。

石牆(SA3001・SA5004) III区及びV区で確認された。

SA3001では構築時に岩盤整形が行われ、III～3層上に根石を設置、門も設けられていたことから、中城御殿北側の石牆と判断した。また、暗渠として機能していたと考えられる溝跡(SD3002～3004)も確認されている。SA5004では石敷や石積の拡張が確認された。堆積状況から敷地内の造成に合わせ、石積の拡張を行ったと考えられる。その際に、門や石積下部は埋められた可能性が高いが、遺構の現地保存に伴い、これ以上の調査は行っておらず、埋められた具体的な時期については不明である。また、門内を埋める際の最下部にはシャコガイが確認された。民俗事例から魔除けとして配置された可能性もあるが、取り上げず、遺構とともに現地保存している。

増築後の状況については、沖繩戦時の爆撃により破壊されているため、確認することが困難であった。しかし、これにより当該遺構が拡張しながら中城御殿移転後も機能し、沖繩戦で破壊されるまで現位置に所在していたことが判明した。

石組土坑 I・III区南西側及びVI・VIII区、VIII区北西側に集中して分布していた。素掘りのもの(SM12)や床面に石敷を施すものもみられるが、グスク時代同様に岩盤をうまく利用したもの(SM6・7001)が多く確認された。堆積状況から、排水用(SM3002)や貯水用(SM8・13)としての利用が考えられるものや、廃棄土坑で掻き出しを行いながら繰り返し使用するものがあり、用途にバリエーションがみられた。また、前者は床面の石敷の有無により用途に違いがみられたが、後者は同じ用途でありながら、床面が素掘りのもの(SM6006)や岩盤を利用するもの(SM6004・6005)、石敷を施すもの(SM3001)など複数の造りが確認された。

時期差については、III区の石組土坑がIII～1層(18世

紀～中城御殿移転まで)やIII～2層(17世紀末以降)に削平されることから、比較的新しい時期に構築された可能性がある。

水場遺構(SM8001・SD8001) VIII区北西側で確認された。石組土坑かと思われたが、円形で深さがあること、礫を含んだ溝跡(SD8001)が隣接することから、井戸の可能性を有する遺構(SM8001)とした。切り合い関係や造成状況から、溝が先に構築されたと考えられるが、当初は別の目的で構築されていた可能性もあり、構築当初からセット関係であったかは不明である。

出土遺物 グスク時代に比べ、陶磁器類の出土が増加し、上層(旧造成5・6)と下層(旧造成7・8)で遺物の組成が異なる状況が判明した。

上層では青磁VI類や白磁E群など15世紀後半から16世紀前半の製品が主体となり、青花は15世紀前半から半ばの製品が確認された。また、備前焼の描鉢が確認されたことから、上層の下限は17世紀初頭と考えられる。一方、下層では青磁はV・VI類、白磁はD群など15世紀前半から16世紀前半のものが主体となっている。

下層の遺物組成は、首里城跡二階地区と類似しており、グスク時代同様に首里城との関連が窺える。1660年に首里城が火災によって焼失していることから、これによって発生した瓦礫を当該地に搬入したことも考えられたが、被熱痕のある遺物はみられなかった。

小結 調査によって、北側の石牆や屋敷区画を目的とした石積、井戸とみられる水場の構築跡が確認され、本格的な整備が開始されていく中城御殿創建当初の様相が判明した。前述した調査成果は、出土遺物等から17世紀代と幅を持たせたが、文献史料にみえる創建の記録とおおよそ合致する結果となった。

当該期の遺構分布図を首里古地図に重ねると、SA3001は北側石牆とほぼ同位置にあたることから、SA3001に伴う門跡は石牆に付随するものと考えられる。この門跡は17世紀末以降には一部埋められたと考えられるが、魔除けと考えられるシャコガイの存在や、沖繩戦時の爆撃により拡張部が破壊されることから、門としての機能は長期にわたって継続されていた可能性がある。

屋敷内の石積については、切り合い関係のある石積も確認されることから、頻繁に造成を繰り返していたようである。

石組土坑は、機能や用途が増え、廃棄物を掻き出す行為が確認された。廃棄物の処理や利用において、グスク時代とは異なる生活文化があったことが窺える。分布範囲については、①中城御殿南西側で屋敷内へ入り込むように描かれる石積の西側、②北東側で長軸が南北を向く建物付近、③中央に最も大きく描かれる建物の東側の3

か所でみられた。いずれも建物に隣接する場所であるが、実際に石組土坑周辺では建物の痕跡は確認されていない。

古地図が描かれた時期は、これまでの研究から18世紀代と推察されており、16世紀から17世紀末以降の当該地に同様の建物があったかは不明である。しかし、県内での発掘調査事例から、近世頃の王族や士族の屋敷では石組土坑が建物の裏側や屋外に配置されるようになることが指摘されており(上原 2021)、これを踏まえると、古地図の建物と当該期の石組土坑の分布は同様の傾向を示している。古地図の精度や製作年代とのズレ、建物跡が未確認などの問題はあっても、近世期の建物と石組土坑の関係性がみえてくる重要な成果である。

第3節 近世(III - 2層: 17世紀末以降)

概要 遺構は石組土坑や石積、階段状遺構、石敷遺構、井戸が確認された。遺構の構築状況や出土遺物から、17世紀末以降と考えられる。

東西に延びる石積(SA 2・SA4001・SA5005) 中城御殿内を南北に区切る石積である。III - 3層上に根石が設置されることや石積の前後にIII - 3層が広がることから、本石積の構築に先立ち、敷地内を造成したことが判明した。また、石積背面には複数の造成土が堆積していることや、遺跡の立地から、本石積は建物を設置するための平場造成を目的に構築されており、当該期中城御殿は階段状の屋敷配置であったと考えられる。

石積の面石部分には琉球石灰岩とサンゴ石灰岩の2種類の石材が利用されていた。中城御殿跡では、本石積のほか、石組土坑(SM3002)1基でサンゴ石灰岩の利用が確認されているが、本石材は1点のみであり、足りなくなった石材を補填したものと考えられる。本島内においては、現在のところ、御物グスクにおいてサンゴ石灰岩の利用が確認されているが(山本 2024)、詳細な調査が行われておらず、時期等は不明である。

当該期の琉球について、『球陽』では1660年及び1709年に首里城の火災、1665年及び1760年、1768年には地震が起きたとの記録がある。前者は、羽地朝秀が摂政期に布達した文書を集めた『羽地仕置』にも記録があり、火災に伴う首里城再建工事が財政逼迫により、時間が掛かっていることやその間、王府機関が大美御殿へ移ったことが記録されている。後者は首里城やその周辺施設で石垣が崩れたことや倒壊があったことが記されている。

これらの記録から、国内で多くの資材が必要になったことが想定される。そのなかでも、中樞を担う首里城には優先して、石積などに使用される琉球石灰岩を含む多くの資材が供給されたと考えられる。そのため、中城御殿の修繕にあたっては代替品として、サンゴ石灰岩を利

用せざるを得なかった可能性がある。こうしたサンゴ石灰岩への素材転換は、17世紀後半から18世紀頃の民間の石崩しにもみられ(大塚 2016)、当該期の琉球石灰岩は首里城を中心とする王府関連施設に限定して利用された可能性がある。

階段状遺構(SA24・SA25・SD19・SD20・SS21・SS23・SS25 ~ 28) I区で確認され、前述した東西に延びる石積の前に構築された遺構である。本遺構はIII - 3層(16~17世紀頃)での石積(SA 3・13)構築後、それに直交するように構築された石積(SA14)の裏込部に造成を行いながら構築される。それぞれ堆積層は異なるものの、造成を行いながら、ほぼ同時期に構築されたと考えられる。

石積(SA24・25)は門を形成するもので、建物の出入口になると考えられる。門内には石敷が施され、北側へ下る階段も確認された。なお、本遺構の西側にも石敷がみられることから、何らかの施設があった可能性もあるが、後世の削平により確認することはできなかった。

石組土坑・石敷遺構(SM4002・SS4001) IV区中央東側で1基確認された。石組土坑(SM4002)は内側に漆喰が使われ、石敷遺構(SS4001)が隣接する。切り合い関係から、SS4001が先に設置されるが、堆積状況や位置関係から、同時利用されていたと考えられる。また、本遺構は当該期に行われる大規模な造成によって埋められた後、上面には別の遺構が構築されたと考えられる。

水場遺構(SS24) I区南東角で確認された井戸や石敷である。落ち込みのある岩盤地形を巧みに利用し、一部整形しながら石敷や石積を構築している。石敷は壁沿いを中心に残存し、井戸周辺や遺構中央に向かって使用される際は小さくなり、面も凹凸が目立つ。地表面から一段下がったところに施されるが、南東側にも傾斜するように石敷が確認できることから、そこが出入口であったと考えられる。

南側には現在も湧水している井戸が確認されたが、石積はかなり崩れており、全形を把握することは困難であった。

本遺構は北側に向かい緩やかに傾斜し、北壁の床面には石灰岩層下部へ続く穴がみられる。井戸や石敷の存在から、排水機能を有した水場遺構と考えられ、構築時は石敷のみられない地表面部分にも石敷が施されていた可能性がある。

出土遺物 青磁は前代同様にVI類(15世紀後半から16世紀前半)が主体となるが、白磁や青花では15世紀代の製品が多く出土するようになる。その他、金属製品の建具類や武具類はみられなくなるなど、前代と異なる様相を示した。また、沖縄産陶器については種類が増加することから、積極的な生産が行われていたと考えられる。



図 52 Ⅲ-2層の遺構平面図

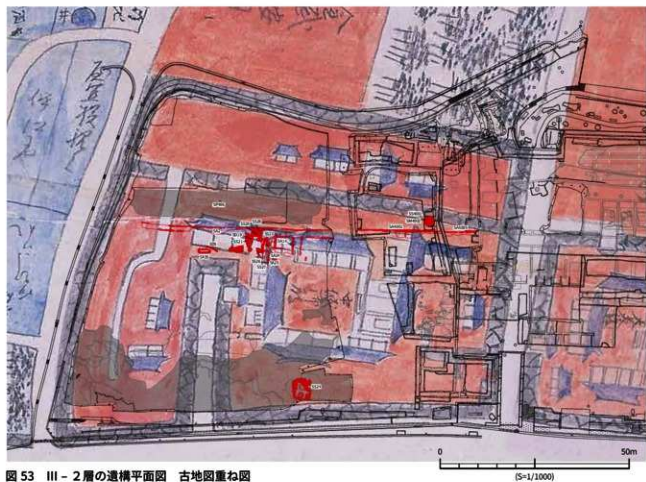


図 53 Ⅲ-2層の遺構平面図 古地図重ね図

当該期に多く出土する古い時期の遺物は、当初、造成による混入と考えられたが、主体となりうるほどの割合を占めていた。遺構の項でも述べたが、当該期は火災や地震による建物の倒壊が各所で発生し、その後、王府関連施設の再建工事があったとされている。これに伴い、首里城等では陶磁器を含む多くの製品も破損し、その廃棄場所に苦慮したことが想定される。これらのことから当該期に増加する古い時期の遺物は、首里城等で保管していたアンティークの可能性があり、廃棄も兼ねて造成用に中城御殿へ持ち込まれたことを示すものと考えられる。また、釘などの建具類が出土しなくなる状況についても、前述した再建工事に関連していると思われ、リサイクル用に戻された可能性がある。

なお、Ⅲ-2層上面で確認された一括廃棄のSJ3の遺物については、17世紀後半から18世紀後半の製品が確認されている。

小結 当該期には、首里古地図に描かれる中城御殿内で最も大規模な石積(以下、東西石積)が構築された。調査により、本石積構築時には、それ以前に構築されていた造成仮止め用の石積(SA14)を伴う、階段状遺構の一部削平することが確認された。また、Ⅲ-3層の広がりから当該地全体を削平し、元々あった石積(SA 3・13)を構築するなど、短時間で大規模な造成が行われたことが判明した。

なお、東西石積構築後も階段状遺構が機能していたのかは判然とせず、その西側からも遺構は確認されていない。また、当該地の傾斜する地形から、東西石積は平場造成を目的に構築されたと考えられ、当時の敷地内は階段状で、南側に建物が建てていた可能性が高いが、建物跡は確認できなかった。

東西石積の面石には、琉球石灰岩とサンゴ石灰岩が使われていることが確認された。2種類の石材を用いた石積は種類が少なく、特に本島内では現在のところ、御物グスクのみである。2種類の石材が使用される要因については、石材の調達や加工、意匠表現など様々なことが考えられるが、文献史料から当該期、数回にわたり首里城の火災や地震により被災した様子が記録されており、首里城を中心とする王府関連施設の再建工事に伴う石材不足が可能性の1つとして考えられた。また、中城御殿跡では被熱を受けた礎石が複数点出土している。中には尚真王代(1477から1526年)に首里城等で多用される中国産の青石を用いた礎石片も確認された。しかし、青石製の石製品や石造物は移転後の中城御殿跡でも出土していない。また、出土遺物の組成をみると、当該期には15世紀代の遺物が多くなり、建具類等の金属製品の出土がみられなくなるなど、前代と様相が異なっていた。このこ

とから、首里城等の地震や火災により発生した瓦礫の一部は、廃棄を兼ねて造成用に中城御殿へ運び込まれた可能性が考えられる。

この東西石積は、中城御殿内の造成の様子や屋敷配置を示すだけでなく、文献史料と合わせることで、当該期の首里城火災や地震による琉球王国内の様相も垣間見ることができると重要な遺構である。また、東西石積の面石を構築するサンゴ石灰岩には約2.5cm幅のノミ痕が認められた(図版66-224)。不明な点が多い当時の石工具を知る上で重要な成果である。また、琉球石灰岩には同様のノミ痕は確認されなかったことから、石材により加工具を変えていることも判明した。

貯水や廃棄物処理等を担うと考えられている石組土坑は、当該期では1基のみ確認されており、床面には石敷が伴っていたと考えられる。前代に比べると数が少ないが、Ⅲ-3層時に構築されたSM3001がⅢ-1層堆積時に完全に埋められることから、前代に構築された多数の石組土坑は、当該期も機能していた可能性がある。

水場遺構は前代同様、井戸の周辺に石積や石敷を施すなど、水場を構成する設備が規格化していたことが考えられる。また、石灰岩地形を巧みに利用しており、グスク時代同様、自然地形を巧みに利用した設備配置が継続していることが分かった。

第4節 近世(Ⅲ-1層：18世紀～中城御殿移転まで)

概要 遺構は柱穴跡や土坑、石組土坑、石積、石列、道跡、水場遺構、洞穴遺構が確認された。遺構内や遺物包含層出土の遺物から、18世紀から中城御殿移転までと考えられる。

柱穴跡 I区を中心に確認された。概ねI区北東側、南側中央にまとまっており、前代で構築される東西石積等を避けるように分布範囲が広がる。明確な建物区画は確認できなかった。

石積①(SA 1・SA22・SA29) I区北側で確認された東西に延びる石積である。SA 1の天端には積み増しが確認でき、現存より高さがあった可能性がある。また、東側と西側で根石の構築層や面石の積み方が異なることから、積み直しを行っていたことが判明した。

この周辺の造成土の広がりから、SA 1は平場造成を目的に構築された石積と考えられ、裏込めにはその支えとなる石積(SA29)を有し、その背面には、土圧の分散を目的とした石積(SA22)が確認された。

なお、SA 1の西端は切石が配置されていたが、東端については造成土の堆積はあるものの、延長部は確認できなかった。



図54 III - 1層の遺構平面図



図55 III - 1層の遺構平面図 古地図重ね図

石積②(SA 4・SA 7・SA4003) I区及びIV区で確認された。I区で確認されたSA 4及びSA 7は、切り合い関係がみられ、前者は水場遺構の北側で東西軸に延び、後者は前述した石積①(SA 1)側から緩やかに傾斜し、北側で前者を切っている状況が確認できた。また、SA 7の裏込内には別の石積(SA26)が確認できることから、SA 4は当初、南側ヘカーブしながら延びており、それを取り込む形でSA 7が構築されたと考えられる。

IV区で確認されたSA4003は東西へ延びるように構築されていたが、その他石積と異なり、使用される石が小さいことから、小径として機能していたと考えられる。

石積②周辺には特徴的な遺構配置がみられた。SA 4・SA 7は石積①(SA 1)と合わせると、水場遺構を取り囲むように配置され、SA4003の北側には石組土坑が集中していた。このような状況から、石積②は屋敷内の区画を目的に形成されたと考えられる。また、いずれも上部が削平されるが、SA 4及びSA4003の構造が類似することや、SA 7が石積①(SA 1)から緩やかに傾斜し、SA 4上面に擦りつくことから、残存部の上面あたりには路面があり、スロープのような機能を有していた可能性がある。

石積③(SA5001・SA5003) V区で確認された道跡を挟む石積で、いずれも道跡との間には溝が走っている。

SA5001は道跡の東側で確認された石積で、SA5003は道跡の西側で確認された石積である。この東側には中城御殿跡、西側には榎園跡があり、両石積はこれらの境界をなす。石積は後世の削平により、高さ等は判然としませんが、当時は道跡や溝跡よりも高く積まれていたと考えられる。

石組土坑 北側を中心に分布し、特にIII区に集中して確認されたが、後世の削平や遺構同士の切り合いにより、構造形態は判然としにくい状況であった。SM3003は床面に細石灰岩礫が敷かれ、遺構内に動物骨やカンギク等の食糧残渣を多量に含んだ層が堆積していることから、廃棄土坑と考えられる。堆積状況から、その後、周囲にSM3007・3008が構築され、SM3003と同様の機能を有していたと考えられるが、具体的な時期差は不明である。なお、I区で確認されたSM16やSM 3はSM3007・3008と同時期に構築されたと考えられるが、床面に石敷がみられないことや漆喰が貼り付けられることから、排水を目的に構築されたと考えられる。

これらのうち、比較的新しいと考えられるのは、I区中央西側で確認された平面が長方形の石組土坑(SM10)である。SM10は床面に石敷が敷かれ、南側には排水溝の一部と考えられる石が僅かに残存している。遺構外から遺構内へ向かい傾斜していることから、排水施設の一部と考えられるが、後世の削平により判然とし

ない。

水場遺構(SA 6・SA 8・SD 2・SS 5・SS 6・SE 3)

I区北側で確認された。井戸を中心に、北側には石敷が施された作業場(SS 6)、東側には石積(SA 6)が構築され、これらに沿うように排水溝(SD 2)が巡る。SD 2は西側の水溜部へ繋がっており、作業後の水は水溜部へ流れるようになっている。

井戸東側の石敷(SS 5)は隣接するSS 6と石材の大きさや面の成形が異なることから、構築時期が異なると考えられるが、現地保存のため、これ以上の調査は行っておらず具体的な時期差については不明である。

洞穴遺構 I区南側で確認された。クチャ(泥岩層)を掘り込んで構築された人工的な洞穴で、壁面には石積を施す。洞内は西側に緩やかに傾斜しており、洞奥に行くにしたがい深くなる。調査時にも水が溜まっていたことから、当時も貯水施設として使用していたと考えられる。

真和志村跡(道遺構)(SF5001・SD5001・SD5002・SF7001・SD7001・SD7005・石敷遺構) V区及びVIII区、北側の試掘箇所を確認された。V区で確認されたSF5001は構築に先立ち、地山やIV層を掘削して傾斜面を形成していた。北東方向を基軸に南北に延び、歩道面は細石灰岩礫で舗装する。歩道中央部を僅かに高くし、道跡の両端に溝(SD5001・5002)を構築することで、歩道面に水が溜まらない構造となっていた。

南側のVIII区で確認された道跡(SF7001)は、グスク時代の土坑上部に構築されていた。歩道面にはSF5001同様に細石灰岩礫を舗装するが、道に伴う溝跡(SD7001)の構築方法が北側の道跡に伴う溝跡とは異なっていた。また、基軸も僅かに異なっており、構築時期や地形によるものと考えられたが、周辺の掘削が強く判然としなかった。

正門新設工事の立会調査で確認された石敷遺構は、構築方法や軸の向きから、道跡の延長部と考えられる。本遺構は調査区の最も北側で確認され、南側に向けて傾斜がきつくなることから、歩道面に石敷を施すことで滑りにくく、歩きやすくなるよう工夫を施していたと考えられる。

道を横断する溝跡(SD5006・SD5007) V区の道跡を横断する形で確認された溝跡である。掘削により残存状況は良くないが、溝底面の高さや検出状況等から、道跡の両端にある側溝へ繋がっていたと考えられる。また、歩道面に溝がそのままの状態でも機能していたことは考えにくいため、当時は蓋がされ、暗渠として機能していた可能性が高い。

出土遺物 III層中で最も多く遺物が出土する。青磁はVII類(16世紀半ばから後半)も出土するようになり、白磁や青花は17世紀半ば以降にみられる徳化窯系が占めるようになる。肥前IV期の本土産陶磁器もみられることから、

下限は18世紀後半と考えられる。

なお、近代磁器が含まれるが少量の出土であることから、Ⅱ層からの混入と考えられる。

小結 調査によって、中城御殿跡では北側の水場遺構や石組土坑が確認され、屋敷内北側の造成の様子が判明した。また、古地図にも描かれる樋園と大御殿間の道跡も確認された。

中城御殿跡は南側から北側にかけて傾斜する地形のため、北側は最も標高が低く、前代の造成土であるⅢ-2層(17世紀末以降)が地形に沿うように傾斜して堆積することが確認された。そのため、当該期には傾斜地にⅢ-1層を投入することで平場を形成し、石積や水場遺構、石組土坑を構築していた。

水場遺構は西側に水を溜めるための機能を有しており、排水は畑の散水等に再利用していたと考えられる。作業場と考えられる井戸北側の床面は平坦に整形され、石敷の縁石は大きさを統一するなど意匠性が高く、機能性以外も重視している様子が窺えた。また、本道溝を取り囲むように複数の石積が確認された(SA 1・4・7)。

SA 1は水場遺構の南側に位置し、構築方法から、階段状の敷地を形成するための石積であり、SA 4及びSA 7は水場遺構を中心とする空間を区画するための石積と考えられる。こうした区画石積はⅣ区でも確認されている(SA4003)。

SA4003はその構造から、小径のような機能を有していたと考えられるが、北側には石組土坑が集中して分布していた。これらの石組土坑は含まれる遺物からいずれも廃棄土坑であり、切り合いもみられることから、当該期の廃棄土坑は構築域が定められていたと考えられる。一方で、排水を目的とするものは散在しており、必要に応じて構築されたことが窺える。これらことから、SA4003は廃棄土坑域を区画するための石積であり、当該期には居住空間と廃棄物の処理場を区分する意識が生まれ始めていたと考えられる。なお、上記した機能による石組土坑の形態差はみられなかった。

廃棄土坑域を首里古地図に重ねると、北側石牆の西側にあたる。実際に確認された石牆の左側には、Ⅲ-3層(16～17世紀代)時に石積(SA3003)が構築されており、これが廃棄土坑域の東側を区画する石積として機能した可能性がある。

また、東西石積を境として、水場遺構や廃棄土坑が構築される北側は、中城御殿内における「裏」の空間であったと考えられる。首里古地図では、同空間に軸や向きの異なる建物が4棟描かれており、西側の建物2棟(東西軸)は水場遺構を取り囲む南側石積(SA 1)、南北軸の建物1棟は水場遺構を取り囲む東側石積(SA 7・26)、東側の建物1棟は廃棄土坑域を区画する南側石積(SA4003)と

軸が揃う。また、水場遺構の西側には石組柱群(SQ群)、SA 7・26の南東側には柱穴跡が確認されており、首里古地図に描かれる建物に関連する施設が存在した可能性がある。

貯水に関連する施設として、人工洞穴が確認されている。中城御殿跡では、Ⅲ-3層(16～17世紀代)から井戸に石積や石敷などを伴う大規模な施設が構築され始めており、生活に必須である水の確保を重視していたと考えられる。また、こうした施設は当初、できるだけ自然地形を利用して構築されるが、当該期にはクチャを掘り込み、石積を用いて洞穴の壁面を形成しており、近世期における土木技術の進展と工夫が窺える。

V区を中心に確認された道跡からは、中城御殿跡の東側石積が同時期に構築されるだけでなく、隣接する樋園跡の西側石積も構築されるなど、隣接する施設を巻き込んだ大規模な造成が行われていたことが判明している。

また、道跡の構築状況や歩道面の舗装、側溝の構築から、排水を意識する様子が窺えた。なかでも、道跡を横断するように確認された溝跡(SD5006・5007)は、首里古地図に重ねると樋園と大御殿間に描かれ、大御殿の入口へと続く脇道近くにあたる。

大御殿跡は王家の産所や冠婚葬祭の場であり、首里城火災の際は仮の王殿として機能した重要な施設である。そのため、この施設へ繋がる道が冠水することのないよう、特に排水機能を強化したことが想定される。これらのことから、SD5006・5007は暗渠としての機能が考えられるほか、樋園跡及び大御殿跡の境界を示す重要な遺構である。

道跡の北端と考えられる石敷遺構は、立地から傾斜面を歩きやすくすることを目的に構築されたと考えられ、出土遺物から近現代まで長期にわたって機能していたと考えられる。

第5節 近現代

概要 遺構は柱穴跡や土坑、石組土坑、溝跡、集石、石列、石積、石積柱跡、井戸が確認された。Ⅰ層やⅡ層上に構築されることや出土遺物から、近現代の遺構と考えられる。

石積 Ⅲ区及びⅧ区でのみ確認されたが、首里高校校舎建築に伴う造成等により、全形は確認できなかった。

Ⅲ区では、Ⅲ-3層(中城御殿創建～17世紀代)で構築されるSA3001の北面を利用し形成されるもの(SA3002)や、水場と考えられる遺構(SX3005)と同時利用していたと考えられるもの(SA3006)が確認された。

Ⅷ区では、首里高校を囲む石積(SA8001・8002)の一部が確認された。当該地は、中城御殿跡内で最も標高が



図 56 近現代層の遺構平面図

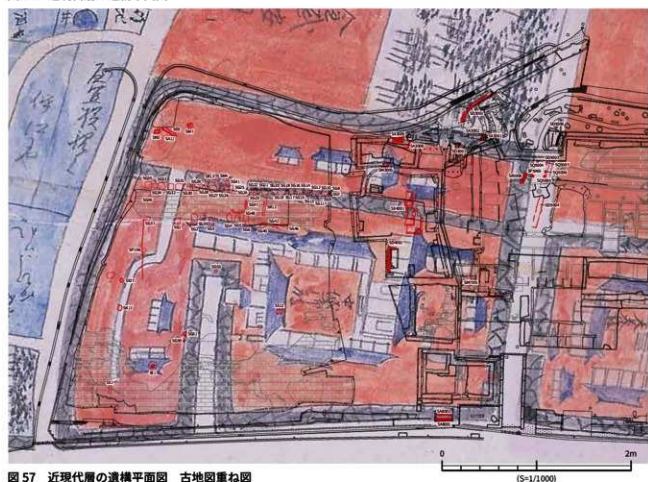


図 57 近現代層の遺構平面図 古地図重ね図

高くなる場所であり、綾門大道にも面していることから、近世期にも同様の石積が構築されていた可能性がある。近代においては、積み直しを行いながら利用したと考えられるが、既設の埋設管により、根石部分まで確認することはできなかった。

集石群 I区北側で確認された。戦後の首里高校校舎の基礎図面(養秀同窓会1980)から、柱基礎と判明した遺構である(SG群)。石灰岩礫を充填して根固めとし、上面に石敷を施し、その上部に校舎の柱を構築したと考えられる。

溝跡 I～V区で確認された。首里高校に関連するものと考えられ、溝内には漆喰を施すものが多量にみられた(SD3001・SD4001)。また、III～I層(18世紀～中城御殿移転まで)に構築された道跡の上部に形成されるもの(SD5004)も確認された。

井戸(SE1) I区南西側で確認された。クチャを掘り込んで構築している。削平により上部構造は不明であるが、井戸内部から金属製品が出土していることから、機能時には、つるべや滑車のようなものが付随していたと考えられる。

石組土坑 I区北西側及びIII区で確認された。削平による影響を受けるものの、いずれも平面形は方形状になると考えられる。石敷や漆喰が施されることから、SM2は貯水用と考えられる。SM3005については明朝系瓦や沖縄産無釉陶器、本土産近代磁器が多量に堆積しているが、機能時の用途については不明である。

出土遺物 ガラスや近代陶磁器が多く含まれる。また、沖縄県立第一中学校に関連すると思われる碗や石盤、首里高校に関連すると思われる校章等、学校として利用されてきた当該地の様相が分かる遺物組成となっている。

小結 当該期の遺構は、戦前の沖縄県立第一中学校や戦後の首里高校に関連するものが多く確認された。溝跡や石組土坑から、水場関連の施設には基本的に漆喰を施すようになる。また、近世期に構築された石積にぶつける形で形成された石積(SA3002)もみられ、利用できる石積は積み直し等を行いながら、長期にわたり継続的に使用していたと考えられる。図58は戦前の航空写真に北側で確認された石敷遺構を重ねたものである。本遺構は戦前の沖縄県立第一中学校の出入口に重なっており、現在では首里高校の正門の位置にあたる。これらのことから、北側道路との境界は18世紀頃から現代に至るまで、変わっていないことが判明した。

第6節 まとめと遺跡の評価

これまでの発掘調査で得られた成果と現存する文献史

料等から、中城御殿跡造営に先立ち行われた造成工事の一端や各遺構の構築過程が確認されたほか、当該地を利用した人々の生活様式の変化や当時の首里城跡を中心とした一帯の様相をも窺い知ることができた。

また、1700年代に描かれたとされる首里古地図と符合する形に広く遺構が確認され、中城御殿跡や隣接する真和志村跡(道遺構)が良好な状態で地中に残されていることが判明し、そこから出土した多くの遺物からは、当時の中城御殿跡での暮らしや首里城跡との関わりを想像することができる。

以上の成果から、中城御殿跡(首里高校内)の歴史的意義・評価として、次の6点についてまとめるに至った。

遺跡の評価

①当該地の変遷を物語る痕跡が良好な状態で広範囲にわたって保存されていること

発掘調査により、中城御殿造営当時の石牆や石積、石組土坑、水場遺構等の遺構が良好な状態で確認されたほか、中城御殿創建前に構築された遺構や遺物包含層も確認されている。これらの遺構の多くは、関係機関の協力によって現地保存されたものであり、未調査区を含め、当該地には文献史料にはみられないグスク時代の遺構や遺物が良好な状態で、未だ広く埋蔵されていると考えられる。また調査では、戦前の沖縄県立第一中学校や戦後の首里高校に関連する近現代の遺構も確認されており、当該地の土地利用の変遷を辿ることができる点でも、考古学的な価値が高い遺跡である。

また、出土遺物として古くは14世紀頃から近代に至る各地で生産された陶磁器類や、15から16世紀のヨーロッパ産ガラス製器物等の人工遺物が得られている。これらの遺物は、東アジアを中心に世界規模で展開された交易の状況を示すとともに、当該地で連綿と続く首里城下の暮らしの変遷を知る上でも貴重である。

②近世段階の王族の暮らしを研究する上で不可欠な遺跡

発掘調査により、中城御殿跡一帯の傾斜地を階段状に造成した痕跡が確認されている。この状況から工事が計画的に実施され、地形に合わせた屋敷配置を行っていたこと等、当時の土木技術水準を知る上で貴重な成果が得られている。また、地下構造物と考えられる石組土坑が数基確認されており、その分布状況や近年の研究から、建物配置との関係性が窺え、当該期における王族の屋敷内での建物配置を検証する上で貴重な成果である。

これらの成果をまとめると、当該地では中城御殿創建から移転までに実施された造成は大きく3期に区分できる。また、各地で生産された陶磁器類や礎石等、数多くの人工遺物や食料とした多くの貝類や動物骨等の自然遺

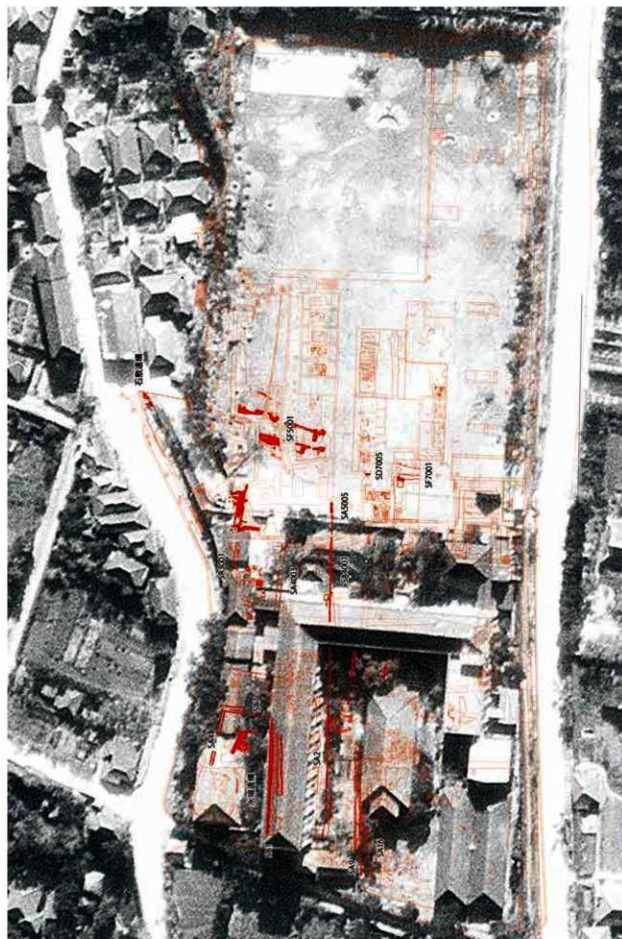


図 58 調査区全体平面図・航空写真重ね図(1945 年米軍撮影) (沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵)

物も確認されており、当時の王族の暮らしや食生活を再現する上でも注目される。

③世子殿移転の経過を示す状況が確認されていること

本調査では、石積や井戸、石組土坑などが広く確認されているものの、屋敷の区画や間取りを推定可能な基壇や、設置された状態の礎石等の検出はみられなかった。また、出土遺物では、陶磁器類や自然遺物は一定量得られているが、調度品や建材を飾る金具や釘等の出土は、近隣の首里城跡や移転後の中城御殿跡の調査成果と比較すると極端に少ない状況にある。

後述する災害に伴う影響も考えられるが、王府により編集された「中城御殿御教督御普請日記」には、移転に際し、古御殿を解体して古材を有効利用することや、廃材の有効活用も記されていることから、建材となる遺物が少ないのはこれが要因と考えられ、今回の調査はその一端を裏付ける成果として貴重である。

④史料にみえる災害から復興までの痕跡を残す遺跡

本遺跡の各時期の調査成果を俯瞰すると、17世紀末以降は特異な様相を呈することが判明している。

文献史料によると、当該期にたびたび発生した地震や火災により、首里城の被災状況や再建に関する記載があり、周辺の施設もその影響を受けたと考えられる。

本遺跡においては、石積の積み直しに際して琉球石灰岩の代替品となるサンゴ石灰岩が用いられることや罹災時に生じた瓦礫を造成用に搬入した痕跡が確認されている。これらの痕跡は、当時の琉球国内の情勢を知ることができるとともに、地震や火災の記録を裏付け、災害後の対応や復興の過程を知る上で、非常に重要な成果と言える。

⑤考古学や歴史学、建築学、民俗学等、多面的に総合的な調査・研究を推進しうる条件を兼ね備えた遺跡

中城御殿跡の調査では、創建から校舎建設まで複数回の造成が実施されたことが判明しており、造成工事の年代や内容等、中城御殿内の拡張の様相を示す貴重な成果が得られている。

また、石組土坑や水場遺構といった各時期に共通する遺構が数多く確認されていることから、当時の土木技術水準や土地利用の変遷、その背景にある生活様式の変容を知る上で、きわめて高い価値を有する。

さらに、中城御殿跡内の区画石積や隣接する真和志村跡(道遺構)といった首里古地図に符合する遺構がある中、石組土坑や水場遺構等の古地図に描かれぬ遺構も確認されており、絵図や記録に残らない施設の種別についても注目される。

これらの状況を含め、中城御殿跡は考古学をはじめ、歴史や建築学、民俗学等、多面的に総合的な調査研究の対象とならう学術的・文化的価値の高い遺跡であることから、今後も学際的な研究の場での活用が期待される。

⑥活用の際に多くの可能性を有する遺跡

発掘調査により検出された遺構の多くはその後、埋戻され、地中に保存されているが、調査期間中には首里高校の生徒や学校関係者を招いて、現地説明会を開催し(図59・60)、校舎内では出土遺物を用いた説明会(図61)、遺構の写真パネルや出土遺物が展示される等、当時の琉球王国の世子の暮らしを想像させる生きた教材として活用されている。また、令和6(2024)年度には、調査成果をまとめた遺跡説明板を裏門付近に設置することになっており(図62・63)、首里高校の生徒や首里地区の方々を中心に周知をはかるとともに、地域における文化財の保存継承へつながることが期待される。

以上、中城御殿跡の遺跡としての価値・評価についてまとめてみた。

この中城御殿(首里高校内)については、首里古地図以外にその姿が確認できる情報がなく、尚豊王代(在位1621から1640年)に創建されたことや1875(明治8)年に移転したこと等が、文献史料に断片的に記載されているのみであった。

しかし、平成25(2013)年度より発掘調査が開始され、中城御殿の遺構が良好な状態で地中に残されていたことが確認された。

本遺跡は調査の当初段階では記録として保存し、遺跡本体は失われてしまう予定であったが、発見された遺構や遺物は多くの情報を有しており、沖縄県の歴史や文化を理解する資料として、地域の方々をはじめとする多くの県民へ活用できると考えられた。

こうした調査成果から、関係機関の協力を得て、現地保存されるに至ったのである。これにより、沖縄戦で焼失してしまった首里のまちなみの一部として存在していた中城御殿跡は、現在も首里高校の下で生き続けている。遺構は目にすることができないが、今後も中城御殿跡が適切に保存・活用されるにあたり、本報告書がその一助となれば幸いである。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成、活用事業等に携わった多くの関係者に厚く御礼申し上げ、総括編のまとめとしたい。



図 59 首里高校生対象の現地説明会



図 60 首里高校生対象の現地説明会



図 62 遺跡説明板設置予定地



図 61 首里高校生への遺跡内容説明会



図 63 遺跡説明板

引用・参考文献

- 新垣力 2003『沖縄出土の清朝陶磁』『紀要 沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2013『17世紀前半～中葉の琉球陶器について―初期無軸陶器にみる薩摩焼の影響』『鹿児島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 有銘倫子 2011『沖縄県内における遺跡出土品』『南島考古』第30号 沖縄考古学会
- 池田榮史・津波古聡 1991『灰軸碗の話』『沖縄県立博物館紀要』第17号 沖縄県立博物館
- 一般社団法人沖縄しまたて協会 2016『琉球の築土構木―土木・技術からみた琉球王国』新星出版株式会社
- 上江洲均 1973『沖縄の民具』考古民俗叢書<12> 慶友社
- 上西高登 2006『備前焼陶片レクチャー1―中世備前焼の変遷―』『備前歴史フォーラム 備前焼・海の道・夢フォーラム2006』～備前焼の歴史と未来像をとめて～ 備前市教育委員会・備前市歴史民俗資料館
- 上原静 2004『考古学からみた沖縄諸島の遊戯史』『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会
- 2011『琉球の埴と煉瓦』『南島考古』No.30 沖縄考古学会
- 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
- 2021『琉球諸島における建物遺構に伴う「石組土坑」の特質と変遷』『総合学術研究紀要』第23巻1 沖縄国際大学総合学術学会
- 2023『考古学資料からみた琉球列島の頭髮関連道具』『沖縄国際大学社会文化研究』Vol.13 No.1 沖縄国際大学社会文化学会
- 上原静・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟 2011『喜名古窯跡(瓦編)』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第35号 読谷村立歴史民俗資料館
- 上原静・宮城綾乃 2007『南東考古資料録(2)グスク時代出土の鉄器と骨器』『廣友会誌』第3号 廣友会
- 大橋康二 1994『古伊万の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 大堀皓平 2021『首里城跡及び周辺の遺跡から出土する瓦の産地と年代の検証』『首里城研究』No.23 首里城研究会
- 2016『沖縄県内に出土する石厨子の分類と編年試案』『よのつち』第12号 浦添市教育委員会文化部
- 沖縄県教育委員会 1998『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(1)―』沖縄県文化財調査報告書第132集
- 沖縄県沖縄史料編纂所 1981『沖縄県史料 前近代1 首里王府仕置』沖縄県教育委員会

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡―下之御庭後・用物座後・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集
- 2001『ヤッチのガマ カンジンバ原古墓群―県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集
- 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第58集
- 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集
- 2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集
- 2016『首里城跡―一銭蔵東地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第80集
- 2016『首里城跡―正殿地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第82集
- 2018『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第95集
- 2018『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(VII)―平成6年度調査の遺物編(4)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第96集
- 2021『中城御殿跡(首里高校内)・櫓園跡―首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集
- 小野正敏 1982『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 神谷厚昭 1999『石材と人間の民俗的・歴史的関わり』『沖縄県立博物館紀要』第25号 沖縄県立博物館
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』
- 財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部史料編集室 2005『沖縄県史 近世』各論編第四巻 沖縄県教育委員会
- 球陽研究会(編) 1974『球陽 読み下し編』沖縄文化史料編成5 角川書店
- 金武正紀 1991『沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁』『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会
- 2003『沖縄出土の産地不明陶器』『貿易陶磁研究』

- No.23 日本貿易陶磁研究会
- 久手堅憲夫 2000 『首里の地名—その由来と縁起—』
南島文化叢書 22 第一書房
- 笹間良彦 1981 『日本の甲冑武具事典』柏書房株式会社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2005 『古伊万里の見方 シ
リーズ2 成形』
2007 『古伊万里の見方 シリーズ4 窯詰め』
2012 『古伊万里の文様集成』
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡X V—陶磁器
分類編』太宰府市の文化財 第49集
- 柴田圭子 2011 『今帰仁城跡出土の明代青花瓷の研究
(1)』『今帰仁城跡発掘調査報告書V』今帰仁村文
化財調査報告書 第29集
- 下地安広・大堀皓平・與那覇恵・具志堅清大(編)
2024 『沖縄近代考古学—考古学からみた沖縄の近代
化と展開—』沖縄考古学会
- 瀬戸哲也 2010 『沖縄における12～16世紀の貿易陶磁—
中国産陶磁を中心とした様相と組成—』『貿易陶磁研
究』No.30 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松
原哲志 2007 『沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀
を中心に—』『紀要 沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵
文化財センター
- 高良倉吉 2018 『尚泰王末期の風水動向の一端—琉球ア
ジア文化論集：琉球大学法文学部紀要』第4号 琉球
大学法文学部
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡
医学部付属病院地点—医学部付属病院中央診療棟・
設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点—』東京
大学遺跡調査室発掘調査報告書 3
- 当真嗣一 1985 『第4章 交通遺跡と金石文 3 石畳
道—』『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・中頭方西海
道(1)・弁ヶ嶺参詣道—』沖縄県教育委員会文化課編
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵
銭調査会
- 那覇市教育委員会 2005 『首里旧真和志村跡 個人住宅
建設工事に伴う緊急発掘調査—那覇市文化財調査
報告書 第68集』
2010 『那覇市内遺跡III—首里金城村跡・首里旧真
和志村跡—』那覇市文化財調査報告書 第82集
2012 『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備事業に
伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書 第91
集
- 東恩納寛惇 1950 『南島風土記—沖縄・奄美大島地名辞
典—』注釈 南島文化史料研究所
- 町田市立博物館 2008 『アジアを慈しむ—茶人の眼と東
南アジア陶磁—』町田市立博物館図録 130集
- 三杉隆敏・榊原昭二 1998 『《新装版》陶磁器染付文様
事典』柏書房株式会社
- 向井互 2003 『タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代』『貿易
陶磁研究』第23号 日本貿易陶磁研究会
- 森田勉 1982 『14～15世紀の白磁の型式分類と編年』
『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 山本正昭 2022 『グスクに見る石積み技法の変遷—石
積み技法の編年化とその高層化を考える—』『沖縄
県立博物館・美術館 博物館紀要』第15号 沖縄
県立博物館・美術館
- 琉球大学地震学研究室ホームページ：[https://seis.sci.
u-ryukyu.ac.jp/](https://seis.sci.u-ryukyu.ac.jp/)



I 区ピット検出状況(南から)



SP92 半截状況(東から)



SP242 半截状況(南から)



SP127 半截状況(南東から)



I 区作業状況(北東から)



SP127 遺物出土状況



SP67 半截状況(北西から)

図版 1 IV層(グスク時代)の遺構 1



I 区 SK22 遺物出土状況(南から)



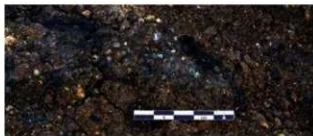
I 区 SK22 半截状況(南から)



I 区 SK22 半截状況(南から)



I 区 SK56 横出状況(北から)



I 区 SK56 ピーズ出土状況(北から)



VII区 SL7001 半截状況(東から)



I 区 SK22 作業状況(南から)

図版 2 IV層(グスク時代)の遺構 2



I 区 SM19 完掘状況(北から)



I 区 SM19 北側立面(南から)



I 区 SM19 半截状況(北から)



I 区 SM21 完掘状況(西から)



I 区 SM24 完掘状況(西から)



I 区 SM24 遺物出土状況



I 区 SM24 南側立面(北から)

図版 3 IV層(グスク時代)の遺構 3



I 区 SX42 完掘状況



I 区 SX42 排水溝状遺構完掘状況(北から)

図版 4 IV層(グスク時代)の遺構 4



I 区 SA 3 立面(北から)



I 区 SA13 立面(北から)



IV区 SA4002 平面(西から)



IV区 SA4002 立面(北から)

図版 5 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 1



VII区 SA7001 検出状況(西から)



VII区 SA7001 南東側立面(北西から)

図版6 III-3層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構2



I 区 SA19 立面(北から)



I 区 SA19 検出状況(東から)



I 区 SA23 立面(北東から)

図版 7 III - 3 層 (中城御殿創建～17世紀代)の遺構 3



I 区 SA23 検出状況(北から)



I 区III - 3 層作業状況(北東から)



I 区 SA9(右)・SA16(左)検出状況(東から)



I 区 SA9(右)・SA16(左)検出状況(北東から)

図版 8 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 4



Ⅲ区 SA3001 立面(南西から)



Ⅲ区 SA3001 検出状況(北西から)

図版9 Ⅲ-3層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構5



III区 SA3001 作業状況(西から)



III区 SD3003 検出状況(北から)



III区 SD3003 立面(南から)



III区 SA3001 門部分立面(南から)

図版 10 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 6



Ⅲ区 SA3001 門部分立面(南東から)



Ⅲ区 SA3001 シャコガイ出土状況



Ⅲ区 SA3001 遺物出土状況



Ⅲ区 SA3001 炭層検出状況(北から)



Ⅲ区 SA3001 作業状況(南西から)

図版 11 Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 7



Ⅲ区西 SA3001 立面(南から)



Ⅲ区 SD3005 検出状況(東から)



Ⅲ区西 SA3001 立面(北から)



V区 SA5004 立面(南西から)

図版 12 Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 8



Ⅲ区西調査区北側完壁状況(東から)



Ⅲ区西調査区南側完壁状況(東から)

図版 13 Ⅲ - 3 層 (中城御殿創建～17世紀代) の遺構 9



I 区 SM12 完堀状況(北から)



VII区 SM7001 立面(北から)



III区 SM3002 半載状況(北から)



III区 SM3002 遺物出土状況



I 区 SM8 完堀状況(南から)



I 区 SM8 立面(北東から)



I 区 SM13 完堀状況(東から)



I 区 SM13 断ち割り状況(東から)

図版 14 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 10



VI区 SM6004 完掘状況(西から)



VI区 SM6005 完掘状況(西から)



VI区 SM6005 半載状況(西から)



VI区作業状況(南から)



III区 SM3001 作業状況(西から)

図版 15 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 11



Ⅲ区 SM3001 完掘状況(北西から)



Ⅲ区 SM3001 半掘状況(北から)

図版 16 Ⅲ - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 12



VIII区 SM8001 作業状況(南東から)



VIII区 SM8001 完掘状況(北から)



VIII区 SM8001 立面(東から)



VIII区 SM8001 作業状況

図版 17 III - 3 層(中城御殿創建～17世紀代)の遺構 13



図版 18 I 区作業風景遠景





I 区 SA 2 検出状況(北から)



I 区 SA 2 立面(北から)



I 区 SA 2 断面(西から)



I 区 SA 2 作業状況(北東から)



I 区 SA 2 周辺作業状況(西から)

図版 19 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 1



IV区 SA4001 検出状況(北東から)



IV区 SA4001 立面(北から)



IV区 SA4001 天端近景(北から)



IV区 SA4001 サンゴ石灰岩(北から)



IV区 SA4001 近景(北から)



IV区 SA4001 琉球石灰岩(北から)

図版 20 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 2



IV区 SA4001 検出状況(北東から)



V区 SA5005 検出状況(北西から)



V区 SA5005 立面(北西から)



IV区 SS4001・SM4002 完壁状況(西から)

図版 21 III - 2層(17世紀末以降)の遺構 3



I 区 SS24 検出状況(北西から)



I 区 SS24 階段状遺構(西から)



I 区 SS24 排水用の穴(南から)



I 区 SS24 井戸検出状況(南から)



I 区 SS24 作業状況(南西から)

図版 22 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 4



I 区 階段状遺構検出状況(北東から)



I 区 階段状遺構検出状況(北から)

図版 23 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 5



I 区 SA24・SA25 検出状況(南西から)



I 区 SS21 検出状況(南西から)



I 区 SD20 検出状況(東から)



SD20 立面(北から)



I 区 SD19 立面(北東から)

図版 24 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 6



SA24・SA25・SS26・SS27 検出状況(南東から)



I 区 SA12 立面(東から)



I 区 SA15 立面(北西から)



I 区 SA14 立面(東から)



I 区 SA14 作業状況(北東から)

図版 25 III - 2 層(17世紀末以降)の遺構 7



I 区 SA1 立面(北東から)



I 区 SA1 立面(北から)



I 区 SA1 西端検出状況(北から)



I 区 SA1 検出状況(北東から)

図版 26 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 1



I 区 SA1(右)・SA29(中央)・SA22(左)検出状況(西から)



I 区 SA1(手前)・SA29(中央)・SA22(奥)検出状況(北から)

図版 27 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 2



I 区 SA29 立面(北から)



I 区 SA22・SA29 断面(西から)



I 区 SA22 検出状況(西から)



I 区 SA22 立面(北から)



I 区 SA22 作業状況(西から)

図版 28 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 3



I 区 SA7 検出状況(西から)



I 区 SA4・SA7 交差部(西から)



I 区 SA4 検出状況(北西から)



I 区 SA4 断面(西から)

図版 29 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 4



I 区 SA4・SA7・SA26 検出状況(北東から)



I 区 SA26 検出状況(南西から)



I 区 SA26 作業状況(南から)



I 区 SA7(手前)・SA26 立面(西から)

図版 30 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 5



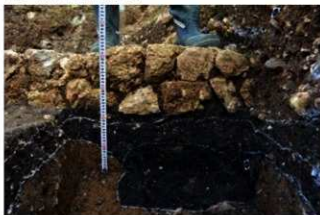
IV区 SA4003 検出状況(東から)



IV区 SA4003 検出状況(北東から)



IV区 SA4003 断面(東から)



IV区 SA4003 堆積状況(南から)



IV区 SA4003 作業状況(西から)

図版 31 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 6



III区 SM3003 完掘状況(東から)



III区 SM3003 遺物出土状況(北西から)



III区 SM3007 完掘状況(南から)



III区 SM3008 完掘状況(南から)



III区 SM3 完掘状況(南から)



III区 SM3 漆喰塗布状況(東から)



III区 SM16 半掘状況(南から)



III区 SM10 完掘状況(東から)

図版 32 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 7



I 区 水堀遺構検出状況(南西から)



I 区 SE3 検出状況(南から)



I 区 水堀遺構作業状況



I 区 SE3 立面(北から)



I 区 水堀遺構作業状況

図版 33 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 8



I 区 SS5・SS6 検出状況(北東から)



I 区 SS5 検出状況(南から)



I 区 SS6 検出状況(南から)



I 区 SD2 検出状況(南東から)



I 区 SD2 立面(北から)

図版 34 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 9



I 区 水溜部完場状況(南から)



I 区 SA6 立面(西から)



I 区 SA6 立面(西から)



I 区 SA8 立面(南から)

図版 35 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 10



I 区 洞穴遺構完掘状況(南東から)



I 区 洞穴遺構完掘状況(南から)



I 区 洞穴遺構完掘状況(南から)



I 区 洞穴遺構完掘状況(南西から)



I 区 洞穴遺構作業状況

図版 36 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 11

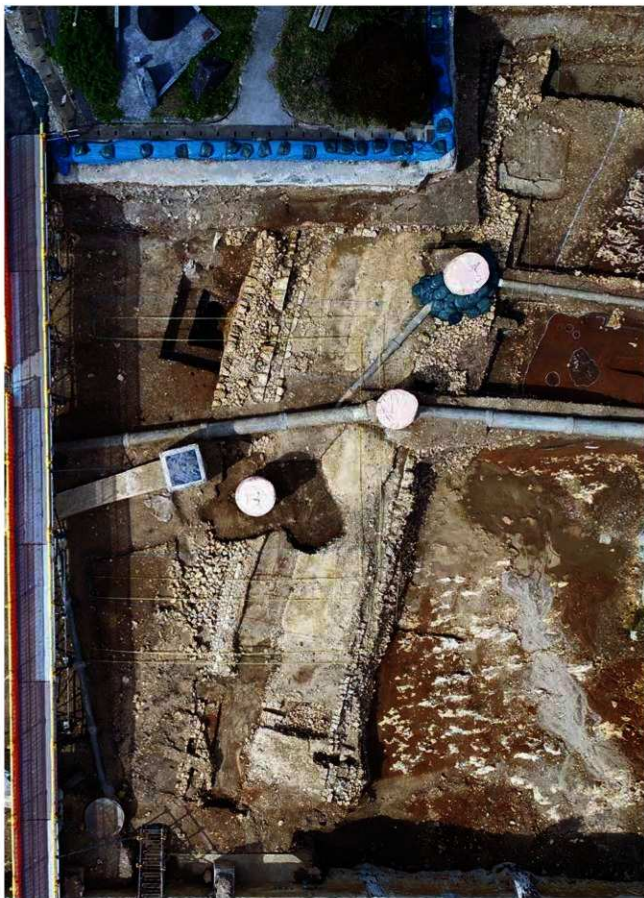


V区 調査区遠景(西から)



V区 SF5001 検出状況(南から)

図版 37 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 12



V区 SF5001 検出状況(南から)

図版 38 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 13



V区 SA5001・SD5001 検出状況(西から)



V区 SA5001 立面(西から)



V区 SA5003 立面(西から)



V区 SA5003・SD5002 検出状況(北から)

図版 39 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 14



V区 SD5002 検出状況(北から)



V区 SD5002 立面(北から)



V区 SD5002 作業状況(南東から)



V区 SD5002 検出状況(南から)

図版 40 III - 1 層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 15



V区 SD5006・5007 検出状況(南東から)



V区 SD5006 立面(北西から)



V区 SD5006 検出状況(西から)



V区 SD5006 立面(北から)



V区 SF5001 作業状況(北西から)

図版 41 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 16



VII区 SF7001・SD7001 検出状況(北から)



VII区 SD7001 検出状況(北から)



VII区 SD7001 立面(東から)



VII区 SD7005 検出状況(南から)



VII区 SD7005 立面(南から)

図版 42 III - 1 層 (18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 17



正門新設工事箇所 石敷遺構検出状況(北西から)



正門新設工事箇所 小竈敷面検出状況(北から)



石敷遺構 検出状況(北西から)



石敷遺構 近景(北から)



正門新設工事箇所 作業状況(南西から)



石敷遺構 溝跡検出状況(南から)

図版 43 III - 1層(18世紀～中城御殿移転まで)の遺構 18



Ⅲ区 SA3002 立面(西から)



Ⅲ区 SX3005 完壁状況(南東から)



Ⅲ区 SA3006 検出状況(南から)



Ⅰ区 SG群検出状況(東から)



Ⅷ区 SA8001・SA8002 検出状況(北東から)

図版 44 Ⅰ・Ⅱ層(近現代)の遺構 1



III区 SD3001 検出状況(西から)



IV区 SD4001 完壁状況(南から)



IV区 SD4001 近景(南から)



V区 SD5004 検出状況(北から)



I区 SE1 半截状況(北から)

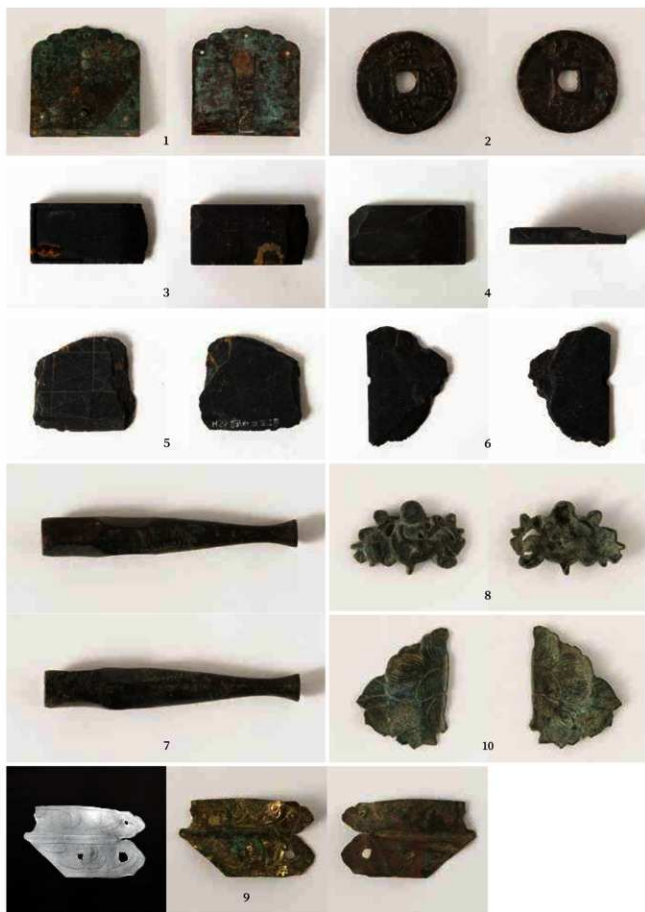


I区 SM2 完壁状況(西から)

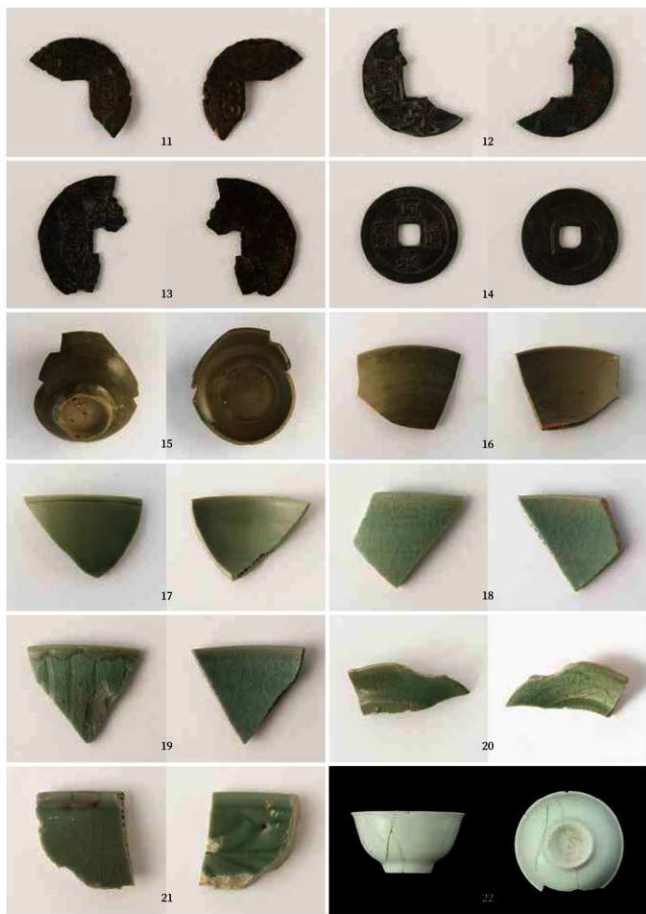


III区 SM3005 遺物出土状況(北から)

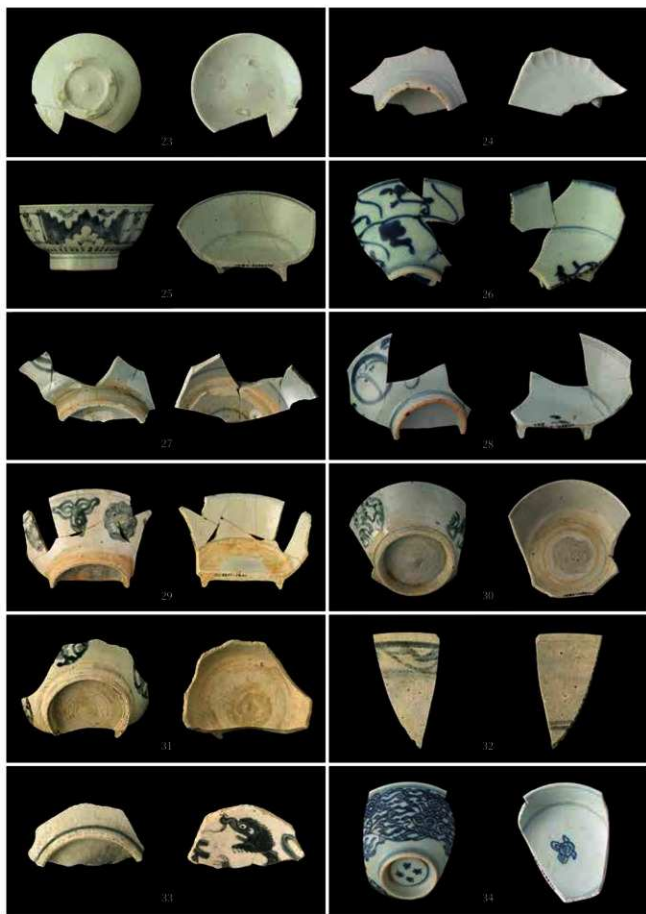
図版 45 I・II層(近現代)の遺構 2



図版 46 I・II層出土遺物



図版 47 II・III・III - 1層出土遺物



図版 48 III - 1 層出土遺物



図版 49 III - 1 層出土遺物



図版 50 III - 1 層出土遺物



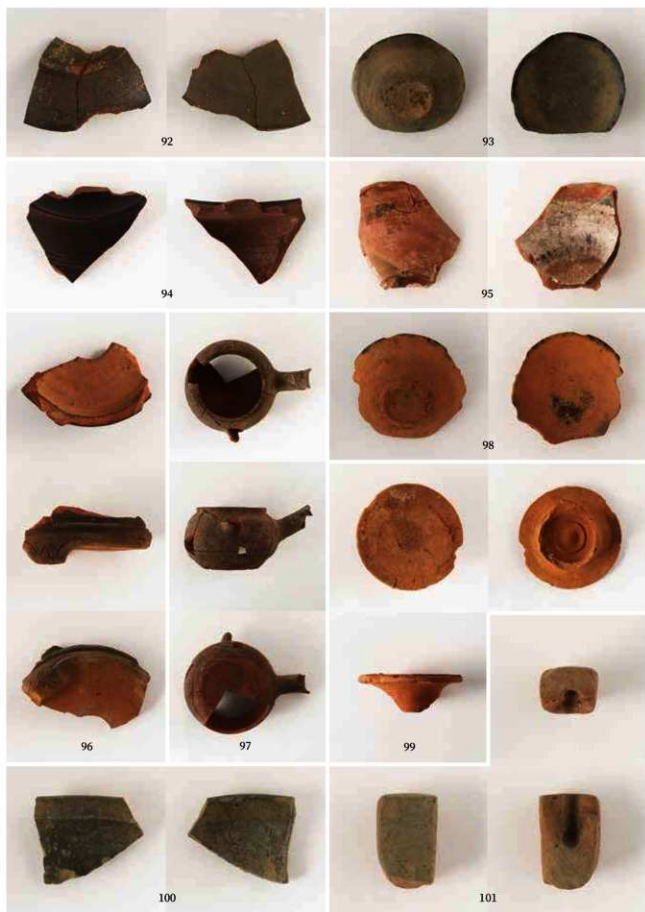
図版 51 III - 1層出土遺物



図版 52 III - 1 層出土遺物



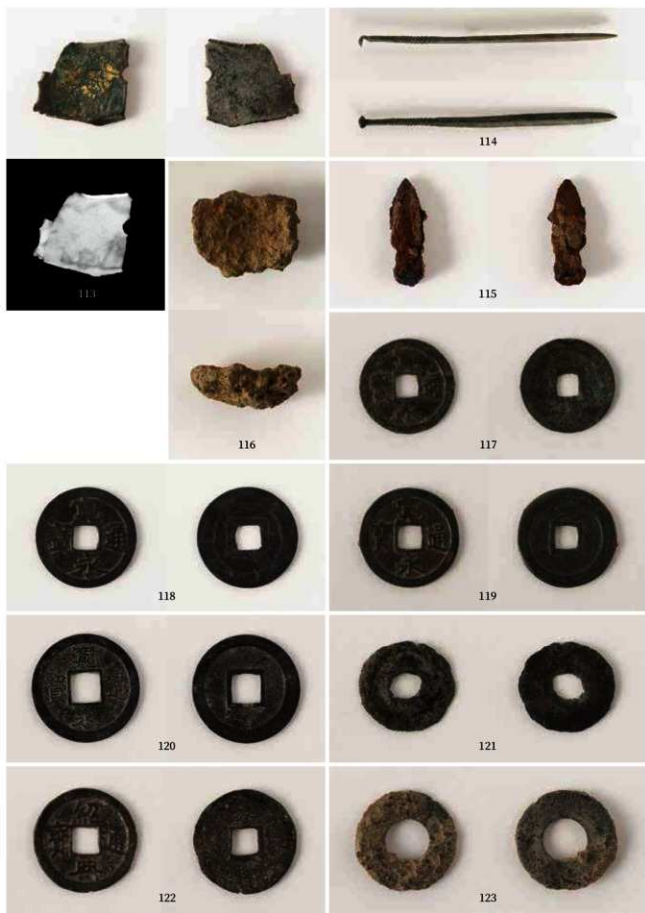
図版 53 III - 1層出土遺物



図版 54 III - 1層出土遺物



図版 55 III - 1層出土遺物



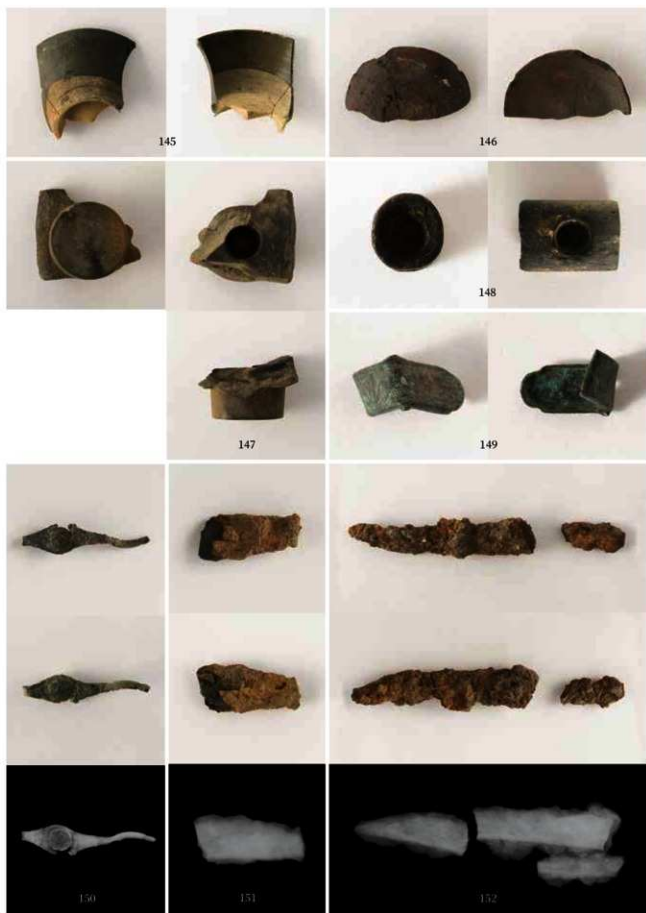
図版 56 III - 1層出土遺物



図版 57 III - 1・III - 2 層出土遺物



図版 58 III - 2 層出土遺物



図版 59 III - 2 層出土遺物



図版 60 III - 2・III - 3層出土遺物



図版 61 III - 3 層出土遺物



図版 62 III - 3 層出土遺物



図版 63 III - 3 層出土遺物



図版 64 III - 3層出土遺物



図版 65 III - 3・IV層出土遺物



図版 66 IV層・不明出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくどうんあと(しゅりこうこうない)そうかつへん							
書名	中城御殿跡(首里高校内)総括編							
副書名	首里高校校舎改築に伴う発掘調査(4)							
巻次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	照屋匠美 大堀皓平 金城翼 久場大輝 花城媛子 古堅あゆみ 丸山真史 高橋遼平							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7				TEL 098-835-8752			
発行年月日	令和7(2025)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因	
	市町村	遺跡番号	緯度	経度				
中城御殿跡 (首里高校内)	沖縄県那覇市 首里真和志町2丁目	472018	—	26°13'10" 127°42'45"	2013.07.29～ 2015.02.27 2017.08.24～ 2018.04.27 2018.09.12～ 2019.04.24 2021.03.02～06.11 2021.07.14～10.26	5,230㎡ 1,220㎡ 847㎡ 216㎡ 280㎡ 計7,793㎡	首里高校校舎改築に伴う記録保存調査	
真和志村跡 (道遺構)	沖縄県那覇市 首里真和志町2丁目	472018	—	26°13'10" 127°42'45"	2018.09.12～ 2019.04.24 2021.03.02～06.11	56㎡ 10㎡ 計66㎡	首里高校校舎改築に伴う記録保存調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	グスク時代		柱穴、土坑、石組土坑		中国産陶磁器、東南アジア産陶磁器、金属製品、ガラス製品、高麗系瓦、石製品		中城御殿創建以前のグスク時代の遺構・遺物を確認した。
		近世		柱穴、土坑、石組土坑、石積、階段状遺構、一括廃棄遺物、石敷、井戸		中国産陶磁器、東南アジア産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石製品、骨製品、貝製品、金属製品、明朝系瓦、石製品		近世は検出した遺構や造成土の状況から3つに区分することができ、各時期の屋敷内構造を確認した。
		近代～現代		石組土坑、集石遺構、石列、井戸		中国産陶磁器、タイ産陶器、沖縄産陶器、ガラス製品、金属製品、明朝系瓦		中城御殿移転後の遺構も確認され、首里高校に関連する遺構・遺物も見られた。
真和志村跡 (道遺構)	道跡	近世～近代		道跡、溝、暗渠		中国産陶磁器、東南アジア産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、ガラス製品、金属製品、明朝系瓦、石製品		暗渠の確認により、樋園跡と大実御殿跡の境界が判明した。
要約	中城御殿は国王の世子が暮らしした邸宅跡で、近世初期に創建され、1875(明治8)年に那覇市首里大町中の龍潭の北側に移転した。移転後の当地区は、沖縄県立第一中学校を経て、現在の首里高校となっている。 発掘調査は首里高校校舎改築に伴い行われた。当初、記録保存調査として実施していたが、中城御殿創建に先立って行われた造成工事やそれに伴う多くの遺構・遺物が良好な状態で確認されたため、関係各機関と調整を行い、一部を除き多くの遺構が現地保存されている。 調査の結果、沖縄戦や戦後の造成により一部消失するものの、グスク時代、近世、近現代の遺構、遺物が確認され、敷地内構造や当地地を利用した人々の暮らしを確認できる資料がえられている。また、文献史料や1700年代に描かれたとされる首里古地図等と合わせ、首里城跡を中心とする首里地域の一端についても確認した。							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第118集

中城御殿跡(首里高校内) 総括編

—首里高校校舎改築に伴う発掘調査(4)—

発行年 令和7(2025)年3月25日
発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098(835)8751(総務班)・8752(調査班)

印刷 株式会社アント出版
〒903-0804
沖縄県那覇市首里石嶺町4丁目291-1
TEL 098(840)3777
